WILD　GUNNER

樹文緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＷＩＬＤ　ＧＵＮＮＥＲ

【Ｎコード】
Ｎ４８６５Ｗ

【作者名】
樹文緒

【あらすじ】
人類にとって未来のない、呪われた世界に生まれた《最後の世代》である主人公とヒロインが、惑星の未来を切り開くために荒野を旅する物語です。

【THE　ZERO　BULLET――?約束?――】

此処は《惑星・アクアルド》

人間の業により水源の殆どが涸れ果て、乾き死に絶えた荒野がどこまでも広がる世界。
惑星の怒りを買った人類はその身に呪いを刻まれたという。

ある時を境に人類は、後世に歴史を伝える術を失った。
つまりそれは、二度と子どもが生まれないという事に他ならなかった。

また、幾種にも及ぶ動物の殆どが、この過酷な環境では生きては行けず、否応なく望まぬ生き方を余儀なくされた。

清き水の代わりに人間を襲い、その血液で身体の渇きを潤した。

結果。

動物のほとんどが突然変異をきたし、元の姿とは似ても似つかぬ存在へとなり果てた。
それが水を求めて彷徨う荒野の獣――魔獣である。

そんな荒野に於いて、人々は人類の滅亡を悟りながらも、どうすることも出来ない世界を前に緩やかに滅びゆくしかないのだという諦観の元に――――――

今もなお大地にしがみついていた……。

【THE　FIRST　BULLET――？交わした約束？――】

「――ヴァン！　危ないから下がっていなさい」
普段は穏やかな農村――『レーデリート』が今、魔獣の襲撃を受け、只ならぬ緊迫感に包まれていた。
村人たちが見守る中、魔獣と対峙しているのはひとりの男。
頭にはテンガロンハットを被り、首にはネッカチーフ。シャツの上には茶色を基調としたベスト、ややだぶついたジーンズの腰にはガンベルトを装着し、足下は皮革製のブーツで固めた装いのガンナーだった。
「お父さんっ……！」
ガンナーに向けて声を張り上げた少年は、先程『ヴァン』と呼ばれた少年だった。
年齢は十四歳ほどだろうか。見るからに幼い容貌だ。少年は腰に紐を巻き、そこに魔獣の骨を削って作ったオモチャを差している。おそらくその骨は銃のつもりなのだろう。現にヴァンはその骨を腰から引き抜くと、魔獣に向けて構えている。
「こら、ヴァン。お父さんの邪魔になるでしょ……！　早くこっちに来なさい」
震えながらも狙いを定めようとするヴァンの手を、ひとりの女性が引いた。
「なにするんだよ、お母さん！　僕だって戦うんだから……！　離して……離してよ！」
「いけません！　あとでお父さんに怒られても知りませんよ？」
「うっ……！」
母親の言葉にヴァンは思い留まった。
それほどまでにヴァンにとって父親の存在は大きく、同時に畏敬に値する人物であった。
気持ちを切り替え、ヴァンは父親の戦いを脳裏に焼き付ける。

対峙する魔獣は一体。
全長１４フィートは優に超える、牛型魔獣――『バイルデ』だ。
バイルデは突進に備え、地面を何度も踏みならしている。
対する父親は、いつでも銃を抜ける体勢でタイミングを窺っている。
西風が吹き、砂塵を巻き起こす。
心音さえ聞こえてきそうなほどに場が静まり返り、緊張の糸がキリキリと張り詰めていく。
そんな静寂を破ったのはバイルデだった。
殺気を籠めて勢いよく地面を蹴り疾駆。その巨大な角で父親を串刺しにせんと襲い来る。
バイルデの動きを受けて、父親がホルスターに収められたリボルバーを素早く抜いた。
――！！　――！！　――！！
それはまさに神業だった。
父親が撃ち放った弾丸はバイルデの急所に命中し、一瞬にして屠り去ったのだった。
魔獣の討伐に村中が歓喜に湧いた。
父親はバイルデの死骸を怪訝な眼差しで見詰め、程なくしてリボルバーを腰のホルスターへと収めた。
「すげぇ……！　すげぇすげぇ！　やっぱりお父さんはカッコイイや！」
ヴァンは瞳を爛々と輝かせて、ありのままの思いを口にする。
誰もが喜びに湧きながら村へと引き揚げていく最中、ふと振り返ったヴァンは視界の端にある人影を見た。
「――！」
それはヴァンと同じく十四歳ほどの少女だった。
見知った顔を認めたヴァンが、手を振って少女に呼び掛けようとした……その時。
「――ジェシカ！？　――ッ」

ヴァンは少女の背後にバイルデの姿を見たのだった。
――逃げろ！
そう叫ぶより早く、ヴァンは駆けだしていた。
勝算などない。
ただ、少女を守りたいがために、ただそれだけを考えて駆けた。
ヴァンの行動に、数十秒遅れて父親が異変に気付いた。
だが、銃で撃退するにはあまりにも距離がありすぎた。
ヴァンの後を追うように、父親も地を蹴った。
その間にもバイルデは、その巨体を武器に少女を押し潰そうとするところだった。
「ジェシカアアアアアアアアアアアアアアアアアアっ！！」
渾身の咆哮を上げ、ヴァンは腰に差した？骨？を抜くと、全力で投擲した。
ヴァンが擲った骨は、運良くバイルデの眼に当たり、僅かだがその行動を遅らせることに成功した。
運に助けられたヴァンは身を挺して飛び込み、ジェシカを抱えて地面を転がった。その直後、数瞬前までジェシカが居た場所に、バイルデの蹄形が穿たれたのだった。
紙一重の攻防にヴァンの全身から汗が噴き出す。
それは死という恐怖からくる冷や汗。
ジェシカと呼ばれた少女は恐怖からか、気絶しているようだった。
ヴァンの攻撃で一層凶暴化したバイルデは、再びヴァンたちを押し潰そうとその前肢を持ち上げた。
「〜〜〜〜〜ッ！！」
もはや抗う術などない。
女の子ひとり守れないなんて、自分はなんて無力なんだ。
頭上から迫り来る巨大な蹄を見詰めながら、ヴァンは己の無力さを嘆いた。
ジェシカを抱える腕に力を籠めて、少女に謝ろうとした――次の瞬間。

――！！　――！！　――！！

「――！？」

大きな銃声が響いたかと思えば、目の前でバイルデの巨体がゆっくりと傾き始め、やがて砂埃を上げて地面に倒れたのだった。

「大丈夫か、ヴァン！？」

「お父さん……」

「ヴァン！　大丈夫！？　まったくアンタは、平気で無茶をするんですから……！」

父親に続き、母親もヴァンの元に駆け寄って来た。

「お母さん……。……ごめんなさい。ジェシカを助けなきゃって思ったら……つい」

「つい……じゃないですよ。もう。ジェシカちゃんを助けようとしたことは立派ですけど、一歩間違えれば二人とも殺されていたかも知れないんですよ？　もう少し冷静に行動なさいな」

「……ごめんなさい」

しゅんと項垂れるヴァンに、父親は優しくかばう。

「まぁ許してあげなさい。結果的にジェシカ嬢ちゃんを助けることが出来たんだから。今回の事は、バイルデは二体で行動する習性があると知っておきながら、その確認を怠った私にこそ非がある。事に気付いた時点であの距離だ……ヴァンが助けなきゃ、今頃ジェシカ嬢ちゃんの命は奪われていただろう……。お手柄だったぞ、ヴァン」

「うん！　お父さん、僕ね、お父さんみたいなガンナーになりたいんだ！」

「ヴァン……お前……」

父親が驚きの表情を浮かべていると。

「……私も……ガンナーになりたい……」

「ジェシカ！　大丈夫？　どこも痛くない？」

「うん、大丈夫。助けてくれてありがとうね、ヴァンくん」

「へへっ。お安いご用さ！」

ヴァンは鼻をこすって笑顔で答える。
「……ジェシカ嬢ちゃんまでそんなことを……。本気なのかい？」
父親は心配そうな眼差しで問う。
「はい。本気です。ジョセフおじさま」
「……そりゃ……なんでまた。ガンナーにならずとも、村で生きていくことは出来るんだよ？」
父親――ジョセフの問い掛けに、ジェシカはヴァンを一瞥してから答えた。
「それは、ヴァンくんと約束したからです」
ジョセフは意外そうに眼を見開いて、低く唸ってから言葉を継いだ。
「約束？」
「はい。私たちは大きくなったら荒野に出て、《オアシス》を探しにいくと約束しました」
「《オアシス》だって？　君たちはあんな涸れた伝説を信じているのかい？」
――《オアシス》。
それはこの惑星・アクアルドに伝わる伝説。
世界の何処かには、荒野の乾きすら潤すほどの水源――《オアシス》があると伝えられている。
荒野に生きる者にとって水は貴重な資源。
大量の水さえ見つけられれば、地位や名誉や富に至るまで、すべてが思いのままになる。
そんな欲に溺れた匪賊たちが、こぞって《オアシス》を探し求め、荒野中を駆け回ったが、結局誰一人として《オアシス》を見つけることは叶わなかった。
やがて人々は《オアシス》の伝説を絵空事――《涸れた伝説》だと嘲り信じなくなっていったのである。
「はい。信じています。だって、《オアシス》が見つかれば、人はもっと豊に暮らせるのでしょう？　だったら私は、そんな未来に希

望を託したいです」
「……」
ジェシカの真っ直ぐな思いに、ジョセフを始め、大人たちは一様に口を噤んだ。
それは「このまま滅びるしかない」と諦めている心に対し、強烈に抉り込んでくる言葉だったから。
かつては《オアシス》を探し求めた身であるジョセフにしてみれば、その衝撃はなおさらのことであった。
まだ幼い子どもたちが、これほどの希望を抱いているというのに……自分たちのなんと不甲斐ないことか。
その場に居る誰もが、そんな表情でジェシカを見つめていたのだった。
「ヴァンもそのつもりなのかい？」
「う……うん。……今まで黙っててごめんなさい……」
活発なヴァンといえど、どうしてもジョセフの前では萎縮してしまうようだった。
小さい身体をさらに小さくして気持ちを伝えるヴァンに、ジョセフは優しく語り掛けた。「ちゃんと顔をあげろ。何もお前たちの覚悟を咎めようっていうんじゃない」
「……え？　じゃあ」
「ああ。お前たちがそこまで本気だというなら、止めはしない。その眼で荒野のすべてを見て、その肌で荒野のすべてを感じ、確かめて来い。私がかつて抱いた夢を、お前たちに託させてくれ」
「あなたッ！」
ジョセフの言葉に母親がヒステリックな声を上げる。
「いいじゃないか、ヘレン。このまま滅びを待つより、未来に希望を託す方がよっぽど建設的だ。たとえそれが《涸れた伝説》であろうとも……な」
「ですが……」
ヘレンが賛成しない理由はひとえに我が子を想うがゆえだろう。

――魔獣が潜む荒野などに、愛する我が子を行かせたくない。
そんな思いがヘレンの表情からは窺えた。
だが、子どもの夢を応援したいというのも、また親心であった。
「……分かりました。ジェシカちゃんの両親が認めるのであれば、私も二人の夢を応援します」
「お母さん！　ありがとう！」
ヴァンは喜びを露わにして、ヘレンの胸に飛び込んだ。
「ヴァン、ジェシカ嬢ちゃん。ひとつだけ確かめておくことがある。荒野に出るためには最低五年は鍛錬しなきゃならない。今から五年後……すなわち十九歳になったお前たちが希望を抱いて羽ばたける時間はわずか一年しかない。それでも行くかい？」
「あなた……その話は……」
「判っている。だが、私には話さなければならない義務がある。悪いが察してくれ」
「……ですが……」
不安を湛えた眼差しで何かを案じるヘレンを制し、ジョセフは二人を見詰める。
ジョセフの言葉は、まだ幼いヴァンとジェシカにとってあまりにも難しかった。単に覚悟を問われているのだと判断したヴァンとジェシカは無邪気に頷いた。
「うん！　行くよ！」
「……そうか。なら、今日から特訓を始めよう」
「ありがとうお父さん！　僕たち頑張る！　一生懸命特訓して、一人前のガンナーになる」
「特訓だなんて。まだ親御さんの了承も得てないのに……そんな話は気が早すぎますよ」
「ああ、そうか。では、早速訪ねるとしようか。まぁ、訊くまでもないと思うがな」
「……なぜです？」
怪訝な表情で問うヘレンに、ジョセフはあっさりと答えた。

「誰だって子どもの夢は応援したいものだからだよ」
あまりにハッキリと言われた所為か、ヘレンの表情からさっきまでの憂いは消えていた。
「ええ。その通りですわね」

その後。
ジェシカの両親に事の次第を話したところ、二つ返事で了承と相成った。
「やったー！」
ヴァンはジェシカと手を取り合って喜び、改めて約束を確かめ合った。
「ジェシカ！　これから特訓して大きくなったら荒野へ出よう！
そして《オアシス》を探すんだ！」
「うん！　ヴァンくんと一緒なら、荒野だって恐くないよ！」
そうしてヴァンとジェシカの特訓の日々が始まった。

二人が荒野の何処かにあるとされる《オアシス》を探す冒険の旅は――

この日より、五年後に幕を開けるのだった。

【THE SECOND BULLET――？旅立ちと出会い？――】

今日は二人の旅立ちの日。
ガンナーになりたいと告白した日から五年が経ち、ヴァンとジェシカは無事にジョセフの特訓を終えていた。
村の入口にはヴァンとジェシカの両親を始め、村人全員が見送りに集結していた。
「父さん、今日まで特訓してくれてありがとう。母さんも、料理を教えてくれてありがとう。二人のお陰でこの日を迎えられたと思ってる」
ジョセフそっくりな服装で身を固めたヴァンが晴れやかな口調で言った。
ヴァンの隣には機動性を重視しつつも、女の子らしい強かさを兼ね備えた服装のジェシカが佇んでいた。
ふたりの瞳には揺るぎない信念と、荒野で生き抜こうとする強い生命力に満ち溢れているようだった。
「ヴァン……くれぐれも気を付けるのよ。辛くなったらいつでも帰ってきなさい。此処はあなたが生まれ育った村……故郷なのですから」
「うん。ありがとう、母さん」
「ジェシカ。お前はお転婆だからな。あまり無茶をするんじゃないぞ」
「あなたが決めたことですもの。お父さんと一緒に無事を祈ってるわ。たまにはお手紙でも寄越してくれると嬉しいわ。――ヴァンくん、娘をよろしくお願いします」
ジェシカの両親も彼女にエールを送る。
「はい！　任せてください。きっと二人で《オアシス》を見つけてみせますから！」
「お母さん……お父さん。ありがとう。私なら大丈夫だから心配し

ないで。その証として、手紙を書くわ。……それでは、行って参ります」
　両親の躾けの賜物か、ジェシカは淑女然とした物腰で両親に別れの挨拶をして、ゆっくりと踵を返した。
「じゃあ行って来ます！」
　勢いよく腕を突き上げ、ヴァンは高らかに宣言した。
　一歩……また一歩と荒野へ歩み往く息子の背中を、ジョセフは感慨深い眼差しで見詰めていた。
「――ヴァン！」
　不意に息子の名を呼ぶと、ジョセフはホルスターから抜いたリボルバーを放り投げた。
「――！？」
　キレイな放物線を描いて飛んできたリボルバーをヴァンは反射的に受け取った。
　戸惑いを露わに手の中のリボルバーとジョセフの顔を交互に見遣る。
「父さん……これは……？」
「持っていけ。餞別代わりにくれてやる」
「え……でも……」
「私のことなら心配無用だ。そいつがなくとも、魔獣から村を護ることなんざ、私にとっては朝飯前だ。だから遠慮せずに持っていけ。ずっと欲しがっていたモノなんだろ？」
「どうしてそれを……？」
「阿呆。私はお前の父親だぞ。息子のことなんざ、すべてお見通しよ」
　得意気な表情を浮かべてニカッと笑むと、右手を掲げ、ゆっくりと親指を立てた。
「行って来い！　そして《オアシス》を見つけて来い！」
　ジョセフの激励を受け、ヴァンの表情に喜びが満ち溢れる。
　幼き頃よりずっと憧れていた父親のリボルバーが、今は自分の手

の中にある。
父親の片腕に等しいそれを自分に預けてくれたことの意味を心に深く刻んだ。
そしてヴァンは、父親のリボルバーをメインホルスターの銃と入れ替え、その感触に胸を高鳴らせた。
――これがあれば、どんな困難も乗り越えられる。
それほどの確信を抱くほどに。
「……ッ！」
ヴァンは言葉の代わりにサムズアップで答え、再び歩き出した。
村人たちの激励が響く中、ヴァンとジェシカは一度も振り返ることなく、生まれ育った村――『レーデリート』を発ったのだった。
策略、裏切り、暴力が支配する無情なる荒野へと……。

†

「うっしゃー！　探すぜ《オアシス》！」
故郷『レーデリート』を発ったヴァンとジェシカは、古びた地図を頼りに荒野を歩いていた。
太陽がじりじりと照りつける荒野だ。本来なら幌獣車の一台でも欲しいところだろう。
だがふたりは、そんな不満を漏らすことなく歩き続ける。
ヴァンに至ってはもはや遠足気分のきらいすらあるほどだった。
「探すったって、一体何処を探せばいいのかしら？　おじ様に頂いたこの地図……書き込みが多すぎて、どれを目印にすればいいのか判らないわ」
鉄の棒のような物を担いで歩くジェシカが、手元の地図を見てそう言った。
「確かになー。父さんも『地図の意味は自分たちで考えよ』って言って、何も教えてくれなかったもんな」

地面に落ちている石や骨などで遊びながら歩いていたヴァンは、ジェシカと歩調を合わせ、地図を受け取りながら答えた。
ヴァンはジョセフから譲り受けた地図に視線を落とし、低く唸って眉間に皺を刻んだ。
かつてジョセフが《オアシス》を探す際に用いたという地図には、実に様々な走り書きが記されていた。大陸中にある村や町はもとより、一般的な地図には記されていない遺跡の場所まで、事細かに記されていた。
中でも特に目を引いたのが、地図の四方にある赤い×印と、×印で消された『２０』という数字であった。
「その×印、なんだと思う？」
「……《オアシス》の場所……とか？」
ヴァンの答えを数秒かけてしっかり咀嚼したジェシカは、深い溜息を吐いた。
「はぁ……。……前から思ってたけど、あんたってやっぱりバカよ。それが《オアシス》なら、ジョセフおじ様がとっくに見つけてるでしょーが。もうちょっと頭使ってくれなきゃ困るわよ……このバカヴァン」
「うわ、ひっでぇ……。今のはちょっとした冗談じゃんかよー」
「ふーん？　じゃあ早く、まともな意見を聞かせてもらえるかしら？」
ジト目で催促してくるジェシカに、ヴァンは目に見えて狼狽しながら考えを捻り出した。
「……いや、正直《危険区域（ダークゾーン）》としか言えないな」
――《危険区域（ダークゾーン）》。
それは荒野の中でも特に危険とされるエリアであり、一歩足を踏み入れたが最後、生きて帰れた者は居ないと噂される程の場所である。
――曰く、百獣の魔物が潜んでいる。

――曰く、この世とは隔離された世界。
――曰く、生者の命を刈り取る《亡霊》が棲んでいる。

など、様々な噂が大陸各地で囁かれているのだった。
「まぁ、普通に考えればそうよね。……だからこそ、此処に何かが隠されていると見て間違いなさそうね。――じゃあこの『２０』は何かしらね？」
「消してあるんだから意味ないんじゃない？　とにかくその×印のところへ早速行ってみようか？」
「何言ってるのよ、このバカヴァン！　情報を集めるのが先でしょ！　備えもなく飛び込むなんて、自殺行為以外の何物でもないじゃない」
「そうバカバカ言うなよ。今のはちょっとした意気込みじゃんかよー。まずは近くの町へ行くんだろ？　それくらい、僕でも判ってるって」
「判ってるならさっさと方角でも確認しなさいよね」
「よしきた」
ジェシカの指示を受け、ヴァンは獣皮のナップサックからコンパスを取り出し、方角を確認し始めた、次の瞬間。
ヴァンの表情から、それまでの気楽さが消え、眼光に鋭さが宿った。
「……ジェシカ」
ヴァンはホルスターへと手を伸ばしながら、注意を促す。
「ええ……水袋（ランゲン）のニオイを嗅ぎ付けてきたようね……」
ジェシカも既に、辺りに蔓延る不穏な気配を察知していたらしく、神経を研ぎ澄まし眼を光らせている。
其処此処に点在する岩場くらいしか障害物がない荒野では、人間など魔獣にとっては恰好の獲物同然。
時には岩陰から。
時には遥か数十ヤード先から素速く忍び寄り、その鋭い爪や牙で

襲い来る。
それは今回とて、例外ではなかった。
「――来たぞ！」
ヴァンの警告とほぼ同時。
実に十体もの魔獣がヴァンたちを取り囲む形で出現した。
「チッ……こいつら《血眼獣（ブラッドショット）》か。……殺るしかねぇな」
ヴァンが呟いた通り、いずれの魔獣も眼が血走ったように赤く輝いていた。
それは《血眼獣（ブラッドショット）》と呼ばれ、人間に対して害意しか抱かない魔獣の総称である。
《血眼獣（ブラッドショット）》に交渉の余地はなく、一度遭遇するとどちらかが死ぬまで襲ってくる……謂わば《荒野の追跡者（ワイルドストーカー）》。殺るか殺られるか……それこそが無情なる荒野の掟。
二人を囲んでいるのは二種類の《血眼獣（ブラッドショット）》。
一方は虎の変異体『タイグルー』で、もう一方は蜥蜴の変異体『リザーラ』だ。
一体のタイグルーに統率される形で、九体のリザーラが陣形を整えている。
「ジェシカ。細かいのは頼んだぜ。僕はタイグルー（こいつ）を殺る！」
ヴァンの言葉を合図とするかのように、リザーラの群れが目まぐるしく動き出した。
「私の邪魔だけはしないでね」
そう言うとジェシカは担いでいた棒状の鉄塊を素早く変形させ、あっという間に一丁のアサルトライフルを組み立てた。
鋭い爪を振り翳し、迫り来る一体のリザーラをフルバーストで沈めると、俊敏な動きで移動を繰り返し、敵との間合いを取った。
一方でヴァンは、未だにタイグルーと睨み合い、膠着状態が続いていた。
ジェシカはその様子を視界の端で確認しつつ、再び銃を変形させ

ると、一気に間合いを詰めて至近距離で引き金を引いた。
直撃を受けたリザーラは、首から上が吹き飛ばされ、意思無き肉塊と化していた。それ以外にも、腕や脚を損傷したリザーラが多数見受けられた。
ジェシカは間合いを詰める寸前にアサルトライフルからショットガンへと変形させていたのだった。
息つく間もなく、ジェシカは再び距離と取る。
リザーラをおびき寄せるように動き、岩陰へと誘い込む。
岩場を背にして、リザーラと対峙するジェシカ。
七体に数を減らしたリザーラは、追い詰めたとばかりに眼をぎらつかせ、息のあった連携でジェシカへと殺到する。
だが、それらはすべて、ジェシカの計算通りだった。
岩場の凹凸を足掛かりにして駆け上り、華麗に身を翻す。
リザーラの群れを眼下に見ながら、空中で銃を変形。即座に撃ち放った。
発射されたのは４０?グレネード弾だった。
ジェシカの放った弾は丁度、群れの中心に着弾すると同時に爆発し、リザーラを一匹残らず絶命せしめた。
これぞ、対集団戦を得意とする、ジェシカの戦闘スタイル。その真骨頂である。
リザーラの群れを始末したジェシカは、数ヤード先に居るヴァンへと、視線を向けた。
視線の先では丁度、タイグルーが攻撃を仕掛けたところだった。
直後、一発の銃声が荒野に轟いた。
すると攻撃に転じようとしていたタイグルーの動きが止まり、やがてその巨体がゆっくりと倒れ始めた。
よく見るとタイグルーの眉間に風穴が開いていた。それは紛れもなく、ヴァンが撃ち放った弾丸によるものだった。
類い稀なる集中力で、相手を一撃で仕留める技量こそが、ヴァンの持ち味である。

「終わったようね。相変わらず神懸かった精度だこと」
「精密射撃は父さん直伝だからな。一騎打ちなら誰にも負けねぇぜ」
「すごい自信ね。じゃあさ、今度、私と決闘してみない？」
突然の申し出に、ヴァンの顔色が変わった。
「……いや。遠慮しておくぜ。ジェシカの強さは骨身に沁みて理解してるからな」
「あら、光栄だこと」
「変なこと言ってないで、コレ剥ぐの手伝えよな。タイグルーの素材は高値で売れるんだからよ。こうして食い扶持を稼がねぇと、あっという間に立ち行かなくなるぜ」
「ヴァンも、たまにはまともなことを言うのね。ちょっと見直したわ」
「余計なお世話だ」
そうして二人はタイグルーを解体し、牙や毛皮など売れそうな素材を剥ぎ取ったのだった。
「そろそろ出発しよう。このまま歩けば次の町に着くはずだから」
「そうね。とりあえず、何かひとつでも、《オアシス》に関する情報を手に入れないとね」
「ああ！　よっしゃ、行くぜー！」
戦いの疲れなど微塵も感じさせることなく、二人は次なる町を目指して荒野を駆けるのだった。

†

故郷『レーデリート』から北西に１０マイルほど進んだ所に、次なる町があった。
それが商人の町『メルゲル』である。
「うわー……すげぇ！　この世界にこんなにも活気に満ちた町があったなんて！　レーデリートとは大違いだ！」
町に着くや否や、ヴァンは活気ある町並みに興奮しっぱなしだっ

た。
商人の町というだけあってメインストリートには大勢の人たちが行き交い、素材屋（マテリアル）、食材屋（フーズ）、銃器店（ガンショップ）、占術屋（フォーチュン）、古文書館（ライブラリー）、宿屋（イン）、酒場（サルーン）、斡旋所（ギルド）など、様々な店が客相手に商売を行っていた。
「ヴァン。あまりキョロキョロしないで……恥ずかしい」
「まぁそう言うなよ。知らない町を楽しむのも、冒険の醍醐味だろ？」
「はいはい。とにかく。先に素材を売りに行きましょうよ」
「そうだな。え～と……素材屋はまだ先みたいだな」
店の看板を確かめながら、ヴァンはメインストリートを歩き出した。
途中、食材屋の前を通り掛かった際、主人の威勢の良い口上がヴァンの興味を惹きつけた。
「渇いた身体に潤いを！　自家製の《水果（ウォーターフルーツ）》がなんと、一房たったの一〇〇〇クレタ！　一房あれば1クォートの水が確保出来るよ！　さぁ買った買ったァ！　硬貨がなけりゃ同等の物品でも構わないよ！」
食材屋の主人が声を張り上げて主張しているのは、《水果》と呼ばれる植物の実だ。
雨など一滴も降らず、川すら存在しないこの世界において、水は貴重な資源である。
遺跡などの最奥に清潔な水が溜まっていることもあるが、そんな場所には決まって魔獣が棲み着いているものだ。
人々はガンナーを雇い、遺跡に眠る水源の確保を依頼することも日常的に行われている。
だが当然、それだけでは荒野に生きる人々が必要とする水量は到底賄えない。
そんな折りに発見されたのが、この《水果》であった。
《水果》はひとたび地に根を張ると、何処からともなく水を吸い上げ、清潔な水を溜め込んだ実を結ぶのだ。その原理の多くは謎に

包まれ、人々の間では大地に染みこんだ魔獣の血が浄化されて水になっているのでは、まことしやかに囁かれているという。
人々は遺跡に眠る僅かな水源と、この《水果》によって、今日まで過酷な荒野を生き延びて来たのである。
一度の食事に掛かる費用が八〇～一二〇クレタという事を考えれば、水がいかに貴重で高価な物であるかが判るだろう。
「ねぇ、ジェシカ。《水果》買っておかない？」
「必要ないでしょ？　さっき剥いだタイグルーの《獣水（ビスクーア）》があるんだから」
「……ちぇ」
魔獣の血液は、その死後体内で真水に近い成分になるという。それが《獣水》である。
この荒野において、多くの人がガンナーを志す理由のひとつに、それがある。自分で魔獣を仕留めさえすれば、わざわざ高い金を払って水を買うこともないのだ。
もっとも、《獣水》は《水果》に比べ独特な臭いを有しているため、当然価値は低くなる。たまには《水果》の純水を飲みたいというヴァンの気持ちも極自然な事と言えよう。
「あ、あった。素材屋だ」
《水果》に未練を残しつつ、ヴァンは素材屋を見つけ、店内へと入っていく。
「――いらっしゃい」
迎えてくれたのはスキンヘッドの店主だった。かつて魔獣にでも襲われたのか、右目に深い傷が刻まれ、隻眼のように見受けられた。
店主の容貌に怯むことなく、ヴァンはタイグルーの素材をカウンターに並べた。
「おっちゃん、これ換金してくれ」
「ほぅ……タイグルー素材か。こいつはお前たちが倒したのかい？」
「ああ、そうだ」
「へぇ。見てくれは青臭いガキだが、腕は確かなようだな。……並

みのガンナーじゃ返り討ちに遭うタイグルーを、それもお前のようなガキが仕留めるたぁなァ。……気に入った。正規レートの二割増しで買い取ってやろう」
そう言って愉快そうに笑うと、店主は一万クレタ金貨を二枚投げて寄越した。
「ありがとう、おっちゃん」
「へ。なァに。こちとら珍しいもんを見せてもらったからな。……ところでお前さんらは幾つだい？」
「え？　十九歳だけど？」
ヴァンの年齢を聞くや否や、店主は複雑な表情を浮かべた。
「……そうか。じゃあお前さんたちが《最後の世代》の子どもなのだな……」
「……《最後の世代》？」
それまで口を閉ざしていたジェシカが静かに聞き返した。
「なんだ。そんなことも知らんのか？」
店主は憐れむような眼差しでジェシカとヴァンを見遣り、深い溜息とともに言葉を継いだ。
「……この世界はとっくの昔に呪われているのだよ。……いや、世界というより人間そのもが……と言った方が正しいか。今の世界で子どもが生まれることはない。最後に子どもが生まれたのが丁度十九年前だと聞いている。……つまりお前たちの世代だ」
「そんな……。じゃあ、僕たちより年下の子どもって……」
「……ああ。この世には存在せん。もはや人類は死に往くだけの種族だ。昔ほど人の数も多くない。恐らくこの話は真実だろうとワシは考えておるのだよ……悲しいことだがな」
「……」
「……」
店主の話に、ヴァンとジェシカはショックを隠しきれなかった。
この世界の人々が呪われていたということ……
自分たちがこの世界に生きる最後の世代で、もう後には続かない

ということ……
　だからこそ、ジョセフは荒野に出ることを許してくれたのだと、ヴァンは衝撃の内に悟ったのだった。
「……《オアシス》を……」
「あ？」
　崩れそうになる心を必死に繋ぎ止め、ヴァンは言葉を紡いだ。
「……《オアシス》を見つければきっと、呪いだって解けるに違いない！」
「はぁ？　《オアシス》だァ？　そんな蜃気楼みたいな絵空事なんざ、信じるだけ無駄ってもんだぜ。これまで《オアシス》を夢見たガンナーがどうなったか知ってるか？　荒野に飛び出して行ったが最後、ある者は消息不明になり、ある者は荒野の魔力に中てられ精神を病んだって話だぜ。つまりそんなものは何処にも有りはしないってこった。命が惜しくばやめときな。こんな世界だって考えようによっちゃ楽しいもんだぜ」
「その歴史に僕たちが終止符を打ってやる！　見てな、おっちゃん。今に僕たちが、水に困らない、緑豊かな世界にしてみせっからよ！」
「……フッ。若いってのはどんな時代でもいいことだな。可能性に満ちた眼をしやがるぜ――さっきは笑って悪かったな。お前さんたちならワシら大人に代わって、素晴らしい未来を作れるに違いねぇ。良い報せ、待ってらァよ」
「ああ！　任せとけ！」
「そうだ、お前ら。《オアシス》を探してるなら、この先に占術屋と古文書館があっから、もしかすると手掛かりが見つかるかも知れねぇぞ」
「ほんと？　じゃあ早速行ってみるよ」
「おうよ。素材を手に入れたら是非また来てくれ。上客扱いで換金してやっからよ」
「ありがとう。じゃあまたな！」
　ヴァンは店主に礼を述べると、店を後にした。ジェシカもそれに

続き、店外へ出る。
「話せば判ってくれる、いいおっちゃんだったな」
「そうね」
盛り上がるヴァンとは対照的に、ジェシカは素っ気なく相槌を打つ。
「そんなことより、先を急ぎましょ。確かこの先に――」
「……！？」
ジェシカが喋り終わるより先に、ヴァンは町を包む不穏な気配を察知した。
「なんだ？　何かあったのか？」
メインストリートを慌ただしく走る町人の声に耳を傾けてみれば、どうやら中央広場で何かが起こっているらしかった。
「ジェシカ。先に中央広場へ向かうぞ！」
「ええ。どうやらそれが最善のようね」
意見が合致した二人は人混みの間を縫うように駆け抜け、中央広場へと急いだ。
「――！！！？」
中央広場には既に大勢の人集りが出来ていた。
町人たちの視線が注がれる先に、騒ぎの原因があった。
「魔獣……の仔！？」
視線の先にある光景を認めたヴァンが、戸惑いを露わに呟いた。
ヴァンの呟き通り、衆人が見詰める先に居たのは魔獣の仔だった。
しかし魔獣といえど所詮仔共である。本来ならば騒動に値しない。町人たちが驚いている理由は、魔獣の仔がおかれている状況にあった。
「あれは……処刑台……！？」
そう。魔獣の仔は処刑台に晒され、今まさにその命を絶たれようとするところだったのだ。それが《血眼獣（ブラッドショット）》ともなれば納得出来た。しかし、今目の前で殺されようとしているのは害意のない魔獣……動物に近い存在である。

「……このッ……！」
単に『魔獣』というだけで問答無用に殺す世の在り方に逆らっているヴァンが、この事態を見逃すはずがなかった。
「――そんなことをして何になるんだ！？　今すぐその仔を解放しろォッ！」
「「「「「「――！？」」」」」」
衆人の注目が集まる中、ヴァンは堂々とした足取りで処刑台へと上っていった。
ヴァンの姿に気付いた処刑人が苛立ちを露わに詰め寄る。
「なんだ、お前。余所者風情が、余計な口出しは謹んでもらおうか」
「お前にひとつ質問がある。ここで一体なにをするつもりなんだ？」
「ハァ？　見て判んねぇのかよ。魔獣共の見せしめに、こいつを処刑するんだよ。そうすりゃ奴らはしばらく町に近付かなくなる」
「そいつは魔獣でも《血眼獣（ブラッドショット）》じゃねぇ。害意のない相手を自分の都合だけで殺すっていうのか？」
「なんだぁ？　てめぇの歪んだ正義感で物事を計んじゃねぇよ！　ここは商人の町だからなぁ。力無き者は、こうでもしねぇと魔獣から身を守れねぇんだよ！　もうじき奴らが来る……その前に見せしめを作る必要があるッ！　邪魔をするなっ！」
「……その奴らというのは《血眼獣（ブラッドショット）》なんだな？」
「ああ、そうだよ。けど、それがどうしたよ！？」
処刑人の怒鳴り声にも動じることなく、ヴァンは毅然とした態度で静かに告げた。
「その《血眼獣（ブラッドショット）》を倒すことが出来たら、その魔獣を僕に預けてもらえるか？」
「ハァ？　お前が奴を倒すだと？　寝言は寝て言えよ？　けどまぁ、マジでそれが出来るなら、こいつはお前にやってもいいぜ」
「本当だな。約束は守れよ」
「そんな恐え顔しなくたって約束は守るぜぇ。なんたって俺は善良な一般町民だからよォ。魔獣を倒すまで、こいつは俺が預かってお

く。ま、精々頑張りなよ」
どうせ倒せっこないだろうという、人を小馬鹿にした態度で処刑人は約束を交わした。

†

ヴァンが処刑人と口論を演じている最中。
人集りの中に、そんなヴァンの行動を興味深く見詰める者の姿があった。
腰から下げた二丁拳銃が、異様な存在感を放っている。
「これは面白いことになったな。……少し様子を見るか」
声の主はそう呟くと、不敵な笑みと共に静かに広場から姿を消したのだった。

†

「もうヴァンったら……後先考えずに突っ走っちゃうんだから……」
処刑人との交渉を終え、改めて町を散策しながら、ジェシカが溜め息混じりに呟いた。
「細かいことは気にすんなよ。今に始まったことじゃねぇだろ？」
「自覚してる分、余計にタチが悪いのよ……まったく」
「へへっ。悪いな。けど、僕が突っかからなかったら、代わりにジェシカが怒鳴り込んだんだろ？」
「……それは……そうだけど」
性格を見透かされているような一言に、ジェシカはバツが悪そうに視線を逸らした。
「だろ？　だったら僕が突っ込んで正解だったじゃん」
「どういう意味よ……それ」
「え？　だってジェシカが行けば、問答無用に処刑人（アイツ）を血祭りにあげて、魔獣の仔を助けるだろうからな」

歯に衣着せぬヴァンの物言いにジェシカは、引き攣った笑顔を浮かべ、怒り心頭に発した。
「失礼ね！　いくら私でも、そこまで酷くならないわよッ！　なによ、ヴァンのバカ！　――バカヴァン！」
「ひっでぇ。二回も言うことないだろー」
「い～～～～だ！」
すっかりジェシカのご機嫌を損ねてしまったヴァンは弱り気味に肩を竦めると、小さく溜め息を吐いて微笑んだ。
「わかった、わかった。僕が悪かった。謝るよ」
テンガロンハットを脱いで頭を下げた。
ジェシカはヴァンの態度を冷然と見下ろし、
「却下。誠意が感じられない」
と、にべもなく突き放したのだった。
頑なに折れようとしないジェシカの態度に、万策尽きたかと思われたヴァンだったが、辺りを見渡してあることを閃き、自信たっぷりに口火を切った。
「じゃあ、お詫びに酒場でお菓子を奢るよ。もちろんさっき換金したお金は使わずに、僕の小遣いでね。ね？　それでいいでしょ？」
咄嗟に閃いた妙案だけあって、ずっとむくれていたジェシカがヴァンの条件に食いついた。
「……何を頼んでもいいの？」
「も……もちろんだよ」
と答えながらも、あまり高い品だと予算がオーバーするという現実を前に、冷や汗が止まらないヴァンであった。
今、ヴァンの脳裏では「財布に幾ら入ってたっけ」という記憶の掘り返しと「頼むからバカ高いお菓子なぞ扱っててくれるな」という切なる思いが交互に渦巻いていた。
そんなヴァンの思いなど知る由もないジェシカは、満足気な笑顔を浮かべて頷いた。
「いいわ。それで許してあげる。――さ、行きましょ。酒場はすぐ

そこよ」
言うが早く、ジェシカは鼻歌交じりに酒場へと向かっていく。
「……はぁ。これでまた当分……《水果》はお預けだな……」
涙目で呟いたヴァンの未練はジェシカに届くことなく、町の喧噪に掻き消されたのだった。

それからたっぷりと一時間後。
「あー、美味しかった！　ごちそうさま」
「……どういたしまして」
すっかり機嫌を直したジェシカが、酒場から姿を現した。一方のヴァンはというと、辛うじて残った1クレタ銀貨を握り締め、己の愚策を嘆いていた。
「美味しいお菓子も食べたことだし、町を襲う《血眼獣（ブラッドショット）》について情報を集めなくちゃね」
「……ああ、賛成だ」
行動方針が一致した二人は早速、通りを行き交う人々に、町を襲う《血眼獣（ブラッドショット）》についての情報を聞いて回ることにした。
人も大勢居るし、なにより町が直面している危機に関することだ。すぐに詳しい情報が集まるだろうと二人は考えていた。
しかし。
「……ダメだ。誰も教えてくれない……。どうなってんだ」
「要するにこの町の人は筋金入りの商人精神なのよ。こんな世の中だもの……情報だって貴重な商品……情報が欲しければ代価を支払えってことよ……参ったわね」
ジェシカが言った通り、メルゲルの人々は情報の代わりにと、当たり前に代価を要求する。
ヴァンとジェシカにとって、他人との関わりなど無きに等しい。故郷・レーデリートの人々は皆家族同然の関係で、どんなことも訊けば教えてくれた。その事もあり、今回の一件はヴァンたちにとって現実を突きつけられた形の洗礼となった。

このままだと、いつ現れるかも判らない敵の存在に、神経を磨り減らす事態になりかねない。二人にとっても、それだけは避けたいところだった。なぜなら二人には、一日でも早く《オアシス》を探し出すという大いなる目的があるのだ。言うなれば、こんなところで足止めを食らってる場合ではないのである。

「くっそー！　こうなったら片っ端から当たってやる！」

「あ？！　ちょっとヴァン――――」

突然振り返り、駆け出そうとするヴァンを制止しようとしたジェシカだったが。

「――きゃっ！」

「――うおっ！？」

耳に飛び込んできた鈍い衝突音に慌てて振り返ってみれば、見知らぬ少女とぶつかった挙げ句、大量の書物に押し潰されてのびているヴァンの姿があった。

「……はぁ」

あまりのやるせなさに、ジェシカは深い溜め息を吐いた。だが、被害者が居る手前いつまでも呆れているワケにもいかず、ジェシカは女の子に手を差し伸べた。

「ごめんね。大丈夫？」

ジェシカと同じくらいの年齢の少女は手を引かれて立ち上がると、たどたどしい口調でお礼を述べた。

「あ……はい……ありがとう……ございます」

それは荒野では珍しい黒髪の少女だった。おっとりとした容貌に自然な笑顔がよく似合う。場違いなほどに愛らしいドレスから覗く肌は白磁の如き輝きを放っており、背丈はジェシカよりやや高く、5フィートと8インチ程だろうか。黒髪が映える、純白の帽子が印象的である。少女を一言で表すならば、『深窓の令嬢』といった言葉が相応しい。それほどに美しく可憐な少女であった。

「……いててて……。悪い……ケガとかないか？　ちょっと急いでたもんだからさ……」

ようやく我に返ったのか、ヴァンは砂をはたきながら立ち上がると、少女に非礼を詫びた。
「いえ……わたしの方こそ……確認不足で……あの……その……すみません」
少女は目に見えて狼狽え、おずおずと頭を下げた。その姿はどこか、小動物を彷彿とさせた。
「――あ、拾うの手伝うよ」
足下に散らばった書物に気付いたヴァンが、ジェシカに倣って拾い集めた。
「はい。これで全部よ」
「あ……ありがとう……ございます。……わっ……わわっ……！」
一度は全部まとめて手渡したジェシカだったが、ふらふらとよろめく少女を気遣い、三人で分けて持つことになった。
「ところでこれ、全部あなたが見つけてきたの？」
「あ……はい。わたし、こういった古い書物を探し回っている者ですので」
「へぇ《古書収集家（コレクター）》なんだ。……えーと……」
「……あ、申し遅れました。わたし、シンシアと申します。シンシア＝ホワイトです」
自己紹介をして優雅に一礼する。
「シンシアさんっていうのね。私はジェシカ＝トンプソン。――で、こっちは連れのヴァン＝エヴァンスよ。よろしくね」
「あ、はい。よろしくお願いします」
改めて頭を下げたシンシアは、顔を上げるとおっとりした表情で尋ねてきた。
「ところでお二人は、そんなに慌ててどこへ行くおつもりでしたの？」
ヴァンと同レベルに見なされたことに軽い頭痛を覚えながら、ジェシカは処刑人との条件や、《オアシス》を探しに故郷から出てき

た顛末を話した。
「まぁ！　ではあなたたちも《オアシス》を探しておいでですのね？　感激です！」
「え？　あなたたちもってことは……シンシアさんも《オアシス》を？」
「はい。そのために古い書物を探し回っているのです。過去の遺物にこそ、この世界の呪いを解く鍵があるはずですのでっ！」
意気揚々と語り始めたシンシアの熱弁に、ジェシカは半ば圧倒されていた。
ところが。
「おーっ！　すげぇなお前！　そんな昔の文字とかって読めるもんなのか？！　《オアシス》はもう見つけたのか！？　どこにあるんだ！？　一緒に探しに行こう！」
ヴァンはその話に食いつくと、シンシアに負けず劣らずの勢いで騒ぎ立てた。
「ちょっと落ち着きなさい！　このバカヴァン！」
「ぐほあっ！」
ジェシカの膝がヴァンの腹に突き刺さり、痛みのあまりその場でのたうち回った。
ふたりのやりとりにシンシアは「お二人とも仲がよろしいのですね」と、相好を崩すことなく感想を述べた。
やがてヴァンが痛みから回復した頃。
「微力ながら、あなたたちのお力になれるかも知れません。もしよろしければ、わたしの書館にいらしてください。そこで魔獣のことも《オアシス》に関することも、出来うる限りお話しいたしますので」
と、申し出たのだった。
「それはとてもありがたい話だけど……」
シンシアの誘いにジェシカが言い淀む。
なぜなら二人には、情報に見合うだけの代価を支払う術を持ち合

わせていないからであった。
表情を曇らせる二人に、シンシアは穏やかな口調でこう言った。
「ああ。別に代価は要求しませんから、ご安心ください」
「え……？　それホント？」
半信半疑の体でジェシカが問うと、シンシアは極当然のように、
「はい。だってわたし、商人じゃありませんので」
と、にこやかに根本的な理由を述べたことで、ジェシカの不安は解消されたのだった。

シンシアの誘いを受けた二人は早速、善は急げとばかりに彼女の書館を訪れていた。
「これ全部古書なのか……？　……すっげぇ量だぞ？」
書館に入るや否や、ヴァンとジェシカはその圧倒的とも言える蔵書を前に度肝を抜かれた。古書の数々は備え付けの棚では収まりきらず、机や床にまで溢れ出し、雑然と積み上げられていた。
「これでもまだほんの一部ですわ。あまり重要でない書物は倉庫に仕舞っていますから」
「よくこんなにも集めたものね……」
「ええ。《オアシス》を見つけるためなら、どんな努力も惜しみませんわ」
シンシアの現実的な考え方を目の当たりにして、ただ宛もなく夢だけを追って出てきた身のジェシカはバツが悪そうに目を伏せた。それはヴァンとて同じだったのか、柄に似合わず大人しくしている。
そんな二人の心境を知ってか知らずか、シンシアは極自然に話題を切り替えた。
「お二人には《オアシス》のことより先に、この町を襲う魔獣についてお話しした方がよさそうですね」
「そうしてもらえると助かるわ。――で、この町を襲う魔獣って一体何者？」
「ええ。魔獣の名称は『ドラガボラ』。古書にも記されている伝説

の種族、『ドラゴン』にも似た、飛行型の魔獣です。おそらくはかつて存在していた『蛇』の突然変異体ではないかというのが、わたしの見解です」
　それまでのおっとりした表情からは一変、真剣な面持ちでシンシアは語った。
「……ドラガボラ。それがこの町を襲っている魔獣なのね」
「はい。ドラガボラは夜行性で、人が寝静まる夜を狙って襲って来ます。ドラガボラの好物は水……つまりは《水果》ですが、人の血液も好んで飲むだけに、危険極まりない魔獣です」
「数はどれくらいいるんだ？」
　シンシアの言葉に敵の姿を想像しながら、ヴァンが問う。
「それは判りません。単独で来る時もあれば、二体で襲って来た時もあると聞きます」
　神妙な面持ちで質問に答えたシンシアは、記憶を手繰るように虚空に焦点を結び、悲しげに言葉を継いだ。
「これまでもあなたたちのような流れガンナーが、富と名声を得ようとドラガボラの討伐を計画してきました。……ですが、そのすべてがドラガボラの前に為す術無く、返り討ちにされたのです」
　シンシアが語るあまりにも過酷な事実に、ヴァンは無意識に生唾を飲み込んだ。
「それ以来町ではドラガボラの討伐を諦め、魔獣除けの仕掛けを施すことになったのです」
　町の事情を知り、合点のいったジェシカが重々しく口を開いた。
「……それがあの処刑というわけね？」
「ええ……その通りですわ。定期的に町に荷を卸しにくる流れの商人から魔獣の仔を買いつけては、見せしめに殺して魔獣除けにしているのです。そうすればドラガボラは町を襲うことなく、見せしめとなった魔獣の死骸を咥えて去っていくのです」
　その言葉に違和感を覚えたジェシカは、即座に問い返した。
「流れの商人？　商人はこの町で管理しているんでしょ？」

「よくご存じですね。……ええ、基本的にはそうなのですが、その者たちは登録されていない商人でして……自分たちを『グリーン商会』と名乗っていること以外、素性は判らないらしいのです」
「『グリーン商会』……。そんな素性の判らない商人を黙認している理由は……」
「はい。彼らから魔獣の仔を買い付けないと、魔獣除けが作れないからです」
「背に腹は代えられない……ってやつだな。」
話に耳を傾けながら、手近にある書物を拾い読みしていたヴァンが呟いた。
「お恥ずかしながら……その通りです」
町の管理から外れた商人の話に不穏な気配を感じつつも、ジェシカは目の前の問題に思考を切り替えた。
「とにかく。そのドラガボラは《水果》に誘われてくるのよね？」
「ええ……そのはずです。もう何年も前になりますが、この町が初めてドラガボラに襲われた時、もっとも被害が大きかったのが食材屋でしたから……その時大量の《水果》がドラガボラに食い荒らされたと聞いています」
「なるほどね。じゃあこっちから仕掛けて、おびき出してやろうじゃないのよ」
「お二人とも……本当にドラガボラと戦うつもりでして？」
「もちろんよ。何の罪もない魔獣が殺され続けるなんてまっぴらだわ」
「あいつらだって元は普通の動物だったっていうだろ？　つまり世界の被害者なわけだ」
「好きであんな異形になったわけじゃないわ。ましてや人間の都合で殺されていいハズがないのよ」
人間のためだけじゃない。動物たちを元の姿に戻したい一心で、ヴァンたちは《オアシス》を探そうとしている。そんな二人の信念に、今度はシンシアが驚かされる番だった。

「お二人とも、ご立派ですわ。わたしなんて、この荒野に潤いをもたらすことしか頭になくて……魔獣たちのことにまで考えが及んでいませんでした……お恥ずかしい限りです」
　しゅんと項垂れるシンシアに、ジェシカはそっと言葉を掛ける。
「そんなことないわよ。《オアシス》を探すために、これほどの古書を集めるなんて、そうそう出来ることじゃないわ。《オアシス》を探す理由は、人それぞれでいいんじゃないかしら？」
「ジェシカさん……」
「僕も同意見だ。ここにあるような古書って、ほとんどが遺跡に眠ってるんだろ？　そんな危険とされる場所に潜ってまで古書を集め、《オアシス》の手掛かりを探してるなんて、並大抵のことじゃねぇ。僕は素直に尊敬するよ」
「ヴァンさん……。……はい。ありがとうございます……っ！」
　二人に励まされたシンシアは、持ち前の笑顔を弾けさせて、自信を取り戻したのだった。
「敵の習性が判れば打つ手はあるわ。――ヴァン。さっき得た金で《水果》を十房ほど買ってきてちょうだい」
「え？　飲んでいいの？」
　ご褒美をねだる犬のように瞳を輝かせて尋ねる。
「バカ。ドラガボラをおびき出す餌に使うに決まってるでしょ！」
「えー……勿体ない」
「いいから！　つべこべ言わずにさっさと買ってきなさい！」
「なんだよ、ちょっとした冗談なのに……。ドラガボラが喰わなかった分は、僕が貰うからなっ！」
　さりげなく本音を吐き捨てて、ヴァンは市場へと買い出しに出掛けて行った。

†

「――おっちゃん、《水果》十房売ってくれ」

「おう、ボウズ。お使いかい？　ご苦労さん。――ほれ、《水果》十房だ。ウチのは格別に美味いぞ」
「マジかー。くーっ……ますます飲みたくなってきたぜー！」
「なんだ？　ボウズの家で飲む用じゃないのかい？」
「ああ。色々とワケありでね。魔獣をおびき寄せる餌にするのさ」
そう言ってヴァンは、一万クレタ金貨を投げて寄越した。
「魔獣をおびき寄せるだって？　……そういやお前は、さっき中央広場で贄師と言い争っていたボウズじゃないか。まさかその魔獣って、ドラガボラじゃねぇだろうな？」
「ああ、そうさ。僕たちがこの町からドラガボラを追い払ってやるんだぜ。おっちゃん、奴について何か知らねぇか？　一万クレタも買い物したんだ、少しくらい教えてくれよ」
「ん……ああ。……知ってるもなにも、奴に襲われた最初の被害者は俺の店だからなぁ。あの時は売り物の《水果》が殆ど台無しにされちまったよ。それが不思議なことに、その時襲われたのはウチだけだったんだ。……何の天罰かと思ったもんだよ」
店主の話にヴァンは、シンシアの言葉を思い出していた。
「おっちゃんの店だけ？　ってことはやっぱり奴は《水果》目当てだったってこと？」
「ん～……町の連中はそう思ってるみたいだが、俺としては違う気がするんだ」
「どういうこと？」
「確かに《水果》は荒らされていたが、そのどれもが皮ごと潰れていたんだ。もし奴が飲んだんなら、皮から丸呑みするに違いないからな」
思いがけない情報にヴァンは思考を巡らし、さらに問うた。
「……その時、何か変わったことはなかった？　《水果》意外でおっちゃんの店だけにあったモノとか？」
「ウチだけにあったモノか……。そう言えば町に普段は見かけない魔獣商人が来てたっけなぁ。『人に懐く魔獣の仔』っていうのを売

り文句によ。それを息子にせがまれちまって、一匹買い付けたんだ。それが多分、今もこの町に卸しに来ている『グリーン商会』だったと思うぜ。もっとも、今となっちゃ、単なる見せしめ道具でしかなくなっちまったがな」
「それで、その魔獣の仔は？」
「それがよ。ドラガボラに襲われた日を境に、どっかいっちまったんだよ。お陰で息子を宥めるのに苦労させられたぜ」
店主の話に、ヴァンの中で新たな可能性が芽生えつつあった。
「ありがとう、おっちゃん。きっと僕たちがドラガボラを退治してみせるよ」
「おう。頑張りな」
魔獣の毛を編んだ袋に収められた《水果》を持って、ヴァンは食材屋を後にした。
最初こそ店主の話を頭の中で整理していたヴァンだったが、間もなくして欲望という名の悪魔が囁いた。
「一粒くらい飲んでもバレねぇよな……？」
毛袋に収められた《水果》をチラッ、チラッと見遣りながら、衝動を押し殺す。
「いや……ダメだ。一粒でもあいつは気付く……バレたら後が恐い……」
ギリギリのところで踏み止まったヴァンは毛袋から視線を逸らし、《水果》を意識から遠ざけながら書館へと向かう。
その途中で通り掛かった斡旋所から、耳を劈くような怒鳴り声が上がった。
「――人を見た目で判断する斡旋所なんて、こっちから願い下げよっ！」
荒々しい台詞を吐き捨てながら斡旋所から出てきたのは、ひとりの女性だった。
此の荒野の世界では珍しい、ドレスという煌びやかな衣装を身に纏い、太陽の光で染まったかのようなブロンドの髪は美しいウェー

ブを描き、腰まで伸びている。自信に満ち溢れた吊り目が印象的な整った顔立ち。胸もとの主張も充分あり、くびれた腰からはその者のプロポーションの良さを、まざまざと見せつけているかのようだった。
ただひとつ異様な点を挙げるとすれば、その腰に巻かれたガンベルトであろう。
誰かから譲り受けた代物なのか、ガンベルトには所々摩耗が目立つ。
煌びやかな衣装を身に纏う令嬢と摩耗したガンベルト。
それは一見不自然な組み合わせ。
だが、ヴァンにはなぜかそれが、目の前の女性に酷く溶け込んでいる……言うなれば『自分のものにしている』、すなわち『強さの表れ』のように思えて仕方なかったのだった。
令嬢の傍らには執事然とした男と小さな少年の姿があった。
おそらく旅仲間なのだろうとヴァンが思索を巡らしていると。
「――ちょっとそこのガンナーさん？」
「……え？　僕のこと……かな？」
当の令嬢に突然声を掛けられ、ヴァンは戸惑った。
「ええ、あなたのことですわ。さっきからわたくしにガンなどお付けになって、どういうつもりでして？」
「ええっ！？　いや、僕はガンなんて付けてないよ……！」
「嘘。わたくしはこの目で確かに見たんですのよ？　あなたがじっとこちらに眼差しを向けているところを。これでもまだ、シラを切るおつもりかしら？」
そこまで言われて初めて、ヴァンは令嬢の勘違いに気付いた。
「さっきのはただ、キミのことを綺麗な人だなって思って見てたんだ。気分を害したなら謝るよ」
「ふーん……そういうことでしたの。あなたも人を見た目で判断する人ですのね」
どこかがっかりした口調の呟きに対し、ヴァンは取り繕うことな

く言葉を返した。
「初対面だからそれは仕方ないと思うけど、僕はキミを一目見た時、綺麗だって思うと同時に芯がしっかりした強い人だなと思ったよ」
「――！？」
ヴァンの言葉に令嬢は目を見張った。
「少しは見込みのある男のようですわね」
ヴァンの一言に気を良くしたのか、令嬢は得意気な笑みを浮かべて胸を張ると、自信に満ちた口調で自己紹介をした。
「わたくしはリサ＝ベネットと申しますの。こちらは連れのアンソニーとパウロ。わたくしたち三人で《赤尾の砂蠍団（レッドテイルスコーピオン）》というチームでしてよ。以後、お見知りおきを」
「あ、こちらこそ。――僕はヴァン。ヴァン＝エヴァンス。チーム名とか特にないけど、ジェシカっていう友達と一緒に《オアシス》を探している最中なんだ」
瞬間、令嬢――リサの眼差しが険しくなった。
「……《オアシス》ですって？」
「うん。もし何か知ってたら教えて欲しいんだけど」
「奇遇ですわね。わたくしたちも《オアシス》を探して旅をしているんですのよ」
「へぇ。ベネットさんたちも、この荒野に潤いを取り戻そうと？」
「潤いですって？　何寝ぼけたことを言ってるのでして？　この世界の大地はとっくに死に絶えてますわ。それを今更回復させるだなんて、夢物語もいいとこ。正直申しまして現実的ではありませんわ」
「……え？　じゃあベネットさんたちはどうして《オアシス》を探しているの？」
ヴァンの問いに、リサはガンベルトから下げた銃に触れながら神妙な面持ちで答えた。
「――強さよ」
「……強さ？」
リサの答えがなかなか飲み込めず、ヴァンは疑問口調で返した。

「ええ、そうですわ。わたくしは人間という種に授けられた？真の強さ？というモノを求めて荒野を旅していますの。死に往くこの荒野には、まだ見ぬ強敵が潜んでいると聞きます……。ですから、その強敵と対峙し、勝利を重ねていくことこそが、？真の強さ？へと繋がる道に違いありませんのよ。お解りでして？」
「……人間の？真の強さ？……？」
　またしてもヴァンは疑問形で返した。
　なかなか理解を示さないヴァンの様子に、リサは苛立ち気味の眼差しでヴァンを見据える。そんなプレッシャーを感じつつも、ヴァンは一番の疑問を口にした。
「その？真の強さ？と《オアシス》を探していることにどんな関係が？」
「はぁ？」
　そんなことも判らないの？　と言いたげな口調で、露骨に呆れ顔を浮かべたリサは、一転、「いいでしょう。知らないようだから教えてあげますわ」と、勝ち誇ったような態度でヴァンを見下ろしながら言葉を継いだ。
「この世界には《荒野の亡霊（ファントム）》と呼ばれる伝説がありますの」
「《荒野の亡霊（ファントム）》……？」
「そうですわ。曰く《荒野の亡霊（ファントム）》はこの世の人々にかけられた呪いの源だとも、《オアシス》の番人だとも語られていますの。どちらにも共通する要素は、？鬼神の如き強さを有する？という点ですわね」
　淀みないリサの語りに、ヴァンはすっかり飲み込まれていた。荒野の何処かに眠るという亡霊を想像して冷や汗が浮かび、生唾を飲み込む音が妙に大きく響いた。
　そこまで話を聞いてようやくヴァンは合点がいった。
「……つまり、その《荒野の亡霊（ファントム）》と戦うために《オアシス》を探している……と？」
「ええ。その通りですわ！」

ヴァンの言葉に、リサはこれ以上ないというくらいの尊大な態度で答えた。
「けど……《荒野の亡霊（ファントム）》が存在するかどうかも定かじゃないんでしょ？　もっと実在する人を目標にした方が賢明なんじゃない？」
「あら？　あなただって実在するかどうかも判らない《オアシス》を探しているのでしょう？　お互い様ですわ。それに」
「それに？」
続きを妙に勿体ぶるのでヴァンが催促すると、リサは当然のごとく言い放った。
「わたくしより強い存在なんて、《荒野の亡霊（ファントム）》以外に考えられませんわ」
「なっ……！」
傲岸不遜とも取れるリサの自信に満ち溢れた言葉に、ヴァンは半ば唖然とし、半ば感嘆していた。
なぜならリサの瞳には一点の曇りすらなかったからである。
放った言葉が紛れもない本音である証。
どれほどの訓練を積めば、それほどまでに自分の力を信じられるようになるのかという点において、ヴァンはリサという人物に興味を抱いていたのだった。
「なんでしたら、あなたがわたくしの目標になって頂いてもよくってよ？　夢追いガンナーさん？　《オアシス》を探そうっていうくらいですもの、相当お強いのではなくて？」
そう言ってリサはクスっと、妖艶かつ挑発的に笑ってみせた。それに対しヴァンは。
「せっかくだけど無益な決闘は御免だよ。――じゃあ僕は買い出しの途中だから、これで失礼するよ。ベネットさんも《荒野の亡霊（ファントム）》に会えるといいね」
踵を返し、走り出そうとしたヴァンの背中に、鋭利な刃物を押し当てられているような冷たさが走った。
「応援して抱いて恐縮ですわ。お礼にひとつ忠告して差し上げます

わ」
「忠告？」
「ええ。そんな遠足気分のような甘い覚悟では《オアシス》を探すことはおろか、この荒野を渡っていくことすら出来なくてよ。荒野では、無益な戦いなんてあって当然ですのよ。そこのところ判っていらして？　夢を追いかけるのも結構ですけど、大怪我をしない内に、今一度自分自身の覚悟を確かめた方が利口だと思いますわよ。――それではまたお会いしましょう。あなたが生きていれば――ね？」
ドレスの裾を乱すことなく、優雅に立ち去っていくリサと連れ二人の姿を見詰めながら、ヴァンは彼女の忠告を心中で反芻し続けるのだった。

「ただいまー。《水果》買って来たよ」
シンシアの書館へと戻ってきたヴァンは、玄関からそう呼び掛けた。
だがジェシカの反応が返ってこない。
「……？」
一向に反応がないことを不思議に思ったヴァンは、何やら楽しげな話し声のする方へと歩を進めた。
「おーい、ジェシカ～……《水果》買って来たんだけど……」
ジェシカとシンシアは、買い物前に集まっていた書室ではなく、その奥にあるこぢんまりとした部屋で談笑を楽しんでいた。どうやらヴァンが買い物に行ってる間に、随分と仲良くなったらしい。
ヴァンは何気なく室内を一瞥する。部屋の内装が幾分女の子っぽいこともあり、恐らくここはシンシアの私室なのだろうとヴァンは推測した。
「――へー。シンシアって来月の今日が誕生日なんだ？　――あ、ヴァンおかえり。ちゃんと《水果》買って来れた？」

どことなくおざなりな反応にヴァンは軽い溜め息を吐いて言い返した。
「人をバカにするのも程々にしてくれ。僕ははじめてお使いを頼まれたガキじゃねぇ」
不平を漏らしつつ、《水果》の入った毛袋を手渡す。
ジェシカは中身を改めながら「つまみ飲みしてないでしょうね？」と、眼光鋭く詰問した。
「……っ！」
一瞬、ヴァンの表情に動揺が走る。だが、実際飲んでない手前、濡れ衣は御免だと努めて冷静に答えた。
「当たり前だろ。一粒たりとも飲んでねぇよ」
「ふーん。どうやら本当のようね。ヴァンにしてはよく自制したじゃない。感心、感心」
「……お前……僕を何だと思ってんだよ」
額に手を当てて呟くと、やるせなさを滲ませた表情で頭を振ったのだった。
「シンシア。また今度ゆっくりお喋りしようね。まだまだ教えて欲しいことたくさんあるんだから」
「ええ、もちろんです。……けど、わたしは頻繁に古書探しに出掛けている身。正直……書館を開けてる時の方が少ないですけど、もし荒野のどこかでお会い出来た時には、色々とお話し出来れば嬉しいです」
シンシアはそう言って淑やかな微笑みを浮かべ、ジェシカもそれに笑顔で答えた。
「……お前、そんな顔も出来たんだ。へぇ、意が……がはっ？！」
ヴァンが迂闊な台詞を吐いた刹那、ジェシカの拳が愚か者の鳩尾を抉りあげた。
「今　な　に　か　言　っ　た　か　し　ら？」
ともすれば魔獣以上の恐怖を植えかねない声音と形相で、ジェシカは問うた。

ヴァンは痛みにのたうち回りながら「なにも……言ってないです」と答えた。
そのやりとりをすぐ傍で見ていたシンシアが、慈しみに満ちた眼差しを湛えて、静かに口を開いた。
「ふふっ。お二人とも、随分と仲がよろしいのですね」
「ちょっとシンシア……何言ってるのよ。……こいつとは今までずっと一緒だったってだけで、ただの腐れ縁。それ以上でもそれ以下でもないんだから……」
「では、そういうことにしておきましょう」
「……しておくつもりありませんって顔だけどね。……まぁいいわ」
シンシアの雰囲気に毒気を抜かれたのか、ジェシカは半ば投げやりに話題を切り替えた。
「――さ、ぐずぐずしてられないわ。さっさとその《水果》を仕掛けにいくわよ」
「お……おう」
「シンシアは今日、ここで寝るんでしょ？」
「あ、はい。ここで一週間ほど、古書の整理などをしようと思っていますので。それが終わったらまた遺跡巡りの予定です」
「これから私たちは《血眼獣（ブラッドショット）》を誘い出すから、夜は家から出ないようにしてね」
「あ、そういうことですか。はい、判りました。よろしくお願いしますね」
「任せて。必ずあの仔を助けて、もう二度と、例の怪しい商人から魔獣の仔を買ったりしなくていいようにするわ」
「はい。わたしはここで、上手くいくようにお祈りしてますね」
「うん。ありがとう。――行くよ、ヴァン」
「……ああ」
ジェシカに促され、ヴァンはシンシアの私室を後にする。
廊下を歩きながら、シンシアの言葉を頭の中で転がしていた。
仮に惑星そのものを？神？とするならば、今の人々は？神？によ

って呪いをかけられていることになる。だとすれば人は、一体誰に祈りを捧げればいいのだろう……その祈りが届く宛はあるのだろうか……と。

続けてヴァンは思う。

祈りひとつすら満足に捧げられない世界だからこそ、《オアシス》が必要なのだと。

そして、この冒険の果てに無事（オアシス）を見つけられたなら、きっと惑星も生き返るに違いない。惑星が生き返り、呪いが解け、新たに歴史を紡ぐ命が誕生する頃には、人々が憂うことなく祈りを捧げられる日が訪れるはずだ……と。

しかし、同時にリサの言葉も脳裏にちらつく。

すなわち、この思いは全て自分の甘い理想でしかないのではという疑念。

たとえ惑星が生き返ったとしても、人々は過ちから何も学ぶことなく、同じ過ちを繰り返し……この世界を再び死の荒野へと変えてしまうのではないのかという不信。

胸の内で渦巻く疑念に対し、この時のヴァンはまだ、己の信念を貫くだけの？魂？を持ち合わせていなかった。

ヴァンは晴れない思いを抱えたまま、半ばがむしゃらに今という時を駆け抜けようと気持ちばかりが焦る。その結果、食材屋で得た情報をジェシカに話すことをすっかり忘れていたのだった。

それから数時間後の人々が寝静まった深夜。

上空からの見つけ易さと、町への被害を配慮して《水果》を町の入口から数ヤード離れた場所に仕掛けたヴァンとジェシカは、入口近くの小屋に身を隠し、ドラガボラを待ち伏せていた。

「なぁ。ホントに来るのかな？」

期待と不安が入り交じった声音で、ヴァンが静かに話掛ける。

「何、ビビってるの？　情けないわね。あんた、それでも私のパー

トナーなの？」
　ジェシカはドラガボラを警戒しつつ、声を押し殺して呆れ口調で返す。
「ちげぇって。……ただ何か……すごく重大なことを忘れているような気がするんだよ」
「……何よ？　重大なことって？」
「いやいや、待って下さいよ。それが思い出せねぇから、こうして悩んでるんでしょうが」
「ま、ヴァンのことだから、どうでもいいことなんでしょうけど？」
「あ、ひっでぇ。人をバカにするのも大概にしとけよ？」
「じゃあ今すぐに思い出しなさいよ？　さぁ、早く」
「ぐっ……」
「どうしたのよ？　ほら、やっぱり思い出せないんじゃない。銃の腕ばっかり鍛えてないで、脳味噌を鍛えた方がよかったんじゃない？　今からでも間に合うかも知れないわよ？　シンシアに頼んで、古書のひとつでも借りてきたら？」
「ぐぬぅ……！」
　ドラガボラを待ち伏せる間、二人はずっとこのような調子だった。
「……」
「どうしたのよ？　ヴァン。さっきから黙りこくっちゃって」
　完全に遣り込められたヴァンはふて腐れているのか、数刻前とは打って変わって静かになった。
　静寂が支配する夜空の下で、二人はドラガボラを待ち続けた。
　だが、一向にドラガボラが現れる気配がない。
「……変ね。シンシアの話からすれば、今にも現れそうなものなのに……。こんなことなら、最初に被害に遭ったっていう食材屋から、当時の事情を聞き出しておくべきだったわね……」
　ジェシカは後悔を滲ませた表情で小さく舌打ちをした、次の瞬間。
「――あーーーー！　思い出したッッッ！」「――ＧＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＯＮ」

ヴァンが突然、大声を張り上げて叫ぶのと、中央広場の方角から魔獣の咆哮が轟いたのは、ほぼ同時だった。
「――ッ！？」
ジェシカは小屋から飛び出すと、中央広場へと向かって駆け出した。その後にヴァンが続く。ジェシカと並んで走りながら、ずっと喉の奥に引っかかっていた？重大な話？を掻い摘んで説明した。ヴァンの話を聞いたジェシカは、親の仇を見つけたような眼差しでヴァンを睥睨すると、「なんでもっと早く言わないのよッ！」と、凄まじい形相で憤慨した。
「だから、さっきから思い出そうとしてたんじゃねぇか……！」
「敵に先手を取られてから思い出しても遅いって言ってンのよ！もう、肝心なところで使えないんだから……この大バカヴァン！」
「くっそー」
言いたいことはあれど、結局は今の今まで思い出せなかった自分に非があるのだという結論に至り、ヴァンはジェシカの批難を甘んじて受け止めるしかなかった。
「あんたの処罰は後で考えるとして――」
「え？　罰とかあんの？」
ヴァンのささやかな抗議を華麗にスルーしつつ、ジェシカは続ける。
「さっきの話を合わせて考えれば、つまり、ドラガボラは最初っから《水果》が目当て町を襲ってたんじゃないってことね」
「ああ……僕もようやく合点がいったよ。奴の目的は――」
続くヴァンの言葉に、図らずしてジェシカの声が重なった。
「「――魔獣の仔を取り返すこと！」」
珍しく意見が合った二人は、目配せをして頷いた。
だがすぐに、ジェシカの表情に焦りの色が見え始める。
「……となると、魔獣の仔を預かってる処刑人が危ない……急がなきゃ」
「つってもアイツの家なんて知らねぇぞ？」

ヴァンの問いにジェシカは空を見上げて呟いた。
「……それは、ドラガボラ（あいつ）が案内してくれるわよ」
「なるほど」
「ヴァン。射程内に入ってもすぐに攻撃しないで。《血眼獣（ブラッドショット）》かどうか見極めないといけないわ」
「ああ。判ってる。ただ仔を取り戻しに来ただけの魔獣なら、交渉の余地があるかもしれねぇからな」
「あら。ヴァンにしては珍しく冴えてるじゃない。何か拾い食いでもしたんじゃないの？」
「あのなー。もうちょっと素直に褒められねぇのかよ……ったく」
二人は緊張感に欠ける会話を交わしながら、ドラガボラの咆哮を目標に定めて夜の町を疾走した。
中央広場を走り抜け、住居通りをしばらく走った先に、標的・ドラガボラの姿があった。
「ヴァン！　あれ！」
瞬時に状況を把握したジェシカが鋭く注意を促す。
視線の先には魔獣の仔を抱えた処刑人が、今まさに、ドラガボラの餌食にされようとしていた。
「あ……あいつらめ……し……しくじりやがって……！　それとも恐れをなして逃げやがったか……っ！　く……来るなあああああああああ……それ以上近付いてみろ！？　……こ……こいつを殺してやるからな……！」
処刑人は恐怖に支配された様子で、魔獣の仔を盾に取り、必死の抵抗を試みていた。顔中に冷や汗を浮かべ、歯の根が合わないほどに震え上がっている。
ドラガボラは処刑人に狙いを定めると、その鋭い爪をもって攻撃へと転じた。
「させるかよ！」
咄嗟の判断で撃ち放ったヴァンの銃弾は、狙い通りドラガボラの爪に当たり、狙いを逸らすことに成功した。

攻撃を阻まれたことで、ドラガボラは一旦飛翔し、上空で体勢の立て直しに入った。
「あんた、早く隠れろ！　こいつは僕たちが倒す！」
「お前ら……逃げたんじゃなかったのか……？」
「誰が逃げるかよ！　それに、逃げてちゃ何も始まらないだろ！　目の前に壁が立ちはだかった時こそ、前へ進む！　それでこそ道が拓けるんだッ！」
「なんだ……それがお前の信念なのか？　……だとしたらとんだお笑いぐさだ。魔獣の仔（コイツ）を助けようとした時点で判っちゃいたが、そんな甘い考えじゃとても生き延びられねぇぜ」
「そんなこと、やってみなきゃわかんねぇよ。僕は僕の信念を貫く！　ただ、それだけだ」
「――ヴァン！」
ドラガボラの動きを警戒していたジェシカから号令が飛ぶ。
「ああ！」
短く答えて、処刑人を見据える。
「さぁ、早く隠れろ。あんたが居たら動きにくいんだ」
「ふん、偉そうに。……まぁ、いいだろう。お前の信念とやらをとくと拝見させてもらおうじゃないか。もし殺されたら、俺が骨を拾って埋めてやるよ。そして墓標の前で嗤ってやるよ」
さっきまでの怯えはどこへやら。人を食ったような態度で饒舌に語る処刑人を鋭く睨み、ヴァンは素っ気なく言い放った。
「好きにしろ」
「へ……へっ！　強がりやがって」
捨て台詞を残し、処刑人は近くの建物へと身を隠した。
不安が取り除かれたヴァンはドラガボラを見据え、神経を集中させる。
体内の血液が沸騰しかねない程の睨み合いが続き、広場に只ならぬ緊張感が高まっていく。
次の瞬間。

突如としてドラガボラが攻撃に転じた。
雄々しくも優雅な翼を折りたたみ、上空から勢いをつけて滑空。ヴァンへと迫る。
対するヴァンはドラガボラを見据えたまま微動だにしない。
何かを見極めようとするかのように。
数秒と掛からず距離を詰めたドラガボラは自慢の爪を構え、ヴァンを切り裂こうと襲い掛かる。
だが、ヴァンは動かない。爪が触れるギリギリまでドラガボラを見据え、その『眼』を見極めた。
「――ッ！」
ワンテンポでも遅れようものなら、首を刎ね飛ばされかねなかったタイミングで、ヴァンは攻撃を躱し、身を翻して距離をとった。
「――ジェシカ！　こいつは《血眼獣（ブラッドショット）》だ！　倒すぞ！」
そう。ヴァンはこれを見極めていたのだ。無意味な殺しはしたくないというのも、ヴァンの信念のひとつである。
「了解」
ヴァンの号令に、戦闘態勢に入っていたジェシカが短く答えた。
小手調べにと、変形済みのアサルト形態でドラガボラに向けて銃弾を叩き込む。
だが、ジェシカの撃ち放った銃弾は、キンッ！　という甲高い音をあげて弾かれてしまったのだった。
「くっ……〈硬皮特性〉！？　アサルトじゃ威力が足りないわね……」
瞬時に敵の特性を看破したジェシカは、自身の戦力を冷静に分析すると共に、注意を喚起する。
「ヴァン！　気を付けて。相手は〈硬皮特性〉を持ってるわ。どこか弱点を見つけないと、攻撃は通らないわよ」
「へ……〈硬皮特性〉か。……確かにそれはちょっと厄介だな」
言葉とは裏腹に、不敵な笑みを浮かべるヴァンは、この状況を楽しんでいるようにも見えた。

攻撃をいなされたドラガボラは翼を広げて急上昇。俯瞰視点で二人の姿を視界に捉え直すと、間髪を容れずに攻撃へと転じた。巨体に似合わない敏捷性を活かし、爪を広げて迫り来る。

さっきと同じ攻撃パターンだと読んだヴァンは、ギリギリまで引きつけ、躱し様に弾丸を叩き込む算段でいた。

だが、ドラガボラは数ヤード手前で不意に急停止すると、その大きな翼を力強く羽ばたかせた。

「なっ……！？」

翼によって巻き起こった突風がヴァンの動きを束縛する。

予想外の攻撃に思うように思考が回らない。ヴァンは咄嗟の対応もままならず、ジェシカもまた、ヴァンの危機を察しながらも、突破口を看破出来ずに攻めあぐねていた。

二人の勢いが衰えたと判断したドラガボラは、ここぞとばかりに攻撃に打って出た。

空中で再び加速すると、風に束縛され身動きが出来ないヴァンを鋭い爪を有した大きな足で蹴り飛ばした。

「ぐあぁっっ！」

強烈な蹴りを浴びたヴァンは軽々と弾き飛ばされ、建物の壁に叩き付けられた。

ヴァンが体勢を立て直す間もなく、ドラガボラは空中で素早く回転し、ハンマーを叩き付ける要領で尾撃を放った。

「くっ……！」

この一撃を辛うじて回避したヴァンは、飛び退きながらも二発の弾丸を撃ち込んだ。

だがやはり、ドラガボラの〈硬皮特性〉の前にあえなく弾かれてしまった。

「やっぱり硬いな……」

苦々しく呟いては、どこかに弱点がないかとつぶさに観察を試みる。

一方のジェシカは、ドラガボラがヴァンに気を取られている隙に背後へと回り込み、至近距離からショットガンを叩き込もうと彼我の距離、数インチのところにまで詰め寄っていた。
極限まで気配を絶ち、淀みない動きから繰り出した奇襲の成功を、ジェシカは信じて疑わなかった。ところが。
「――ッ！？」
数瞬前までヴァンを捕捉していたドラガボラが急に身を翻し、ジェシカに対して反撃を繰り出したのである。
完全に虚を突かれたジェシカは防御する間もなく尾撃を受け、地面に叩き付けられた。
「……っ……かはっ……！」
強烈な衝撃に、意識が飛びそうになる。が、強靱な精神力で持ちこたえると、素早く距離を取り、今の異様とも思える反応を分析した。
そして、ジェシカがある可能性に考え至るのとほぼ同時にヴァン叫んだ。
「ジェシカ！　ちょっと確かめたいことがある。攻撃は考えなくていいから、出来るだけコイツに接近してみてくれ！」
奇しくもその試みは、ジェシカが考えていたモノと大した違いはなかった。ヴァンもまたドラガボラの反応を分析していたのだ。
「了解」
短く答え、神経を集中させると同時に駆け出した。
ジェシカは持ち前の身軽さを活かして、撹乱するように動き回り、ドラガボラを挟み込む形で、反対側からはヴァンも距離を詰めようと俊敏に立ち回っている。
そんな中でドラガボラは、二人を同時に捕捉出来る位置を常に保ち、決して背後を取らせないように――言い換えれば背後を取られるのを嫌っている風な行動が目立ったのだった。
となれば当然、二人の分析の眼は自然と背面へと集中する。
翼の付け根から徐々に頭の方へと視線が移る。そして首筋付近に

色の異なる外皮があることに気付いたのだった。
「――！」
「――！」
攻撃を考えず、ドラガボラの観察に徹した二人は、ほぼ同時に突破口である弱点を見つけ出した。そしてその弱点を突けるのが、ヴァンのリボルバーだけだという見解も、期せずして同じだった。
攻め手が判れば、あとはタイミングの問題だけ。
ヴァンは全神経を研ぎ澄まし、その機会をじっと窺った。
ジェシカはドラガボラの狙いをヴァン一人に向けさせるために、わざと距離を置いた。思惑通りにヴァンを標的に定めたドラガボラは、一度空高く飛翔し、空中で浮遊。攻撃のタイミングを窺う。
数拍後、ドラガボラは弾かれるように加速し、ヴァンへと迫った。
今度はさっきと違い、一旦空中で止まることなく風を巻き起こし、動きを縛りにきた。だが、同じ手に二度も掛かるほどヴァンは愚かではない。的確にドラガボラの颪を見切ると、続く尾撃に狙いを定めた。
ドラガボラは自ら生み出した推進力に重力を合わせ、全体重を乗せて渾身の尾撃を放った。巨体を回転させた瞬間、首筋の外皮がヴァンの眼前に晒されることとなる。それこそがヴァンの待っていたタイミングだった。
「――ここだあぁぁッ！」
――！　――！　――！
ヴァンが一瞬のうちに撃ち放った三発の弾丸は、すべて色の違う外皮部分に命中。ドラガボラの皮膚を貫き、内部に致命的ダメージを与えることに成功した。
「GYAAAAAPPPPPPPPPPP……！」
苦悶の悲鳴を上げて、ドラガボラは浮力を失い、落下。絶命する寸前までのたうち回った勢いで、処刑台が呆気なく破壊された。
そんなドラガボラの今際の行動は、せめて今まで自分の仔を殺して来た処刑台だけでも道連れにしようという、親としての執念を二

人に見せつける形となったのだった。
「お疲れ、ヴァン。首筋が弱点だってよく気付いたわね。見直したわ」
「そりゃ、あれだけ露骨だとな……嫌でも気付くだろ」
「そうね。なにはともあれ、これでさしあたっての目的は達成ね」
「ああ。――おい、アンタ。終わったから出てきていいぞ」
ヴァンの呼び声に、小屋の中から処刑人が姿を現した。
「お……お前ら……本当に倒しやがったのか……。信じられねぇ……」
処刑人は複雑な表情で絶命したドラガボラを凝視している。
「別に信じなくてもいいけどよ、約束だけは守ってもらうからな」
「あ……ああ。魔獣なんて助けてどういうつもりか知らんが……約束は約束だ。コイツは連れて行くといいさ」
「もちろん、そうさせてもらうよ」
軽く答え、ヴァンは処刑人から魔獣の仔を受け取った。
「だがな……一匹倒したからって、どうせまた新たなドラガボラがこの町を襲ってくるに決まってる。その時はどうせ、魔獣除けを施すことになるんだ……。まさか、その時もお前たちが奴を退治するとでも言うのか？」
処刑人の問いに、ヴァンは結論から答えた。
「いや、僕たちがいなくても、この町で魔獣除けを施すことはなくなるよ」
「え？　それはどういう意味だ？」
「ドラガボラの目的は《水果》でも人の血でもなく、仔どもの奪還だったんだ」
「……それが？」
「つまり、魔獣の仔さえいなきゃ、ドラガボラは襲って来ないってことだよ」
「……え……そんなまさか……。じゃあ今まで俺が……この町がやって来たことは……？」

「恐らく……何者かの謀略に嵌められたんだろう」
「くそっ！」
ヴァンの話に処刑人は憤りも露わに歯噛みした。
ヴァンの中では謀略を企てた者の検討はついていた。
このような事を繰り返させないためにも、ヴァンは事実関係を確かめた。
「ところで、この見せしめ用の魔獣は『グリーン商会』から買ってるんだろう？」
「あ……ああ。そうだ」
「奴らが何者か、アンタは知っているのか？」
「いや……知らねぇ……。けど、奴らから買い付けないと贄が調達出来なかった……俺たちに選択の余地はなかったんだよ……」
処刑人の言葉を受け、ヴァンは確信を籠めて忠告した。
「今後二度と、『グリーン商会』から魔獣を買うのはやめるんだ。そうすればこんな魔獣除けなんて必要なくなり、町もより活気づくはずだから」
「ああ……判ったよ。……けど、もしそれでこの町が魔獣に襲われたりしたら……俺はお前たちを恨むからな」
「ああ、構わないよ。新たな危機が訪れた時は、なるべく早く駆けつけるようにするよ」
そう言ってヴァンは屈託のない笑みを浮かべて見せた。
「……。俺はこの先で銃器店をやっているベン＝フィリップスっていう者だ。お前たちはすぐにでもこの町を出るんだろ？　詫び代わりと言っちゃなんだが、発つ前に一度銃のメンテナンスでもさせてくれないか？　……ま、気が向いたら寄ってくれ。じゃあな」
その言葉を最後に、処刑人――ベンは通りの向こうへと消えた。
「ちょっと疲れたな。シンシアの書館へ戻って休ませてもらおうぜ」
「そうね」
戦いの緊張から解放され、溜め息をついて歩き出そうとした矢先。
「――あ、ちょっと待って」

何かを思い出したジェシカがヴァンを引き留めた。
「どうした？」
「ドラガボラの素材を回収しなきゃ。せっかく倒したんだから」
「そういえばそうだな」
意見が一致した二人は、さっきまでドラガボラが倒れていた場所へと移動した。
「あれ？　死骸は？」
そこには既に、巨体を誇っていたドラガボラの死骸は無く、代わりにプレート状の金属が落ちていた。ジェシカはそれを拾い上げ、ヴァンに渡した。
「多分これよ。この世界で採れる数少ない金属――《ドラクテリア》。話に聞いたことがあるわ」
「へぇ。あの巨体が、こんなに小さくなっちまうのか」
「そうね。ドラガボラが死ぬと持ち前の〈硬皮〉が急激な凝縮反応を起こすらしいわ。肉体そのものを飲み込みながら凝縮を続けると、最後にコレが残るみたいね。銃の改造にも使われる結構貴重な素材なのよ」
「それは有り難いな。……けど、そのためにドラガボラと戦うのは結構骨だな」
「だから貴重なんじゃない」
「あ、そっか」
要領の得ない会話をしつつ、二人はシンシアが待つ書館へと帰っていった。

†

ヴァンたちがドラガボラと戦う一部始終を、物陰から窺っていた人影があった。
腰から下げた二丁拳銃が、異様な存在感を放つ人物だ。
「ほぅ。ドラガボラを倒したか。だが、まだまだ無駄が多いな」

不敵に口角を吊り上げて笑い、独白を続ける。
「しかしながらあの少年……なかなか面白い存在だ。あいつと一緒にいれば、俺の答えも見つかるかも知れんな」
そんな独り言を呟き、人影は夜闇に姿を消した。

†

翌朝。
「くれぐれもお体には気を付けてくださいね」
魔獣の仔を助けるという目的を果たしたヴァンとジェシカは、シンシアから聞いた情報を頼りに《オアシス》探しに、町を出ようとするところだった。
「ありがとう、シンシア。色々教えてくれて助かったわ」
「いいえ。わたしに出来ることでしたら、いつでもお力になりますので」
そう言って淑やかに微笑むと、シンシアはずっと手に持っていた物を二人に差し出した。
「もしよろしければ、これをお持ちください」
「これは？」
シンシアが二人に差し出した物は一本の鍵だった。
ジェシカの問いにシンシアは親しみを籠めて答えた。
「これはわたしの書館の鍵です。前にお話しした通り、わたしは家を空けていることが多い生活を送っています。ですから、お二人が旅をする中で、何か調べたいことがあった際には、わたしの書館が少しでも役に立てればと思い、これをお預けしようと考えました」
「それはすごく助かるけど、ホントにいいの？」
遠慮気味なジェシカの言葉にシンシアは。
「ええ。もちろんです。《オアシス》を見つけるという、同じ目的を持った者同士、お互いに協力し合うべきだと思うのです。遠慮せずにお受け取りください」

と、穏やかに告げた。
「ありがとう、シンシア。是非活用させてもらうわ」
「ええ。存分に」
お礼を述べると共にジェシカは書館の鍵を受け取った。
「ところで」
シンシアはジェシカの肩に乗って寛いでいる魔獣の仔を認め、話を切り出した。
「その仔を連れて行ってくれるんですね」
「ええ。不可抗力とはいえ、親を殺しちゃったのは事実だからね。その償いも籠めて私たちが親代わりをしてあげないと」
「人と魔獣が行動を共にするなんて、とても素晴らしいことです。……その、わたしが言うのもおこがましいですけど……」
途端にシンシアは申し訳なさそうに項垂れて言葉を継いだ。
「……その仔のこと……よろしくお願いします」
シンシアは誠意を籠めて頼み込むと、深々とお辞儀をした。
「ちょっと……顔を上げてよシンシア。そんなに畏まらなくても大丈夫だから」
思わぬ事態にジェシカは慌てて声を掛けた。
「はい。……ありがとうございます」
笑顔の中に謝罪と感謝の念を滲ませ、シンシアは頷いた。
「ところで。名前は決まっているのですか？」
「あ……そっか。名前がなくちゃ可哀相だよね」
「うっかりしてたな。まだ考えてないや」
顔を見合わせて困り顔を浮かべる二人に対しシンシアは「あらあら。仕方のない親御さんですね」と、おどけた口調で言って言葉を継いだ。
「そこでわたしに考えがあります」
「ひょっとしてこの仔の名前、考えてくれたの？」
期待の眼差しを向けられたシンシアは、自信ありげに頷いてみせるとすぐに、予め考えていた名前を告げた。

「『アクア』という名前はいかがでしょう？　この惑星が潤いに満ちた世界になるようにとの願いを籠めて、惑星（アクアルド）にちなんでつけてみました」
　シンシアの考えた名前が出て間もなく、ジェシカとヴァンは快く頷いて見せた。
「すごく良い名前だと思うわ」
「うん。いいね。《オアシス》を探す僕たちには心強い名前だ」
　手放しで喜ぶ二人の反応に、シンシアもホッと胸を撫で下ろした。
「気に入っていただけてなによりです」
　まるで我が子の旅立ちを見送る母のような眼差しを湛え、シンシアは魔獣――アクアの頭を撫で、別れの挨拶に代えた。
「それでは、いってらっしゃいませ」
「うん。またね、シンシア」
「じゃあ、先に行ってるぜ」
「はい。一日でも早く、《オアシス》が見つかることを祈ってます」
　そうして二人と一匹はシンシアと別れたのだった。

　ヴァンとジェシカが中央広場に現れるや否や、二人を取り囲んで大勢の人集りが出来た。
「な……なんだ！？」
　困惑するヴァンに構わず、町人たちは口々に声を上げた。
「おぅ。兄ちゃんたちがドラガボラを倒したんだって！？」「お陰でもう嫌な思いをしなくて済むよ」「若いのに良い腕してやがるぜ」「あの胡散臭い商人から魔獣を買わなきゃいいんだろ？」「今度ウチの店に寄ってくれ。サービスするよ」「今時珍しいガンナーもいたもんだな」
　昨日、ヴァンが話した推測も混ざってることから、恐らくベンが話して回ったのだろうとヴァンは考えた。町を救った英雄として、二人は一夜にして町人から祭り上げられているのだ。

だが、いつまでも留まっているワケにもいかず、事情を説明してようやく解放されたのだった。
称賛の嵐から解放されたヴァンは、これからの方針についてジェシカに尋ねた。
「とりあえず自由になったのはいいけどよ、これからどうする？」
「そうね。『グリーン商会』の正体の気掛かりだけど、やっぱり今は《オアシス》を見つけるのが先決ね」
「そうだな」
相槌を打って言葉を切ったヴァンは、数拍の間を置いて続けた。
「昨日の買い出しの時に耳に挟んだんだけど《オアシス》は《荒野の亡霊（ファントム）》と密接な関係があるみたいなんだ。だからさ、次の町で《荒野の亡霊（ファントム）》の線から、調べてみねぇか？」
ヴァンがそう説明すると、ジェシカが驚いたような表情で答えた。
「奇遇ね。私もシンシアから《荒野の亡霊（ファントム）》の話を聞いていて、ヴァンと同じ提案をしようと思ってたところよ」
「そうなんだ。ってことは俄然信憑性も出てきたな」
「ええ。とりあえず《荒野の亡霊（ファントム）》の居場所も含め、次の町で《オアシス》に関する情報を仕入れましょ」
「おう。じゃあ出発！　――いくぞ、アクア」
「キュキュィ」
そうして二人は、北側から町を抜けようと、中央広場の先へと進んだ。
しばらく歩いたところで、《銃器店》の看板が目に止まった。
「あ、そう言えばベンって人が銃の改造をしてくれるって言ってたっけ」
「これ以上寄り道してる暇はないわよ。ただでさえ足止めを食らっちゃったんだから」
「そうだな。また今度にするか」
銃の改造を諦め、ベンの店を通り過ぎた矢先。
「――どうやら急ぎの目的があるようだな」

待ち構えていたかのようなタイミングで、ベンが店から出てきた。
「ええ。生憎だけど私たちは《オアシス》を探さないといけないの。次にまたこの町に寄ることがあったら、是非利用させてもらうわ」
社交辞令の要領でジェシカがすらすらと話を進める。
「ああ。その時は歓迎させてもらうよ。ただ、このままお前さんたちを見送るだけってのも、俺の性に合わねぇんだ」
「……何が望み？　私たちは急いでるって言ってるでしょ？」
「おっと。そう睨まないでくれ。何も意地悪しようってんじゃないんだ。――ほれ」
「――！？」
ベンが投げて寄越した紙片には、簡素な地図が記されていた。
「……これは？」
「俺の師匠が巡り歩いている町の地図だ。運がよけりゃ会えるかも知れねぇ。武器で困ったことがあったら遠慮なく訪ねるといい」
「……そ。ならありがたく使わせてもらうわ」
「そうしてくれ。――じゃあ元気でな。お前たちなら、俺たち大人の代わりに、新しい時代を作っていけると信じてるぜ」
「当たり前じゃない。必ずこの世界を潤いある地にしてみせるわ」
「その意気だ」
どこか悲壮感を感じさせる口調でそう言うと、ベンは店へと戻っていった。
「……」「……」
この時二人はベンの言葉に、例えようのない不安を覚えていたのだった。
それから再び歩き出し、北側から町を抜けようとした、その時。
「よう、ボウズ。昨夜の活躍、とくと見せてもらったぜ。ドラガボラを倒すたぁ、なかなかやるじゃねぇか。――それはそうとお前、《オアシス》を探してるんだってな？」
町の名前を刻んだアーチを支える柱に凭れ掛かっていた男が、不意にヴァンを呼び止めた。

「ああ……そうだけど。あんたは……？」
ヴァンは怪訝な表情で相手を見据えながら誰何した。
男の歳は三十代後半くらいだろうか。精悍な顔立ちに顎髭がより力強さを印象付けている。服装は黒尽くめで、腰にはガンベルトに収められた二丁拳銃が無言の存在感を放っていた。一見したところガンナーと思しき男だった。
「俺の名はレステ。見ての通りガンナーだ。ボウズの名は？」
問われてヴァンは、警戒しつつ答えた。
「……ヴァン＝エヴァンス」
名を口にした途端、男――レステは静かに瞠目した。
「エヴァンス？。ひょっとしてジョセフ＝エヴァンスの息子か？」
「父さんを知ってるの？」
思わぬ共通点に、ヴァンの警戒心が目に見えて緩んだ。
「やはりそうか。思い出すぜ、お前の父親と共に、荒野を駆け抜けた日々をな」
「父さんと荒野を？　……ってことは――」
ヴァンの言葉を聞き終えるより先に、レステは口を開いた。
「――ああ。ジョセフらと共に《オアシス》を探したかつての同士だ」
「ホントに！？　すげぇや！」
驚きに騒ぐヴァンを片手で制し、レステは用件を切り出した。
「お前がジョセフの息子だったのは単なる偶然だが、声を掛けたのには理由ある」
「理由？」
「そうだ。俺はかつて見つけ出せなかった？答え？に辿り着く為にもう一度（オアシス）を追いかけたい。だが荒野は想像を絶するほどに過酷な世界。かつての同士にジョセフがいたように、共に《オアシス》を追いかける同士が必要不可欠だと判断した。そして、町を渡り歩いてきたこの場所で、《オアシス》を探し出すと宣言してのけたキミを見つけたんだ」

レステの言葉に、ベンとの一件が脳裏に蘇った。
「だが、肝心の同士が凡骨では話にならない。そこでドラガボラの一戦で見極めさせてもらった。少々荒さは目立つが、確かな腕を持っていると確信した。そこで――」
一旦間を置き、ヴァンの表情を窺いながら言葉を継いだ。
「どうだろう。俺もキミたちの旅に同行させてもらえないだろうか？」
「僕はもちろんいいけど……」
歯切れ悪く答えて、ヴァンはジェシカの顔色を窺った。
「ジョセフさんの知り合いなら悪い人ではなさそうね。……いいわよ、認めてあげる」
「ありがとう、ジェシカ」
「礼には及ばないわ。私はただ、《オアシス》に関する手掛かりを優先しただけだから」
素っ気なく返して、ジェシカはひとり先に町を後にした。
「どうやら彼女にはあまり歓迎されていないようだな」
「気にすることないって。さ、行こうぜ、師匠」
「師匠？」
「だってそうだろ。師匠はあの父さんの同士だった人なんだから。それにさっきだって、僕の戦いを見て荒が目立つって言ってくらいだから、きっと僕より強いはずだろ？」
「ま、否定はしねぇがな」
「ならレステさんのことは師匠で決まりだ！　これから色々と勉強させてもらうぜ！　よろしくな、師匠」
まるで仲の良い兄弟のように、ヴァンはレステと心を通わせていく。
こうして三人と一匹になったヴァンたちは一路、次なる町を目指して、商人の町『メルゲル』を後にしたのだった。

「――貰ったぁぁぁあああ！」
「甘いッ」
「のあああああああ！？」
隙を衝いたはずの一撃を軽くいなされたヴァンはレステの反撃を受け、乾いた大地に叩き付けられていた。
商人の町『メルゲル』を発ってからというもの、ずっとこんな調子である。
ジェシカは呆れた表情でジト目を浮かべ、鬱陶しそうに口を開いた。
「ちょっと二人とも。ふざけるのも大概にしないと、置いていくわよ？」
これで幾度目かになるジェシカの言葉に、飛び起きたヴァンが真剣に主張を口にする。
「いや、遊びじゃねぇんだって。これは歴とした特訓なんだよ」
と、説明を受けてもジェシカは納得いかない様子で相槌を打つ。
「特訓ねぇ」
ヴァンの言う通り、先の騒動はレステが提案した特訓に他ならなかった。
過去、《オアシス》を追い求め、《荒野の亡霊（ファントム）》の強さも知っているというレステが、ヴァンの地力底上げの為「隙あらば、いつでも俺に攻撃を仕掛けてもいい。もし一撃を入れることが出来たなら、とっておきの話をしてやろう」と提案したのだった。
レステを一方的に師匠と仰いでいたヴァンは、この申し出に飛びついた。
「ところで、とっておきの話って何？」
「阿呆。それを言ったら褒美にならねぇだろうが」
「あ、そっか」

「だが、まぁ……？昔の話？ってだけ教えといてやる」
「昔の話？　それって父さんと旅してた頃の話ってこと？」
「まぁそんなところだ」
「ホント！？　よっしゃあ！　絶対一撃入れてやるからな！」
「その意気だ。徒手空拳がダメなら銃を使ってもいいぞ」
「舐めんな！　師匠がそういうなら、意地でも素手でやってやるぜ」
「その強がり、いつまで保つか楽しみだな」
そんな調子で、ヴァンの特訓は決まったのだ。
だが、『メルゲル』を発って半日以上経って、未だ一撃はおろかレステの身体に触れることすら出来ずにいたのだった。
子どものようにあしらわれるヴァンの様子に、ジェシカは肩を竦ませた。
荒野を騒ぎながら往けば、当然魔獣の標的にされる危険が高まる。
そして当然のごとく、ここに至るまでで既に三度、ヴァンたちは魔獣（ブラッドヨット）による襲撃を受けていた。そのどれもが凶暴極まりない《血眼獣》だったため、仕方なく撃破してきた。
三度の戦闘において、特筆すべき点はやはりレステの強さだろう。
ヴァンとジェシカが一体の魔獣を相手にする内に、レステは十体の魔獣を屠り去るほどの強さを、まざまざと見せつけたのである。
頼もしい仲間を得たと安心感を抱く反面、底知れぬ強さを誇るレステの存在に、二人は畏怖の念を抱かずには居られなかった。
「二人とも動きに無駄が多いな。敵の動きを先読みして動きゃ、何テンポも早く仕留められたはずだ」
魔獣との戦闘を終える度に、レステは二人の戦いぶりを批評した。
もっとも、彼の口から賛辞の言葉が出たことはなく、悉くが酷評に尽きた。
動きに無駄が多い、戦況を見極める周辺視野が狭い、肩に力が入りすぎている、射撃が雑、連携が破綻している……エトセトラ、エトセトラ。挙げ出したらキリがないほどに、レステの酷評は多岐に渡った。

「オーケィ、師匠。次は意識してみるよ」
「……」
あくまでレステに師事しているのはヴァンである為、ジェシカは批評に対して言葉を返さず、自分なりに改善点を咀嚼・吸収しているようだった。
襲い来る魔獣を撃破しつつ、ヴァンはレステと特訓を続けながらしばらく歩いた頃。
「そうだ。さっきから動き尽くめで喉が渇いてるだろ？」
言いながらレステは、背負ったナップサックから《水果》を一房取り出し、二人に差し出した。
「よかったら飲んでくれ」
「え！？　いいの！？」
ずっと《水果》を飲みたくて仕方なかったヴァンは、目を爛々と輝かせて食いついた。
「ああ。遠慮しなくていい。ストックはまだあるからな」
「だったら遠慮なく！　――いただきまーす！」
道中で仕留めた魔獣から確保していた《獣水》を飲む寸前だったジェシカも《水果》の魅力には抗えなかったのか、《獣水》をウエストポーチに仕舞うと、ヴァンから半分の《水果》を受け取り、味わうように飲み始めた。
「はぁぁぁぁぁぁぁっっっ……！　う～～～んめぇっ！」
「ほんと、美味しいわ。《水果》なんて久しぶりに飲んだけど、こんなにも美味しかったのね」
戦いの疲れも吹き飛ぶほどの美味さに、二人は満足気な表情を湛えて笑った。
「堪能してくれたようでなによりだ。それにしても、こんな上等な《水果》が落ちてたなんて、天の恵みだな」
レステの言葉にジェシカはギョッと眼を動かし「落ちてた……？何処に？」と、追及した。
するとレステは飄々とした口調で「『メルゲル』の入口辺りだ」

と答えた。次の瞬間。
「ちょっと！　それ、私たちが仕掛けた《水果》じゃない！　すっかり忘れてたけど、拾ってきたなら返しなさいよ！」
ジェシカの叫びにヴァンも思い出したらしく「あ！　そう言えば！」と声を上げた。
彼女の要求に対し、レステは涼しい顔を浮かべ。
「これがお前たちのだっていう証拠はあるのかい？」
と、大人げない態度で切って返した。
「うっ……！」
返答に詰まるジェシカを横目に、レステはさらに続ける。
「この荒野じゃ、落ちてる物は拾った者の所有物となる。それが絶対たる暗黙の掟だ。それが《水果》だろうと、人の命だろうと変わらない。悔しかったら持ち物の管理くらい、ちゃんとするんだな」
ふざけているように見える反面で厳しさを含んだ口調に、二人は完全に圧倒されていたのだった。
「……判ったわ。今回は仕掛けの回収を怠った私たちに非がある。それは貴方の物でいいわ」
「理解が早くてなによりだ。ま、時折こうして分けてやらんこともねぇから、そう睨むなって。お互い持ちつ持たれつでいこうぜ」
「……どうぞご勝手に」
「つれないねぇ」
「当たり前よ。私はまだ貴方を信用したワケじゃないんだから、その辺勘違いしないで」
「おー恐い恐い。レディは怒らせるものじゃないねぇ」
口笛を鳴らしおどけて言うと、レステはクツクツと不敵に笑って見せた。

その後、ヴァンたちは陽が落ちるまで歩き続けた。
辺りが夜闇に包まれ始めると野宿に適した場所を見繕い、簡単な

食事を済ませ、交代で眠りに就いた。
レステが眠ってる間、ヴァンは内なる葛藤と闘っていた。
――今なら確実に、一撃を入れることが出来る。
だが、それは自分の為になるのかと。
正々堂々と戦ってこそ、成長に繋がるのではないかという葛藤の狭間で揺れ動く。
もしここで一撃を入れれば、ジョセフに関する昔の話を聞くことが出来る。
しかし、こんなやり方で情報を得たところで、素直に喜べるはずがない。そう思い直し、ヴァンは葛藤を振り払い、見張りに集中したのだった。
その時、ヴァンの背後で岩壁に凭れ掛かり目を瞑っているレステの口元が、僅かに笑っていたのだった。

翌朝。
「おう、あんたら。この荒野を徒歩で渡ろうってんじゃないだろうな？」
「次の町までどれだけあると思ってんだ。自殺行為もいいとこだぜ」
「俺たちはこれから南の町へ行くところなんだが、あんたらもそうなのかい？」
三人が荒野を歩いていると、南の町へ行く途中だというキャラバンと出会った。
「あ、うん。《荒野の亡霊（ファントム）》の情報を仕入れに、南の町を目指してるところなんだ」
「《荒野の亡霊（ファントム）》だと！？」
ヴァンの言葉に、隊商のリーダーらしい人物が驚きの声を上げた。
「……悪いことは言わねぇ……それだけはやめときな。命がいくつあっても足りやしねぇ」
神妙な面持ちで忠告を口にするリーダーに対し、ヴァンは。

「それでも僕たちは追いかけなくちゃいけないんだ」
と、確固たる思いを打ち明けた。
「キミみたいな子どもが……どうしてそこまで……。その歳で名誉目当てってワケでもないだろ？　一体何が目的なんだ？」
「僕たちの目的は《オアシス》を探し出し、この世界に潤いを取り戻すことだ」
「《オアシス》だと……！？　あの涸れた伝説を未だに追いかけてる奴が居るとはな……」
どこか昔を懐かしむような眼差しで空を見上げ、リーダーは破顔して言った。
「気に入ったぜ。乗りな。南の町まで連れて行ってやるよ」
「ホント！？　ありがとうな、おっちゃん」
「おっちゃんじゃねぇ！　俺の名はジェンクス＝リード。まだ三十一だ。俺を呼ぶ時は？ジェンクス？もしくは？リーダー？と呼べ」
「判ったぜ、リーダー」
「よし！」
こうしてヴァンたちは、幸いにもキャラバンに乗せていって貰える事になった。
ヴァンの調子に辟易するように、ジェシカはひとり深い溜息を吐くのだった。

「――見えてきたぞ。あそこが憩いの町『ルクス・ロースカ』だ」
リーダー――ジェンクスの声に、ヴァンは獣車から顔を出して視線を巡らした。
「すげぇや。ここからでも立派な建物が見えるよ」
「そりゃなんたって『ルクス・ロースカ』は、この世界で一番発展している町だからな。町並みもさることながら、人々の気質も穏やかで、まさに？憩いの町？なんだぜ」
「へぇ。すっげぇ！」

「あの町並みを初めて見れば、絶対に驚かずにはいられねぇってもんだ。もうじき着くからよ、楽しみにしてな」
「ああ！」
期待に胸を躍らせ、ヴァンは憩いの町『ルクス・ロースカ』に着くのを心待ちにしていた。
やがて『ルクス・ロースカ』に到着し、その町並みを目にしたヴァンは驚きのあまり瞠目した。
ただしそれは、ジェンクスの想定とは反対の意味での驚きだった。
「なんだこれ……！？　……町が……メチャクチャだ……」
本来なら穏やかで美しい風景が広がっている筈の『ルクス・ロースカ』の町並みが、今は見るも無惨なほどに壊滅していたのだ。
町の建物はことごとく砂に埋め尽くされ、町人の気配は感じられない。
隊商の面々も一様に言葉を失い、変わり果てた町を愕然とした面持ちで見詰めている。
「一体何があったんだ……！？　町のみんなは何処へ行ったんだ！？」
ジェンクスは町の惨状に狼狽えながらも、町の人たちの安否を確かめるべく駆け出した。
只ならぬ事態に他人事にはしておけず、ヴァンたちも彼の後を追う。
砂だらけの道を走り抜けた先にある町の広場に、ざわめく人集りが出来ていた。皆不安そうな面持ちで喋り合い、喧々諤々の状態に陥っている様子。
そこへジェンクスが割って入り、ざわめきは徐々に収まっていった。
「みんな無事か！　この有り様は一体何があったんだ？」
「おおっ！　ジェンクスの旦那！　それがよォ――――」
町の代表者と思しき壮齢の男が一歩前に進み出て、ジェンクスに事の次第を説明した。　男が言うには、突如として砂嵐が町を襲い

突くし、多くの家屋が倒壊。ものの数分で見ての通りの惨状になったのだという。
「砂嵐だと？」
男の言葉にジェンクスの表情に焦りの色が浮かぶ。
「リーダー。何か心当たりでもあるのか？」
「ああ……。俺たち隊商の間で、ある有名な噂が囁かれている。その噂話の中に、原因不明の砂嵐も出てくるんだ……ッ！」
まるで死の宣告を受けでもしたかのように、ジェンクスの顔色が真っ青になっていく。「なんなんだよ、その噂話って？」
ヴァンの問いにジェンクスは、躊躇いがちに口を開いた。
「……《荒野の亡霊（ファントム）》」

「「「「「「「「「「――――ッッ！！！！」」」」」」」」」」
ジェンクスが零した声は、恐ろしいほどに澄み渡って響いた。
その不吉な言葉に町人たちは一様に忌避の表情を浮かべ、顔を見合わせて囁き出す。
恐怖に慄く町人たちを見遣り、ヴァンは意を決して口を開いた。
「リーダー、お願いだ……《荒野の亡霊（ファントム）》について何か知ってるなら教えてくれ！」
「ダメだ……危険過ぎる」
「そんなことは百も承知さ。さっきも言っただろ？　それでも僕たちは《荒野の亡霊（ファントム）》を探し出し、《オアシス》を見つけないといけないって」
「随分簡単に言ってくれるが……子どものお遊びじゃないんだぞ……！？　一歩足を踏み入れれば最後、呆気なく死ぬかも知れないんだぞ。……それでも行くというのか？」
「ああ。それでも行く」
「……なぜそこまで命を懸けられるんだ？」
「命を懸けてでも成し遂げたい……いや、成し遂げなきゃいけない

目的があるからに決まってる」
「それが《オアシス》か……」
ジェンクスの呟きにヴァンは眼差しに決意を湛えて頷く。
「そうだ。僕たちはこの町の人たちの為に――そしてこの世界を滅びから救うために《荒野の亡霊（ファントム）》を倒すと決めた。それが僕の覚悟だ」
ヴァンの決意に満ちた眼を見詰めたまま、ジェンクスは静かに語った。
「新たな命も授かれず、緩やかな滅びを迎えるしかないこの世界で、未だにそんな眼を持った奴がいるとはな……この世界もまだまだ捨てたもんじゃねぇってことか」
さっきまでの恐怖心を払拭するように微笑むと、ジェンクスは言葉を継いだ。
「場所を移そう。町の人たちに余計な心配をかけたくない」
「じゃあ！？」
期待の瞳を輝かせるヴァンにジェンクスは、「《荒野の亡霊（ファントム）》について話してやる」と答え、町の人たちに事情を説明した。
すると町の人たちは理解を示し、ヴァンたちのために比較的損壊が小さい家屋を貸してくれることになった。
「あんたたちが《荒野の亡霊（ファントム）》を退治してくれるなら、俺たちは安心して復興に取り掛かれるってもんよ。じゃあ頼りにさせてもらうぜ」
代表者の男はそう言って臨時の会議室となった家を後にした。
壊滅的な被害を受けたにも関わらず、早くも町を復興しようと意気込む代表の姿に、ヴァンの中で不思議な気持ちが芽生え始めていたのだった。
それからすぐに、ジェンクスは話の口火を切った。
「伝聞によれば《荒野の亡霊（ファントム）》は四体存在し、惑星の呪いにより東西南北の四方に縛られているという話だ。その内、俺たち隊商の間で広がっている噂は、南の亡霊・ノルドに関する情報だ」

「南の亡霊……ノルド」
初めて聞く呼び名に底知れないプレッシャーを感じ、ヴァンの鼓動が早鐘を打つ。
「俺たちも奴の正体をすべて把握しているワケじゃないから確証は持てないが、奴が現れる時は決まって砂嵐が発生するそうだ。……伝聞から推察するに奴は、この町からさらに南に位置する《危険区域(ダークゾーン)》の先に潜んでいる可能性が高い。今もなお、欲に目が眩んだ賊たちが《危険区域(ダークゾーン)》に足を踏み入れているらしいが、その多くは行方知れずと聞く。またあるときは、賊同士が徒党を組んで亡霊狩りに赴いたが、帰ってきたのは瀕死の傷を負いながらも辛うじて獣車を操って逃げてきた賊ひとりだけ……その獣車には仲間の死体が詰め込まれていた。その一件もあり人々は、《荒野の亡霊(ファントム)》の伝説を信じざるを得なくなったというのが、ここ数年の経緯だ」
張り詰めた緊張感の中ジェンクスの話が一段落すると、ヴァンはそれまでずっと息を止めていたかのように、大きく溜め息をついた。
「ふぅ……。そんな化け物が《危険区域(ダークゾーン)》の先にいるのか……」
「どうした？　いまさら怖じ気づいたか？」
からかうように訊ねるジェンクスに、ヴァンはムキになって反論した。
「誰が怖じ気づくもんか！　むしろ益々ぶっ飛ばしたくなったくらいだぜ」
「ふっ。一歩間違えれば無謀に近いが、その思い、今は勇気ととっておこう」
やる気を漲らせるヴァン対して冷静に返し、ジェンクスは懐から一枚の紙片を取り出した。それは所々が破れ、見るからに痛んだ代物だった。
「リーダー、それは？」
「これは南に広がる《危険区域(ダークゾーン)》の踏破ルートを記したメモだ。さっき言った賊の荷物から俺が拝借してきた物だ。もう随分前のことだがな。これさえあれば、少なくとも《荒野の亡霊(ファントム)》には遭えるだ

ろう」
そこで言葉を切り、ジェンクスはヴァンの眼を真っ直ぐに見詰めて継いだ。
「もう一度だけ訊く。本当に《荒野の亡霊(ファントム)》と対峙する覚悟があるんだな？」
僅かな逡巡すら許さないというジェンクスの無言の重圧にも動じず、ヴァンは力強く頷いてみせた。
「ああ」
「いいだろう。これはキミたちに託す。この町の人たちの為にも……そして潤いある世界を取り戻すためにも……なんとしてでも《荒野の亡霊(ファントム)》を打ち倒してくれ」
途端、妙に差し迫った様子でジェンクスは切願すると、たっぷりと間を置いて言葉を紡いだ。
「これは新たな時代を担う、キミたちにしか出来ないことなんだ」
そう告げたジェンクスは、諦観の中にも希望を抱いているような表情をしていた。
ヴァンもジェシカも、この時彼が言った言葉の真意など知る由もなく、ただ決意を漲らせて頷くだけ。
そんな中で人知れず、レステの口元だけが怪しく弧を描いていた。
情報をくれたジェンクスに礼を言うとすぐに、ヴァンたちは南の《危険区域(ダークゾーン)》を目指して『ルクス・ロースカ』の町を発ったのだった。
目指すは南の亡霊――ノルドの討伐。

†

「ここから先が……《危険区域(ダークゾーン)》……！」
周辺の荒野とは比べものにならないレベルの殺気が立ち籠める空間を見詰めながら、ヴァンは慄くように呟いた。
「あんた、ホントはびびってるんじゃないでしょうね？　私たちに

は前に進むという選択肢以外ないんだから、いい加減覚悟を決めなさいよ」
「誰がびびってるなんて言ったよ？　――行くぞ」
気合いを入れて、ヴァンは《危険区域（ダークゾーン）》へと足を踏み入れた。
「――！？」
すると突然、砂嵐が発生し、瞬く間に視界が悪化した。
視界一〇ヤードにも満たない状況に、方向感覚が狂わされる。
「ヴァン！　メモよ……ジェンクスさんから預かったメモを出して」
「ああ……そうだった」
言われてすぐにメモを取り出し、ルートを確認する。
メモには次のような文章が記されていた。

【頭蓋骨の標から、その眼が見詰める方角へ三〇〇歩】
【志し半ばで倒れた冒険者の墓標から、その背後の方角へ五五〇歩】
【穿たれた大穴を越えてさらに先へ】
【ガンナーの墓場から、青い銃口が示す先へ四八〇歩】
【魔獣の砂像の間を抜ければ、亡霊の怨嗟が冒険者を誘う】

「なんだこれ？　意味わかんねぇ」
「ちょっと貸して」
ジェシカはヴァンからメモを奪い取ると、周辺の光景とメモを見比べながら黙考した。
はぐれないように注意を払いつつ、辺りを少し歩き回る。すると。
「あった。多分これが【頭蓋骨の標】よ。つまりこの頭蓋骨が見詰める方角へ三〇〇歩進めってことね」
「なるほどな。じゃあメモの解読はジェシカに任せるよ。時間がもったいねぇ。さっさと行こうぜ」
「もう……面倒なことはすぐに放り出すんだから」
「そう怒りなさんな、レディ。ボウズの態度はレディを信頼してるからこそ。違うかい？」

「あなたに言われなくても、それくらい判ってますから」
「ありゃ……逆に怒らせちまったかな」
レステはおどけたように呟いて、二人の後に続いた。
それから二つ目の目印を見つけ、しばらく歩いたところで、レステがおもむろに口を開いた。
「ますます視界が悪化しやがるな。こりゃいつどこから襲撃があってもおかしくねぇ。油断するなよ」
「ああ、判ってるよ」
「そうだ、ヴァン。これを持っておけ」
そう言うとレステは《水果》を一房差し出した。
「やった！　助かるよ師匠。《獣水》ばかりで参ってたところなんだ」
喜色満面にはしゃぐヴァンを見据え、レステは厳かに告げた。
「物には最適な使いどころというものがある。一時の渇きに抗えず飲み干すか、然るべき時まで温存しておくかは、お前次第だ」
「え……？　それってどういう意味？」
「少しは自分で考えろ」
「ちぇ……」
レステの意味深な言葉に、ヴァンは飲みたい衝動を我慢して、《水果》をナップサックに仕舞ったのだった。
「着いたわ。ここが【ガンナーの墓場】ね」
やがて四つ目の目印まで辿り着いた。
そこはまるで台風の目のように、砂嵐が弱まっているポイントだった。直径一マイルにも及ぶ空間には、おびただしい数の銃が墓標のごとく地面に突き刺さっている。文字通りガンナーの墓場といった光景である。
「なんて数なの……。今までこれほどのガンナーが《荒野の亡霊（ファントム）》を追いかけ、ここで命を落としてきたのね」
「待ってろよ。すぐに成仏させてやるからな」
二人がガンナーたちの魂に哀悼の意を表していると、不意に粗野

な声が響き渡った。
「――成仏するのはテメェらの方だがなァ！」
「！？　誰だあんたら」
反射的に振り返るとそこには、三人の男が芝居がかった決めポーズで屹立していた。
口上を述べた長身の青年を挟み、左右に一人ずつ。肥満体型のヒゲ面男と痩躯の盗賊風の男だ。どちらも自信に満ちた表情でヴァンたちを見遣っている。
「テメェら。まさか俺たちのことを知らないとでも？」
「知らないから訊いてるんじゃないか。けど、話が長くなるようなら別に答えなくていいよ。僕たちは先を急いでるから。じゃあそういうことで」
あっさりとその場を後にしようとするヴァンに向かって、青年が慌てて引き留める。
「待て待て待て～い。いいだろう、教えてやる。――表向きには各地を巡り商品を売り歩く『グリーン商会』。そしてその実体は、生きるためならどんな依頼でも請け負う集団！　俺様はロバート＝グリーン」
「オレはジョン＝リー」
「ワシはマーク＝モーガン」
それぞれが名を名乗り、再び大仰なポーズを決めると、タイミングを計り。
「「「三人揃って――」」」
「《幻影の掠奪者（ファントム・プレデター）》とは俺たちのことよ！」
と、最後はロバートがドヤ顔で決めて締め括った。
ロバートの口上に、ヴァンとジェシカはハッとして目を見張った。
「『グリーン商会』だと……！？　じゃああんたらが『メルゲル』の町を……！」
「やっと気付いたみてぇだな。そうさ、アレを仕組んだのは俺たちだ」

「どうしてあんな真似をしたんだ！？」
憤慨するヴァンに向けて、ロバートは何食わぬ顔で言い放つ。
「どうしてって？　そりゃ俺たちが生きるために決まってらァ。魔獣の仔を買うこと自体が、ドラガボラを引き寄せていることに気付かねぇバカな町人から、たんまりと代価をせしめるためのよォ！」
くつくつと嗤い、ロバートはさらに続けた。
「だがよォ、せっかくの仕掛けもテメェらに壊されちまった。もうあの町から甘い汁は吸えねぇ。この落とし前は高く付くぜ？」
「それが理由で、僕たちを追って来たのか？」
「ああ、そうさ。貴重な収入源を断たれた俺たちにとっちゃ、死活問題なんでなァ」
「人を騙して利益を吸い尽くすヒルみたいな奴が何を言う！」
「テメェこそ寝ぼけてんじゃねぇぞ！　この荒野に生きる以上、騙し合いや裏切りは当然だろうが。まんまと騙されて搾取される方が愚かなんだよォ！」
「あんた……本気で言ってるのか？」
利己主義なロバートの物言いに、ヴァンは沸々と怒りを募らせる。
ヴァンの警告も全く意に介することなく、ロバートは傲岸不遜に言い放った。
「ああ、本気も本気さ。そうじゃなきゃ、この荒野では到底生き延びられねぇからな。俺たちはテメェみたいに甘っちょろくねぇんだよ。滅びを迎えるしかないと叫ばれているこの世界で、他人を犠牲にしてでも俺は生き延びてやるぜぇ」
その言葉が引き金となった。
「僕はあんたの考え方を許さない！」
「それはこっちの台詞だ。テメェのその甘さ、俺が叩き直してやるよ」
ロバートの宣戦布告を合図に、マークとジョンが臨戦態勢を取り、それぞれが得物を手に取った。マークはショットガン、ジョンはマシンガン。そして、ロバートは扱い易いように独自の改造を施した

ガトリングだった。
　相手の行動を受けて、ヴァンとジェシカも銃を手に取り、様子を窺う。
「ヴァン。実力テストだ。俺は一切手出ししないから、お前たちで何とかしてみろ」
「おーけー、師匠。ま、見ててくれよ。サクッと片付けるからよ」
「油断しないでよ、ヴァン」
「判ってるよ」
「なんだ？　保護者は見学か？　あとで数的不利で負けたなんて言い訳すんじゃねぇぞ！」
「そっちこそ、数で勝ってるくせに負けた時の言い訳でも考えておいた方がいいんじゃないか？」
「ほざきやがれ、ガキの分際で！　――おぅ、お前ら行くぞ！」
「「合点でさぁ、ボス」」
　息のあった返事でマークとジョンが二人を囲むように散開。
　ヴァンとジェシカは互いに背中合わせになり、敵の仕掛けに備える。
　レステは戦線から一歩退いたところで成り行きを見守っている。
　緊張感が高まる中、最初に動いたのはロバートたちだった。
　流れるような横移動を繰り返しながら、二人との距離を詰めてきた。
　ジョンのマシンガンが火を噴き二人を牽制すると、マークが巨躯に似合わない俊敏さで距離を詰め、接近戦に持ち込んでくる。至近距離で引き金を引いたマークの動きを見切り、ヴァンは紙一重で躱し様、リボルバーを撃ち放った。
　だが、その一撃はロバートの妨害により狙いが逸れた。
　再び距離を取り、横移動を始めたロバートたちは、さっきより間隔を縮めて攻撃に転じてきた。
　ヴァンとジェシカ、それぞれの正面からマークとジョンが迫り、側面からロバートが迫る。二人はギリギリまで三人を引きつけると、

阿吽の呼吸で身を翻し、引き金を絞った。
一気に場が混戦状態となり、砂塵が舞い上がる。
視界が晴れるとそこには、互いに銃口を突きつけ合った五人の姿があった。
「時間が惜しいんだ。この引き金を引く代わりにあんたたちが退けば、とりあえずは見逃してやる」
と、右手のリボルバーをロバートに向けつつ、いつになく厳しい口調で警告する。左の銃口はジョンを捉えており、彼のマシンガンはジェシカを狙っている。
「これで勝ったつもりかよ？」
ヴァンの警告にも全く動じず、ロバートは睨みを利かす。その手元に光るガトリングはヴァンの心臓部分に突きつけてある。ひとたび引き金が引かれれば致命傷は免れない。
「あら？　この状況でよくそんな減らず口をたたけるわね。あなたが動いたところで、先に鉛弾を撃ち込む自信はあるわよ？」
ショットガンに変形させた銃をロバートに向け、補助用として持っていた拳銃をマークに突きつけながら、ジェシカは正面から切り返した。
二人がロバートたちを制圧していることは、傍目からも明らかだった。
ロバートは傍観を決め込んでいるレステを一瞥すると、不敵に嗤って銃を下ろした。
「ふっ。確かにたった二人に抑え込まれた上、まだ仲間が控えてるとなれば、こちらが圧倒的に不利だわなァ」
「……」
予断を許さないロバートの言動に細心の注意を払いながら、ヴァンとジェシカは様子を窺う。
「いいだろう。今回は見逃してやる」
「……それはこっちの台詞だ」
「ふっ。そう吠えるな」

ヴァンの反論を軽くいなしてガトリングを担ぎ上げると、ロバートはマークとジョンに号令を飛ばした。
「引き上げんぞ、お前ら」
去り際にロバートは振り返ってヴァンを見据えると、問いを投げつけた。
「おい、ガキ。名はなんていうんだ？」
「……。ヴァン。ヴァン＝エヴァンスだ」
一瞬、答えるかどうか迷ったヴァンだったが、自分だけ名乗らないのもフェアじゃない気がして、結局答えたのだった。
「ヴァンか。覚えておくぜ、その名前」
「別にあんたなんかに覚えられたくないね」
「……ところでお前は、どんな目的をもって荒野を駆けてるんだ？」
「あんたに話す必要はない」
「そう邪険にするなって。ガンナー同士、協力出来るかもしれねぇだろ？」
「平気で人を騙すあんたなんか、こっちから願い下げだね」
「へっ。初めて会ったばっかりだってのに、随分と嫌われたものだなァ」
「……」
「まぁいい。だがな、次に会う時は覚えておくんだな。俺たちの収入源を台無しにしてくれたお礼は、たっぷりとさせてもらうからよォ」
報復予告を残して、ロバートたちは砂嵐の中へと消えていった。
「ヴァン。あのタイミングだったら確実に仕留められたでしょ？どうしてみすみす逃げる機会なんて与えたの？」
怪訝な眼差しで訊ねるジェシカに、ヴァンは複雑な表情で答えた。
「……あんな奴でも……僕は殺したくないから……」
「ヴァン……」
偽らない言葉から溢れる優しさに触れたジェシカは、そっとヴァン手を握り締めた。

「大丈夫……その優しさがヴァンのいいところだって私知ってるから。……もっと自分に自信を持っていこう」
「……ジェシカ。うん、ありがとう」
ヴァンは優しく励ましてくれるジェシカに微笑みを浮かべ、お礼を口にした。そんな二人の間には、夢を誓い合った五年前から変わらない信頼の絆が窺えるようだった。
そんな二人のやりとりに、レステは静かに片笑みを浮かべていた。
「甘いな。もっと非情にならないと、この荒野では生きていけないぞ」
「……」
レステの忠告に、ヴァンは黙したまま俯くことしか出来なかった。
「悩んでる暇なんてないわよ、ヴァン。先を急ぎましょ」
「ああ、行こ――――――！？」
ヴァンが返事をしようとした、まさにその瞬間。
突如として足場になっている砂地が盛り上がり、そこから五体もの魔獣が現れたのである。その眼は鮮血に染まったように真っ赤だった。
「――《血眼獣（ブラッドショット）》……！？」
それは蠍の甲殻に長い針尾を有し、砂中を泳ぐのに適したヒレを合わせ持つ。
ガンナーの間では？砂海の殺し屋？の異名で恐れられている蠍型魔獣――『ピスキルピオン』だった。
単純に戦闘力だけを見ればドラガボラにこそ劣るが、ピスキルピオンは獰猛極まりなく、常に集団で行動し、獲物を狩るという狡猾な智恵を有している分、ドラガボラより厄介だという声も少なくない魔獣である。
その甲殻はドラガボラの外皮に勝るとも劣らない硬度を誇り、突然変異によって得たヒレにより、砂中を音もなく泳いで移動する。それが？砂海の殺し屋？の異名たる由縁である。
そんなトップクラスの危険魔獣が実に五体同時。ヴァンとジェシ

カの腕をもってすれば勝てない相手ではないが、苦戦は必至。今はとにかく一分一秒でも早く《荒野の亡霊（ファントム）》に追い付きたい二人にとって、ここでの足止めは不本意以外の何物でもなかった。
「くっ……！　やるしかないのか……！」
絶え間なく行く手を塞ぐ障害に歯噛みしながら、リボルバーを抜こうとした、その時。
「ヴァン。ここは俺が引き受ける。お前たちは先を急げ」
それまで傍観を決め込んでいたレステがピスキルピオンの相手を買って出たのであった。
「え？　……けど」
レステの言葉に、しかしヴァンは動くのを躊躇う。
「俺のことなら心配無用だ。こんな魔獣共になんざ、遅れを取るかよ」
「だったら僕たちも一緒に戦った方が早く――」
ヴァンの言葉が言い終わるより先に、レステの怒声が飛んだ。
「大局を見失うな！　お前たちの目的は《オアシス》を探し出すことだろう！？　だったら余計なことに構う前に、一秒でも早く《オアシス》を見つけることに魂を注ぎやがれ！」
「「～～～～～～～～～～ッッッッ！！？」」
図らずして二人の驚きが重なった。
全身に容赦なく突き刺さる桁外れのプレッシャーに、二人は足の震えを抑えきれなかった。
動こうにも動けない、金縛りのごとき時間が流れ。
「行け」
控えめの口調で呟いた声は驚くほどハッキリと、二人の鼓膜を震わせた。
「「……！」」
同時に金縛りが解けたヴァンとジェシカは、レステにその場を託し先を急いだのだった。

†

レステと別れた後、ヴァンとジェシカは賊のメモに記されていた？亡霊の怨嗟？らしき音に誘われ、《危険区域（ダークゾーン）》の最奥に佇む遺跡へと辿り着いた。

侵入者を待ち構えているかのごとく開かれた入口を前に、二人は得体の知れない不穏な気配を感じずには居られなかった。

「……行くぞ」

「……ええ」

互いに互いを鼓舞し合い、遺跡の中へと足を踏み入れた。

遺跡の内部は石畳が敷かれた造りになっており、至る所から砂が流れ出ていた。

周囲を警戒しながら進んでいく。

しばらく歩いた頃、ヴァンが遠慮がちに口を開いた。

「なぁ……緊張続きで喉が渇いちまった。……《水果》飲んでいいかな？」

それに対しジェシカは。

「あの人が何の意味もなく何かを渡したりするようには思えないのよね……。単なる思い過ごしならいいんだけど……とにかくここを出るまでは《獣水》で我慢しなさい」

「ちぇっ……」

要求を却下されたヴァンは、渋々といった表情で味に劣る《獣水》で喉の渇きを癒したのだった。

それからしばらく歩き、やがて開けた空間に出た。その矢先。

「――ヴァン。あそこ……！」

「……！」

ジェシカが空間の中央に佇む人影を察知し、二人は咄嗟に身構えた。

視線の先には白衣を纏った男が佇んでいた。

ただそこに存在しているだけだというのに、まるで周囲の空間が歪んでいるかのような錯覚を覚え、ヴァンは身を竦ませた。
「……あんたが南の亡霊・ノルドか？」
恐怖を押し殺しながら問う。
ヴァンは自身の肌に突き刺さるプレッシャーから、相手の強さを『レステに匹敵するほど』だと推し量った。
重苦しい沈黙が場を支配する中、白衣の男がおもむろに口を開いた。
「いかにも私がノルドだ。お前たちは此処がどういう場所か知って来たのか？」
「ああ」
「ならば、どうしてそう死に急ぐ？」
放たれた声には深い絶望が籠められているようだった。
「僕たちは死にに来たワケじゃない。荒野に潤いを取り戻すため、《オアシス》を求めてここまで来たんだ」
「……涸れた伝説（オアシス）か。そんなものを見つけてどうするつもりだ？」
「そんなの決まってるだろ！　《オアシス》さえ見つかれば大地は潤いを取り戻し、伝承の中に存在する？緑豊かな世界？が戻ってくる。そうなれば人は未来に希望を繋げ、力強く生きていくことが出来るんだ！」
ヴァンは己の信念を口にした。
だが、ノルドは。
「……果たしてそうかな？」
と、不敵に呟いた。
「何……？　どういう意味だ？」
「どういう意味も何も、お前の言ってることは単なる理想に過ぎないってことだよ」
「ああ理想さ。人が理想を思い描き、実現しようとすることの、何がいけないっていうんだ！？」
白衣の男の口車に乗せられ、熱くなるヴァンにジェシカが注意を

促す。
「ヴァン……挑発に乗らないで。冷静になって」
「僕はいたって冷静だよ！」
「……」
我を忘れているヴァンの様子に、ジェシカはかぶりを振ると、成り行きを任せるように口を噤んだ。
昂然と言い募るヴァンに、ノルドは冷笑と共に言い放った。
「ならば教えてやろう。かつてこの惑星は、お前が言った通り大地は潤い、緑に溢れていた。だが、人々の内にあったのは希望なんかじゃない……いかに都合のいい環境を作り出せるかという欲望に過ぎなかった。惑星が汚染され疲弊する事なぞお構いなしに、より便利な技術を追及し続けた。その結果、人類は惑星の怒りを買ってしまった。大地は涸れ果て荒野になった挙げ句、その身に呪いを刻まれた。……それが今の世界に広がる荒野が抱える真実だ。それでもお前たちは《オアシス》を求め、人類の歴史を繋いでいこうというのか？」
「ああ、それでもだ！」
ヴァンは臆することなく力強く言葉を継いだ。
「過ちを犯さない人なんていない。だからこそ大切なのは、過ちから学びよりよくしていこうとする思いだ。悪い部分ばかり取り上げて、望みがないからって切る捨てるばかりじゃ、何も解決しない。それはただ、現実から逃げてるだけだッ！」
ヴァンの言葉をノルドは一笑に付した。
「どんな時代でも、子どもというのは脳天気なものだな。世の中を知らずして、臆面もなく理想をのたまうんだからな。お前が考えるほど、世の中は甘くない事を知れ」
「そんなこと判ってるッ！　それでも……こんな世界だからこそ、誰かが駆け出さなくちゃいけないんだ！　立ち止まってるだけじゃ未来に辿り着けないだろッ！」
懸命に思いの丈を打ち明けるヴァンの姿に、ノルドは感情の籠も

らない眼差しを浮かべ。
「……お前たち……名はなんという？」
と、問うた。
「……え？　名前？」
拍子抜けするくらい単純な質問に、ヴァンは唖然としつつも名を名乗り、それにジェシカも続いた。
「僕はヴァン。ヴァン＝エヴァンス」
「……ジェシカ＝トンプソンよ。それがどうかしたのかしら？」
それまで様子見に徹していたジェシカが怪訝な面持ちで訊いた。
するとノルドはひとり得心が行ったような表情を浮かべて笑い、呟きを漏らした。
「なるほど。お前たちがヴァンとジェシカ……『最後の世代』の人間であったか。どうやらまだ、惑星自身も決め倦ねているようだな……この世界の行く末を……！」
「世界の行く末……？　一体何の話をしている？」
「ククク。『最後の世代』のお前たちならば、私たちを殺すことが出来よう。ただし、私よりも強ければの話だがな？」
「だから……さっきから何の話しを……？」
ヴァンの心をさらに揺さぶるように、ノルドは話を進める。
「ふっ。何も知らぬのだな。ならば冥土の土産に教えてやろう。――《荒野の亡霊（ファントム）》と呼ばれる私たちの存在と、お前たち『最後の世代』は謂わば対なる存在なのだよ。ちょうど闇と光のようにな。このふたつの存在が相まみえし時、激突は必然。戦いは避けられぬ宿命なのだよ！」
「対なる存在……？　僕たちと《荒野の亡霊（ファントム）》が……？」
事情が飲み込めず、ヴァンは混乱状態に陥る。
「お前たちは《オアシス》の手掛かりを求めてここまで来たのだろう？　確かに、私たちの呪われた身にこそ、《オアシス》に辿り着く秘密が隠されている」
「やっぱりあの噂はホントだったのか！？」

「ああ、本当だとも。――これがその証だ」
そう言うとノルドは、白衣をはだけて胸もとを露わにした。
「そ……それは！？」
「……！？」
驚くべき光景を目の当たりにし、二人は瞠目した。
ノルドの胸もと、その心臓部分に青く光る鉱物のような物体が埋め込まれていたのである。
「これが《惑星の石》……私たちに刻まれた呪いの証なのだよ」
「……《惑星の石》……」
ヴァンは慄きのあまり、ノルドの言葉を反芻することしか出来なかった。
「噛み砕いて言えば、コレが《オアシス》の欠片だと思えばいい。各地に眠る四つの《惑星の石》を集めた時、《オアシス》の封印は解かれるだろう」
ノルドの話に、ヴァンは憤りも露わに言い募った。
「そこまで知っているならどうして……《オアシス》を取り戻そうとしないんだ！？」
ヴァンの言葉にノルドは辟易したような表情で返した。
「愚問だよ。さっきも言っただろ？　私たちとお前たちは対なる存在……闇と光なんだ。闇と光が相容れることはない……つまりそういうことだよ」
「くっ……！」
とりつく島もないノルドの言葉に、ヴァンは悔しさを噛み締めた。
「珍しい訪問者に長話が過ぎたようだ。そろそろ始めようか？」
ノルドは白衣のポケットに手を突っ込んだ体勢で、余裕を見せつけながら言った。
「ヴァン……相手は《荒野の亡霊（ファントム）》よ……交渉の余地なんてないわ。戦わなきゃ殺られるだけよ……！」
ジェシカは背中から鉄塊を取り出しながら警告を発する。
「ああ……判ってるよ」

どこか煮え切らない返事を返し、ヴァンもリボルバーに手を添える。
「来たまえ！　そして、お前たちの《オアシス》に懸ける想いのすべてを私にぶつけてみせろ！」
壁際に荷物を置いたヴァンとジェシカは、その宣言を合図に石畳の足場を駆けた。
ノルドを挟撃する形で肉薄。
ヴァンはリボルバーを片手に敵の背後から。
ジェシカはアサルトに変形させた得物を構えて、正面から攻撃を仕掛けた。二人は初めて相対する敵の力を見極める？見？には回らず、速攻で勝負を決めに出たのである。
共にノルドの急所に狙いを定め、躊躇いなく引き金を引いた。
不可避の一撃を放った瞬間、二人は勝ちを確信した。
だが――。
「「――ッ！？」」
引き金を引いたのとほぼ同時に、銃弾が二人の頬を掠めるようにして通り過ぎたのだった。切り裂かれた頬から鮮血が滴る。
思いがけない反撃に面食らった二人は、慌てて距離を取って状況の把握に専念する。
「なんだ今の反撃は……！？」
「私にも判らないわ……。反撃の動作素振りすらなかったのに……」
ノルドの得体の知れない不気味さに、二人は動揺を隠しきれなかった。
距離を取って様子を窺う二人を嘲笑うように、ノルドはポケットから出した手を、素早く振り抜いた。
直後。
「ぐあっ……！？」
ヴァンの身体に鉛弾を撃ち込まれたような衝撃が走った。
「――ヴァン！？」
何をされたのかすら判らない状況に、ジェシカは悲痛な面持ちで

ヴァンを気遣う。
「だ……大丈夫だ。……それより奴の攻撃に気を付けろ……今、何が起こったのかまったく判らなかった……」
言いながらヴァンは、いつの間にか服についていた砂の塊を払いながら、ノルドを見据える。
「ククク。さっきまでの威勢はどうした？　来ないならこっちから行かせてもらうぞ！」
ノルドはヴァンたちが動き倦ねているのを良いことに、大胆に距離を詰めて来る。再びポケットから出した手を振り抜く動作をとった。
狙いはジェシカだった。
「――ジェシカ、避けろ！」
「くっ……！」
正体の判らない攻撃をどう避ければいいのかと無言で訴えつつ、ジェシカは大きく身を翻すと、石畳の上を転がって回避した。
ジェシカの後を追うように、石畳に砂塵が舞い上がる。
「逃げてばかりじゃ勝てないと思うがね？」
小動物を追い詰める強者のような雰囲気を漂わせながら、ノルドは二人を追い詰めていく。
「くそっ！　癪だが奴の言う通りだ。……逃げてちゃ勝てねぇ……！」
どこか思い詰めた表情で呟きを零した。
「ちょっとヴァン……何をするつもり！？」
身を案じて、不安げに訊ねるジェシカにヴァンは迷いのない口調で答えた。
「奴の攻撃を見極める」
「なっ……！？」
作戦と呼ぶには単純すぎるあまりに無謀な試みに、ジェシカは言葉を失った。
「何言ってるのよ！？　相手の手の内も判らずに突っ込んだりした

ら、自滅するのがオチだわ。そんなやり方が無茶だってことくらい、いくらヴァンでも判るでしょ！？」
憤然と言葉を並べ、思い留まらせようとするジェシカだが、ヴァンが一度決めたことを撤回するはずもなく……。
「この状況でどんな作戦を考えようとも、奴に丸聞こえだ。だったら単純な方が判りやすい。――だろ？」
そうやって話し合ってる間にもノルドの攻撃が迫り来る。二人はダメージを最小限に留めながら、話しを続ける。
「……判ったわ。援護するから、あんたの思うようにやってみて。攻撃の正体さえ掴めれば、きっと勝機は見出せるはずだから」
「ああ。任せろ」
短く返したヴァンの眼差しには、ジェシカに対する信頼が表れているようだった。
「隙を見て仕掛ける……とにかく掻き回してくれ」
「分かったわ」
至近距離で囁くように伝えると二人は散開し、付かず離れずの距離を保ちつつ牽制する。
ヴァンはその最中、ノルドの様子に奇妙な違和感を覚えていた。
「おかしい……」
誰にともなく呟く。
違和感はジェシカの攻撃に対するノルドの動きの中にあった。
位置関係上、当たって然るべきジェシカの弾丸が、まるで何事もなかったかのようにノルドを通過しては背後の壁に着弾する、という光景が相次いだのだ。無論、ノルドは銃弾を避けるような動作は一切見せていない。
「まさしく《亡霊》のなせる業だな……」
皮肉混じりに呟くと、ヴァンはなにより先にノルドの攻撃を見極めに掛かった。
ジェシカに視線で合図を送る。
事前に具体的な内容を話さずとも、簡単な意思疎通くらいなら二

人にとって造作もないことだった。
合図を受けたジェシカは素早く銃を変形させグレネード形体にすると、ノルドの足下目掛けて撃ち放った。
石畳に着弾した４０？グレネード弾は小規模な爆発を引き起こし、派手に砂煙を巻き上げた。
「どこを狙ってるんだい？　そんな大味な攻撃じゃ、私に傷一つつけられないよ？」
砂煙の中から余裕綽々といった口調が飛ぶ。
だが、この状況を作り出すことこそがヴァンの狙いだった。
ジェシカに指示した攻撃は元々ダメージを狙って撃ったものではなく、ノルドの視界を遮ることに意味があったのだ。
砂煙に己の気配を紛れ込ませ、ヴァンは類い稀なる集中力でノルドへと接近する。
気配を察知されることなく背後まで忍び寄ると、ヴァンはポケットの中身を改めた。
その矢先。
「――こそこそと目障りなことをするんだな」
「――！？」
刹那。驚くべきことが起きた。
辺りに立ち籠めていた砂煙が一瞬にして晴れ、ヴァンはその姿を晒す羽目になってしまったのだ。
ヴァンの姿を捉えるや否や、ノルドの反撃が飛んだ。それを辛うじて防御しつつ間合いから離脱すると、ヴァンは手中に握り込んだ攻撃の正体を確かめた。
「……え？　……砂？　そんなことって……じゃあまさか――――！？」
ノルドのポケットから掠めてきた一握りの砂から、それまでの謎が連鎖的に氷解していく。その推測を確認するかのように、ヴァンはリボルバーを構え、ノルドに向けて撃ち放った。
「――！！」

着弾の瞬間に意識を集中させたヴァンの眼は、その恐るべき真実を映し出していた。
「なるほど……さすがは《亡霊》ってところか……」
「ククク。どうやら気付いたようだな」
「ああ……。最初の不可解な反撃はあんたが繰り出したものじゃなかったんだな。……あれは僕たちが放った弾丸だったんだ。ジェシカの攻撃に対してもまったく避ける素振りすら見せなかったのも、そういうカラクリなんだろ？」
「……ヴァン……それってまさか……？」
少し遅れておおよその真相に辿り着いたジェシカが、驚愕の面持ちで訊ねる。
「そのまさかさ……。こんな現実離れした現象なんて信じたくねぇが……相手が《亡霊》なら納得もいく……」
一旦言葉を切り、数拍の後に言葉を継いだ。
「奴は砂を操り、自身の身体そのものを砂状化出来る能力者だ」
「そんな……まさかそんなことって……！」
人間に許された範疇を超えた能力を前に、ジェシカは慄いた。
「ククク。ご名答。《砂操術》と《肉体砂化》が私の能力さ。だが、能力を見破ったところで、お前たちに勝ち目などないがな」
「それはどうかな。トリックさえ判れば、打つ手はあるぜ」
「とんだ虚勢だな」
嘲るように呟くと、ノルドは白衣を脱ぎ捨てた。
「肉体を《砂化》出来る以上、予め砂を忍ばせておく必要など元からなかったのだがね。お前たちが為す術なく死に往くのも不憫だと思い、手掛かりを仕込んでおいたのだ。これはほんの情けさ」
「そりゃどうも。けど、その情けがあんたの身を滅ぼすことになりそうだな」
「ならんよ。そういう事態には……万が一にもね」
ノルドは相好を歪め加虐的に嗤うと、隠す必要のなくなった能力を遠慮なく発動し、攻勢に打って出た。

「手加減をするのも疲れるのでね。ここからは全力でいきますよ」
「チッ……！」
距離を詰めてくるノルドに対し、ヴァンは左手の自動式拳銃を構え、立て続けに発砲。
足止めを試みた。
だが、撃ち放った弾がノルドの身体に着弾した端から《肉体砂化》の能力により、ことごとくがダメージを与えることなく通り抜けてしまった。
「やはり無駄か……！」
「何度やっても同じさ。私の能力の前には、いかなる攻撃も無力と化すのだよ！　お前たちも、私が今までに葬ってきた賊同様、ここで朽ち果てるがいい！」
得意顔で捲くし立てながら、ノルドは砂弾を撃ち放つ。さっきよりも速度が増している攻撃に、ヴァンは反応に遅れた。
「ぐぅあああああああああああぁッッ！」
速度が増せば当然ながら威力も増す。
砂弾の直撃を受けたヴァンは、衝撃のあまり遥か後方の石壁に叩き付けられ、地面に倒れた。
「ヴァーーーーーーーン！？」
悲痛な叫びを上げて、ジェシカはヴァンの身を案じる。
その行為が決定的な隙を生んでしまった。
「――人の心配よりも己の身を守ることに専念するべきじゃないのかね？」
「なっ……！？」
油断したつもりはなかった。
ただ、ノルドの移動速度が予想を遥かに上回っていたのだ。
咄嗟にアサルトを構えようとするが既に遅く、ジェシカはあえなく蹴り飛ばされた。
激しい勢いで石畳の上を転がり、やがて砂に埋もれる形でようやく停止した。

反対側からその様子を見ていたヴァンだが、先の一撃で深刻なダメージを負っており、
己の弱さを呪っていた。
「ジェシカ……ッ！　くっ……これが《荒野の亡霊（ファントム）》の力……なのか……！」
視線の先で悠々と佇むノルドを見据えながら、ヴァンは歯噛みした。
砂弾を喰らった箇所から流れ出た血が、砂に染みこんでいく。
血を吸った砂は乾燥性を失い、次第に固まっていく。
「……」
その様子を見詰めていたヴァンの脳裏に、レステの言葉が蘇る。
――『物には最適な使いどころというものがある。
一時の渇きに抗えず飲み干すか、然るべき時まで温存しておくかは、お前次第だ』

レステがいう？然るべき時？が今であることは、ヴァンも感覚的に察していた。
だが、もしそうだとすれば、レステはどうしてこの事態を予測出来たのかという疑問が湧き起こる。
それでも全く根拠がないワケでもなかった。
レステはかつて《オアシス》を求め、荒野を駆けていたと言っていた。
ならば、その過程で《荒野の亡霊（ファントム）》と渡り合ったことがあるかも知れない。
その経験から今回の事態も予測出来た……と。
筋は通っている。
納得も出来る。
だがしかし、ヴァンの中の本能的な部分が、得体の知れない警鐘を発していたのだった。

とは言え、今は一刻を争う事態。
余計な心配をしている余裕などありはしなかった。
「賭けてみるしかないな……」
そう呟き、出口の方を見遣る。視線の先にあるナップサックを認め、小さく頷いた。
ゆっくりと立ち上がったところでヴァンはよろめいた。
砂弾により負わされた傷の影響から、血が不足し始めていたのだ。
おそらく、全力で動けるのは次が最後。
そんな覚悟の元、ヴァンは呼吸を整えながら、リボルバーと自動式拳銃の弾を装填した。
「ふぅ……」
神経を研ぎ澄ませるように長く息を吐き、直後、ヴァンはノルドを横目に捉えながら疾走した。
「おや？　まだそんな力が残っているのかい？　それなりに鍛えてはいるんだね。だけど、それももう終わりにしよう。私を超える力がない以上、お前たちに未来を担う資格はないのだからね。やはりこの惑星は一度滅びるしかない運命にあるのだよ」
「どうしてそうすぐ、悪い方向に考えて諦めようとするんだ！　みんなが手を取り合えば、切り開かれる未来だってあるはずだろッ！」
「すぐ……だと？　『最後の世代』の分際で、知った風な口を利くなよ？」
会話で注意を引きつけられたお陰で、ヴァンは難なくナップサックを拾うことが出来た。
中身を確認してナップサックを背負う。
「……どういう意味だ？」
「それは私の口から言うべきことではない。知りたくば自分で調べるのだな。もっとも、調べるより先に、お前たちはここに骨を埋めることになるのだがな」
「僕たちは負けない。《オアシス》を見つけ、この世界に潤いを取り戻すまで、僕たちは駆け抜けなきゃいけないんだ。……あんたが

誰だろうと、未来のために乗り越えさせてもらうぜ！」
「はっ！　この期に及んでほざきよったな小僧！　……なるほど、良い眼だ。ならばその信念で私を貫いてみせろ！　そして、私たちの絶望を染め直してみせろおおおおおおおおおおおおおお！　ヴァン＝エヴァアアアアアアアアアアアーーーーーーーーーーンス！」
衝動のままに突っ込んでくるノルドをしっかりと見据え、ヴァンは好機を窺う。
撃ち放たれた砂弾を紙一重で見切る。
続け様に繰り出された蹴りを防御すると同時に、死角を利用してナップサックに忍ばせた右手を素早く振り上げた。
直後、ノルドが背後に出現。
ヴァンは振り向き様に淀みない動作で自動式拳銃を抜くと、倒れ込みながら上空目掛けて引き金を引いた。
「どうした？　狙いも付けられないほど消耗したか！」
嘲笑を浮かべながら軽侮の言葉を吐き捨てるノルド。
だが、ヴァンは。
「これでいいんだ！」
「何……！？」
ノルドが異変を察知し、頭上を仰ぎ見た次の瞬間。

――ザァッ！

1ガロンにも及ぶ水がノルドに降り注いだ。
先刻ヴァンはノルドを狙って弾丸を放ったのではない。真の狙いは、死角を衝いて投げておいた《水果》。ヴァンはそれを空中で狙い撃ち、水を降り注がせたのである。
「水……だと！？」
突然の事態に動揺をきたすノルド。そしてそれまで常に発動状態にあった《肉体砂化》が次第に解かれていくのが傍目にも明らかだった。

ヴァンは自分の読みが正しかったのだと確信すると同時に、千載一遇の好機を逃さなかった。
「これならどうだあああああああああああああッッ！！」
己の信念をリボルバーの弾丸に籠め、ヴァンは果たさなければならない目的のために引き金を引いた。
――！！　――！！　――！！　――！！　――！！
一切の容赦なく、実に六連発。
全弾を浴びたノルドは、力無くその場に倒れたのだった。
「はぁッ……はぁッ……はぁッ……っっ！」
辛くも戦いに勝ったヴァンは、しばらく様子を窺った後、ジェシカの元へと駆け寄った。
「……大丈夫か、ジェシカ」
いつの間にか起き上がっていたジェシカは、壁にもたれ掛かるようにして座り込んでいた。
「ちょっと油断しただけよ。あんたより傷は浅いわ」
「そうか。ならよかった」
「それにしても、水が弱点だなんてよく気付いたわね」
「ああ……たまたまだけどな。……ふと、師匠の言葉を思い出して、もしやと思ったんだ」
「……つまり賭けだったわけね。相変わらず無茶するんだから……」
「なんとか勝てたんだからさ……ま、そういうなよ」
「それもそうね。……もし返り討ちに遭って死んでいたら、あんたの墓の前で一日中笑ってあげるところだったわ」
「……おいおい。そうなる前に助けてくれないのかよ……」
ヴァンの嘆きを華麗にスルーして、ジェシカは砂埃をはたいて立ち上がった。
「――そんなことより。さっさと《惑星の石》を頂いてここを出ましょ。私たちにはのんびりしている暇なんてないんだからね」
「ああ、そうだな」
そう答えて振り返ったヴァンは驚きに目を見張った。

なんとノルドが立ち上がっていたのだ。
「何をしている……早くトドメを刺せ。お前たちにはその資格がある……」
やはりヴァンの六連撃は、ノルドに深刻なダメージを与えていたらしく、息も絶え絶えに真の決着を要求してきた。
しかしヴァンは。
「嫌だ」
と、一切の迷いもなく言ってのけたのである。
ノルドは怪訝な表情で問う。
「なんだと……？　どういう一体……了見だ……？」
「了見もなにも、僕たちはあんたらを殺したいワケじゃない。ただ《オアシス》の手掛かりを――つまり、その《惑星の石》を渡して貰えればそれでいいんだ。だからトドメを刺すなんて真似はしたくない」
毅然とした態度で己の意思を告げるヴァンに対し、ノルドは不敵な笑みを湛えて言葉を返した。
「そうか……ならば教えてやろう。……この《惑星の石》は……所有者の命を吸うことで、真の力を発揮するのだよ……つまり、私を殺さない限り、《惑星の石》はただの石ころに過ぎない……ッ！　となれば当然(オアシス)にも辿り着くことは叶わぬ……っ！　それでもトドメを刺すことを拒むというかッ……！　ヴァン＝エヴァンス……ッッッ！」
ノルドは切実に何かを訴えかけるように言葉を重ねるが、明かされた真実を前にしてもヴァンは全く動じない。
「ああ、嫌だ。あんたを殺すくらいなら、別の方法を探すよ」
「甘いな。喉が焼けそうほどに甘い。……その甘さは身を滅ぼす毒。……とても未来など開けるものか……」
「そんなの、やってみなくちゃ判んないよ」
「ふっ……。誰もがお前のように楽天的なら……この世界も荒廃せずに済んだのかも知れぬな……」

悲壮な眼差しを浮かべてそう呟いたノルドは、自らの胸部に嵌め込まれている《惑星の石》を取り外した。
「……持っていけ。そして、今ここで私を殺さなかった後悔と共に戻ってくるがいい。今回は遅れを取ったが、次こそは永遠の眠りにつかせてやる」
その言葉に答えたのは、ヴァンでもジェシカでもなかった。
「――だったら俺が殺してやるよ」
突如として遺跡内に不遜な声が響いた。
「――！？」
気配に気付いたノルドが声のした方を振り向くより早く、無数の弾丸がノルドの身体を打ち砕いた。
「……愚かな。貴様に私を殺す資格はないのだよ……」
囁くような呟きと共に、ノルドの姿は消えた。
思いがけない事態に二人が動けずにいると、数秒前までノルドが居た位置にひとりの男が現れ、《惑星の石》を拾い上げた。
「へへっ。これが《惑星の石》か。こいつは俺様が頂いていくぜ」
「――ロバート！？」
それは紛れもなく、【ガンナーの墓場】で因縁をつけてきた、あのロバート一味だった。
「返せ！　それは僕たちに必要な物なんだ」
苛立ち混じりの声音で食って掛かるヴァンに対し、ロバートは何食わぬ顔で反論した。
「返せと言われて素直に返すバカがどこにいるってんだ。これがお前の物だっていう証拠はどこにもねぇ。前にも言っただろ？　荒野じゃ、拾った物はそいつの所有物になるんだよォ！」
「そうかよ。だったら力尽くでも奪い返すまでだ！」
「ほぅ。やる気か？　その傷で？」
「……っ！？」
気取られぬよう努めていたつもりだった弱点を突かれ、ヴァンの頬を冷や汗が伝う。

「かかってくるなら相手になってやる！」
言い切ってから途端に相好を崩し。
「……と、言いたいところだが、生憎こっちもそんなに暇じゃねぇんだ。次の機会にとっておいてやらぁ」
「逃げる気か！」
「そう吠えるな。俺が真の力に目覚めた時、存分に相手になってやるからよォ」
「真の力……？」
「ああ、そうさ。あるルートから仕入れた情報でな、《惑星の石》を四つ集めた者には人智を超えた力が与えられるっつー話だ。俺はその力を手にして、この世の支配者になってやるのさ。――じゃあな、あばよ」
言うが早く、ロバートたちは走り去って行ってしまった。
追いかけようにも傷が身体に響き、それどころではない。
「くそッ……！」
掴みかけた手掛かりを掠め取られたヴァンは、悔しさのあまり歯噛みして、地面を殴りつけた。
「……ヴァン」
心配そうな面持ちでジェシカは様子を見守る。
ひとしきり怒りを発散したヴァンは、力強い足取りでゆっくりと歩き出した。
「急ごう。……あいつらが《惑星の石》を集める前に……僕たちが手に入れるんだ」
「ええ。まだ諦めるには早いわ」
「キュキュイ」
いつの間にかジェシカの肩に戻っていたアクアが励ましのような声を上げる。
戦いが始まった途端に、どこかに隠れていたらしい。
無垢な鳴き声を上げるアクアの声援を受けて、ヴァンの表情に笑顔が戻った。

「お前も潤いのある世界を望んでるんだな」
「キュイキュキュ～イ」
「よーし。お前のためにも頑張って《惑星の石》を集めるからな！
――行こう、ジェシカ。まずは師匠と合流だ」
「そうね」

こうして《荒野の亡霊（ファントム）》の一角である、南のノルドに勝利したヴァンたちは、次なる《惑星の石》を目指して先を急ぐのだった。

†

あの後ヴァンとジェシカは【ガンナーの墓場】でレステと合流した。
レステは動かなくなった蠍型魔獣・ピスキルピオンに腰掛け、退屈そうにしていた。
見た目にも掠り傷ひとつないレステの様子に、二人は彼の底知れぬポテンシャルを感じずにはいられなかった。
三人揃ったところで一行は町人たちへの報告のためにも、一旦ルクス・ロースカまで戻ることにした。

「――うわぁ、すげぇ！」
ルクス・ロースカの町に入った途端、ヴァンが感嘆の声を上げた。
ノルド討伐に発った数時間前までは、町中砂に埋もれ、見る影もなかった町並みが、今や本来の姿を取り戻し、町中が活気に包まれていたからである。
「おう、戻ったみたいだな」
「リーダー。凄いや。この町ってこんなにキレイだったんだね！」
三人を出迎えに現れたのは隊商のリーダー、ジェンクスだった。
「だから言っただろ？　驚くってよ。これもお前たちが南の亡霊を倒してくれたお陰だよ。これでこの町も本来の営みを続けていける

ことだろう。感謝する」
　感謝の意を表すると共に差し出された手を、ヴァンは力強く握り返すことで応えた。
「キミたちは町の恩人だ。町もキレイになったことだし、よかったらゆっくりしていってくれ。みんなもお礼を言いたいそうだ」
「気持ちは嬉しいけど、僕たちは先を急がないといけないんだ。だから、そのお礼は無事（オアシス）を見つけた時まで取っておくよ」
「……そうか。……そうだな」
　残念そうに呟くジェンクスの言葉にヴァンは、まるで今生の別れにも似た哀愁が漂っているように感じられた。
「……リーダー？」
　その事を心配に思ったヴァンが声を掛けると、ジェンクスは気さくに笑うと「なんでもねぇよ」と、ヴァンの頭を荒っぽく撫でた。
「じゃあせめて傷の手当てくらいはさせてくれ」
「ありがとう、リーダー」
　ノルドとの戦いで傷を負ったヴァンとジェシカは、ジェンクスらによる治療を受けて、出立の準備を整えた。
「じゃあ、またな。お前たちなら俺たちの代わりに世界をよりよく出来る予感がするよ。……《オアシス》が見つかることを願ってるぜ」
「ああ。その時はまたみんなで集まろうぜ！」
　ヴァンが紡いだ未来の約束にジェンクスは数拍の間を置き、柔らかながらもどこか寂しさを湛えた眼差しを浮かべてゆっくりと口を開いた。
「……ああ、必ずな」
　二人は拳を付き合わせ、約束を交わし合った。

　間もなくして、憩いの町『ルクス・ロースカ』を後にしたヴァンたちは、ジェンクスから譲り受けた獣車で荒野を東に向けて駆っているところだった。

東に進路を取った決め手は、数分前にレステが言った一言にあった。

出立前。

次なる目的地について、ヴァンとジェシカが例の地図について話し合っていると。

「――この×印が《荒野の亡霊（ファントム）》の居場所？」

背後から地図を覗き込んできたレステが、おもむろにそんな推測を口にしたのである。

「ああ、間違いない。それはかつて俺たちが《オアシス》を求めて荒野を走り回った頃に掴んだ情報。もっとも、当時の俺たちじゃ奴らの足下にも及ばず、志し半ばで断念せざるを得なかったワケだがな」

「師匠でも勝てない相手がいるんだ……」

ヴァンは驚きのあまりゴクリと生唾を飲み込んだ。

「ここからだと西か東が近い感じだけど、どっちから行けばいいんだろう？」

「どの道、全部回らないといけないんだから、西から行けばどうかしら？　そうすれば、全部回ったあと、家までの距離が短くて済むわよ」

「全部回り終えた途端に《オアシス》が見つかるとも限らないだろ」

「それはそうだけど」

などといった調子で、二人が決め倦ねていると。

「――東へ向かえ」

と、レステが進路を示したのである。

有無を言わせないレステの迫力に、二人は黙って頷き、現在に至る。

最初こそ、初めて乗る獣車にはしゃぎまくっていたヴァンだったが、数時間も走る内にどうやら飽きたらしく、今となってはあくびをしながら馭者席で寛いでいる。

「……ジェシカぁ……次の町にはまだ着かないのか？」
気の抜けた声に、ジェシカが呆れ顔で返す。
「あんたね……東の町までどれだけあると思ってるの？　この調子だと早く見積もっても四回は朝日を拝むことになるわよ」
「え？　そんなにかかんの？　……リーダーに会えなかったらどうしてんだろうな」
「まったくよね。まぁその時は、獣車を借りられる金額まで、ヴァンに稼いでもらってたでしょうね。確実に」
「獣車を借りるくらいって……。それこそ一体何体倒せばいいと思ってんだよ……。考えただけでも気が遠くなるぜ……」
「結果的に無償で借りられたんだからいいじゃない。……って、愚痴ってる暇があったら操獣代わってもらるかしら？」
「……」
「……まったくもう」
都合が悪くなった途端、ヴァンは狸寝入りを決め込んだ。
レステからはいつでも一撃を入れに来いと言われているが、さすがのヴァンでも獣車の上で戦うワケにもいかないらしい。
手持ち無沙汰になったヴァンは、シンシアの書館で古書の一冊でも借りてくればよかったと思いながら、未だ見ぬ町『スラックヴィッツ』の町並みを想像し、期待に胸を膨らませるのだった。

あれからヴァンたちは野宿をしつつ、目的地を目指した。
途中、幾度となく《血眼獣（ブラッドショット）》の妨害に遭った所為で、余計な足止めを食らう羽目となった。
ヴァンはそんな疲れなど一切表に出すことなく、休憩のため獣車が止まるたびレステに挑み続けた。
「見てから動くなと、何度言えば判るんだ」
「はい！」
「戦いの基本は相手の行動を読むことだ。頭の中では常に、一手先、

二手先までを予測しながら動け」
「はい！」
逐一悪い点を指摘されながら、ヴァンはレステを超えようと必死で食らいついた。レステを超えれば、それだけ幼き頃からの目標である父親に近付くことが出来ると信じて。
「先読みばかりに意識を持ってかれて、足が止まりがちになってるぜ。目の前の攻防と先読みが同時に出来なきゃ使い物にならねぇ。判ったか」
「はい！」
戦いの中で指摘された点を意識しながら、ヴァンが攻勢に打って出た。レステの動きを先読みし、二撃目に備える。
刹那、ヴァンの初撃を躱したレステが読み通り背後に出現した。
「――そこだッ！」
狙い澄まして放った後ろ蹴りはレステを捉えることなく空を切った。
直後、左側面に現れようとする気配を察知し、いち早くリボルバーを構えた……が。
「――惜しいな。こっちだ」
「……ッッ！？」
右側面から上がった声に、ヴァンは心臓を鷲掴みにされたような錯覚を覚えた。
呼吸が乱れ、恐怖のあまり全身に冷や汗が噴き出す。
レステは形式的に突きつけていた銃口を下げると、ヴァンの動きを評した。
「まだまだだな。お前もガンナーの端くれなら、ガンナーとして荒野で戦うことの意味をもっと意識しろ」
「ガンナーとして戦う意味……」
この瞬間からヴァンは、レステが口にした言葉の意味を事ある毎に自問するようになるのであった。
そんな挑戦を続けながら獣車は荒野を駆けた。

ヴァンたちは、実に六度にも及ぶ野宿を余儀なくされた。
憩いの町『ルクス・ロースカ』を発ってから七日目の昼下がり。
「――見えた！」
長旅の末、一行はようやく東の町『スラックヴィッツ』を視界に認めた。
ヴァンは馭者席に立って眼前に見える町を眺め、相変わらず子どものような調子でひとり盛り上がっている。
「ちょっとヴァン！　そんなことしてて、落ちても知らないわよ……！」
と、ジェシカが注意を促した矢先。
「あ――」
案の上、バランスを崩したヴァンは、獣車から派手に転がり落ちた。おまけに魔獣の前肢に踏まれ、後ろ肢に蹴り飛ばされる始末。まさに踏んだり蹴ったりである。
「……もう。だから言ったのに……」
ジェシカは呆れながら獣車を止めて溜め息を吐くと、そっと手を差し出した。
「ほら、掴まって」
「おう、サンキュ」
ヴァンを乗せた獣車は再び走り出し、程なくして『スラックヴィッツ』へと辿り着いた。
近くの岩陰に獣車を繋ぎ置き、三人は町まで歩くことにした。その道すがら、ヴァンはおもむろに口を開いた。
「なぁなぁ。『スラックヴィッツ』ってどんな町なんだ？」
「そんなの私が知ってるワケないでしょ？　知りたかったらひとりで先に行って見てくれれば？」
「なんだよー……冷たいな」
ジェシカの反応に口を尖らせていると、先を歩くレステが落ち着き払った口調で答えた。
「スラックヴィッツは匪賊共が集まる吹き溜まりの町だ」

「え……？　匪賊の……町？」
予想外の事実を知らされたヴァンは、信じたくないといった面持ちで愕然としている。
「なんだその顔は？　どんな町を想像してたんだ？」
「え……あ……いや……その……」
追及されて口籠もっていると。
ぐぅぅぅ～～～～～～～～～～ぅぅぅぅぅ。
と、ヴァンのおなかが鳴った。
「あ……」
数拍の間を置いて、二人から失笑が零れる。
「ククッ。なんだお前、さては食い物目当てか？　単純でいいなぁ、おい」
「あはは。分かりやすいおなかね。ヴァンったら、食べ物には目がないんだから」
二人から笑い者にされたヴァンは「うるせー」と言ってそっぽ向く。そんなヴァンをジェシカが宥め賺している内に、三人は町の入口までやって来ていた――その直後。
「――！？」「――！？」「――！？」
三人はほぼ同時に、町から漂ってくる異様な気配を察知し、瞬時に感覚の網を張り巡らせた。
「これは血の臭い……！？」
誰にともなく呟かれたヴァンの言葉に、二人は無言で首肯する。
張り詰めた緊張感の中、三人は意を決して町の中へと踏み込んだ。その途端、異変に気付く。
「なんだこれ？　煙……？」
それは、濃霧のような何かが町中を包み込んでいるという光景だった。ヴァンたちの視界は、数フィート先すらが霞んで見える状態にあった。
三人は周囲を警戒しながら慎重に進んでいく。
「うっ……！」

ヴァンは地面に打ち捨てられた斬殺死体を目の当たりにして、思わず顔を顰めた。
注意深く辺りを見渡せばそこらかしこに、賊と思しき者達の斬殺死体が転がっているという、地獄絵図さながらの光景が広がっていた。
血の臭いの正体こそ判明すれど、賊たちを斬殺せしめた者の正体は依然として不明。
いつ闇に乗じて襲い掛かられてもおかしくない状況に、ヴァンとジェシカは目に見えて精神力を削り取られていた。
ヴァンたちの後方を歩くレステは、おもむろにその場に屈み込むと、斬殺死体を観察し始めた。そして何か得心がいったように口の端を持ち上げ、不敵に笑んだのだった。
ヴァンとジェシカがさらに歩みを進めた矢先、眼前にひとりの男が現れた。
ボロボロの服に身を包んだ町人と思しき男は二人の姿を認めるや否や、跪いて口を開いた。
「おおっ……旅のお方……！　お願いじゃ……町を助けてくれ……このままじゃ町は？奴？に殺されて終いじゃあぁ……！」
「じいさん！？　一体この町で何があったんだ？　誰がこんなことを？」
事情を訊ねるヴァンに、老人は怯えた表情でかぶりを振るばかり。
「それが分からんのじゃ……。ここは賊の町……他所様から恨みを買う心当たりは数え切れないほどあるじゃろうて……。そんな行いに対する報いがきたのじゃ……」
「そんな……。まさか、じいさんも匪賊なの？」
「いや……ワシのような老人は皆普通の人間じゃ。匪賊は若い衆らがやっておる」
「だったらどうして、匪賊の連中をかばって、町を守ろうとするの？　他の町に逃げて助けを求めれば……」
ヴァンの言葉に老人は悲しみに満ちた表情で告げた。

「違うのじゃ。……彼らとて、好きで匪賊をやっているワケではない。……ワシらのような老人のために、食糧を盗ってきてくれているのじゃ……。こんな世界でも、いつかきっと明るい未来はやってくる。そう信じて彼らは、ワシらにもそんな未来を見届けてほしいと言って……自らの手を汚してまで……！」
「……」
込み入った事情を訊かされたヴァンは、匪賊たちを一概に断じることは出来なかった。
無論、他人の物を力尽くで盗る行為は許されることではない。
しかし、守るべき相手に見届けて欲しい未来のために、地に這い蹲ってでも抗っている人々がいる。
そんな者たちの生き様に、ヴァンは心を打たれる思いだった。
「分かったよ、じいさん。この惨劇の原因は、僕たちが突き止めてみせるから」
「おおっ……助かりますじゃ」
老人は深々と頭を下げて感謝を述べた。
と、次の瞬間。
ヴァンは片手を上げて足を止めると、気配を殺すよう視線で合図を送った。
至近距離まで近付いてきたジェシカと、そっと耳打ちし合う。
「……この先に……誰かいる」
「誰かって？　町の人じゃないの？」
「……いや違う。これは相当の腕を持った者の気配だ」
「相当の腕って……まさか《荒野の亡霊（ファントム）》……！？」
「分からない……けど、その可能性も……ある」
言葉とは裏腹に、攻めッ気漂うヴァンの声に、ジェシカは釘を刺す。
「ちょっとヴァン、どうするつもり？　その身体じゃ存分に動けないんじゃないの？」
「短期戦なら問題ないさ。……それに、そうも言ってられない状況

だしな」
「……」
ヴァンの決意に触発されるように、ジェシカも戦意を漲らせた。
「分かったわ。私はヴァンの方針に従う。間違ってもあんたをみすみす死なせたりはしないんだから」
「サンキュな。頼りにしてるぜ」
互いの絆を確認し合い、ヴァンとジェシカは感覚を研ぎ澄ませる。
後方で死体の観察をしているレステに構わず、二人は気配を殺したまま、近くの家屋まで走った。
壁に背中を預け、相手の気配を探る。
「……気付かれたか」
「ええ、多分。……相手は相当の手練れのようね」
不気味な緊張感の中、緊張した面持ちで様子を窺っていた二人がゆっくりと動き出した。
家屋を壁伝いに移動するにつれ、相手の気配が強烈ににおい立つ。
角まで歩を進めたところで数拍の間を置き、ヴァンはリボルバーを引き抜くと一気に飛び出した。
「――動くなっ！」「――手を上げて！」
互いに銃口を突きつけながら、図らずして声が重なった。
「――！？」
眼前に現れた人物を認めたヴァンは、驚きとともにリボルバーを下げた。
「……キミは確か、『メルゲル』で会った……ナントカ蠍団の人……だよね？」
「そういうあなたは、甘っちょろい夢追いガンナーさん……？」
ヴァンの言葉通り、目の前にいるのは『メルゲル』で出会ったリサ＝ベネット、その人だった。
戸惑うヴァンをよそに、後方に控える剣士が無駄のない所作で礼儀正しくお辞儀した。
「甘っちょろいは余計だよ。……それにしてもベネットさんたちは

どうしてここに？」
　軽く反論しつつ、ヴァンは大まかな質問を口にした。
「愚問ですわ。そんなの《荒野の亡霊（ファントム）》を探しに来たに決まってますでしょう。あなたこそ、《オアシス》は見つかりましたの？」
「いや、まだだよ。僕たちも《オアシス》を探すために《荒野の亡霊（ファントム）》を追ってるんだ」
「あなたが《荒野の亡霊（ファントム）》を？　精々無駄死にするのがオチですわ。悪い事は言いません。取り返しがつかなくなる前に手を引いた方がよろしくてよ？」
「忠告痛み入るね。だけど僕たちは現に、南の亡霊・ノルドを倒して来たんだ。みすみす無駄死になんかしないよ」
「なんですって！？　南の亡霊を……あなたたちが倒したですって？」
　驚きに目を見張ったリサだが、すぐに落ち着きを取り戻し、冷静に返した。
「亡霊を倒した者には《惑星の石》が与えられると聞きますわ。南の亡霊を倒したというのなら、その証拠はありますの？」
「……いや……それは。……ロバートって奴に横取りされて、今は持ってないんだ」
「ロバート？　ひょっとして《幻影の掠奪者》ロバート＝グリーンのことですの？」
「あいつのこと知ってるんだ？」
「知ってるも何も、彼ほど悪評高い匪賊は他に居ませんから、嫌でも耳に入りますわ。人一倍生きることに執着していて、なんでも永遠の命を求めているという噂を聞いたことがありますわ」
　リサの話が終わったところで、ヴァンは町の現状について切り出した。
「それはそうと。この町で一体何があったか知らない？」
「いいえ。わたくしたちがここに着いた時点で既に、町はこの有り様でしたわ」

「そうだったんだ」
ヴァンはしばし黙考し、ある提案を切り出した。
「ねぇ。町の人たちを殺した原因を突き止めるのに協力してくれない？」
するとリサは露骨に顔を顰めて。
「お断りですわ」
と、冷たく突っぱねたが、ヴァンは食い下がった。
「どうして？　僕が甘っちょろい奴だから……それが気に喰わないの？」
「それもありますけど、弱い者なんかに手を貸したくないのが、一番の理由ですわ」
リサの言葉にヴァンは鋭い語気で言い返した。
「強者なら弱者を助けるのが道理だろ！　弱者を見下し見捨てることが、キミのいう？真の強さ？なのか！？」
「それを知り、見極めるために、わたくしは旅をしているのですわ。一時の情に流されるだけで適切な判断も出来ないお子様に、とやかく言われる筋合いはありませんわ！」
「……本気で言ってるのか？」
「ええ、もちろん。わたくしが従うのはわたくしより強き者の言葉のみ。それ以外は雑音以下ですわ」
居丈高に言い放ってくるリサを睨み付け、ヴァンは毅然とした態度で言い返す。
「だったら僕と勝負しろ！　僕が勝ったら協力してもらう」
「よろしくてよ。その勝負、受けて立ちますわ。南の亡霊を倒したとのたまうあなたの腕、とくと拝見させて頂きますわ」
両者の合意により、急遽決闘の場が設けられた。
「……ヴァン」
「大丈夫だよ、ジェシカ。僕は負けたりしないから」
「うん……」
ジェシカに勝利を約束して、ヴァンはリサに視線を戻す。

辺りを一瞥したヴァンは近くの開けた場所を顎で示し、リサを促した。
広場に出た二人は、互いに背中合わせになり、決闘のルールを確認する。
「長引かせるつもりはない。短期決戦でいこう。……ひとつ数えるたびに正面に向かって歩く。五つまで数える」
「よくてよ」
リサの応答が死臭の立ち籠める場に高らかと響き渡った。重たい沈黙が降りて、張り詰めた空気が場を支配する。
ジェシカもリサの仲間も、固唾を呑んで決闘の行く末を見守っている。
やがて、二人の声が同時に上がった。
「「い〜ち」」
発声と共に二人は一歩前へと進む。
「「に〜ぃ」」
二歩目。緊迫感が弥が上にも高まる。
「「さ〜ん」」
さらに前へ。ヴァンの頬に冷や汗が伝う。
「「し〜ぃ」」
リボルバーの横で構えたヴァンの手が、ピクりと動いた。
そして――
「「ごっ――!!」」
五つ目のカウントで、ヴァンはリボルバーを引き抜くと共に、背後を振り返った。
だが。
「なっ……!?」
銃口を向けた先にリサの姿はなかった。
それでもヴァンは動揺することなく、気配の察知に努める。
直後。
背後に気配を感じたヴァンは、咄嗟に身を捻って蹴りを放った。

ヴァンは完全にリサの動きを捉えた――
かと思われた、次の瞬間。
「――！？」
ヴァンの蹴りは空を切ったのだった。
ヴァンの攻撃を嘲笑うように、背後でリサの声が耳朶に響いた。
「勝負あり、ですわね？」
「……っ！」
体勢を立て直すより早く背中に突きつけられた感触に、ヴァンは己の敗北を認めざるを得なかった。
リサはヴァンの背中に突きつけた銃を下げてホルスターに収めると、得意気な表情で言い放った。
「その程度の実力で南の亡霊を倒しただなんて笑わせますわ。そもそも、そんないい加減な覚悟でわたくしの周りをうろつかれるのは正直目障りですの」
次第に苛立ちが籠もり始めるリサの声に、ヴァンは返す言葉がなかった。
「今度わたくしの前でその甘っちょろい信念を振り翳してごらんなさい？　その時は一切の手加減なく、あなたを叩き伏せて差し上げますわ」
そう言うとリサは、踵を返して立ち去っていく。
返す言葉が見つからないヴァンが、俯いたまま佇んでいると。
「――それでもわたくしの前に立ちはだかろうというのでしたら、？真の強さ？をもってわたくしに示してご覧なさい」
それだけ言うと、リサは足早に立ち去っていった。
そんな様子を見ていたリサの仲間のひとりアンソニーが、おもむろにヴァンの元へと歩み寄ると、畏まった態度で口を開いた。
「エヴァンス殿、度々申し訳ございません。しかし、お嬢も悪気があって言ってるワケではないことを、どうか判ってやってください。こちらでも言ってきかせておきますので。……では、これにて失礼」
深いお辞儀をして、アンソニーはリサの後を追い、去っていった。

リサが立ち去った後、ヴァンは何かを探るように視線を落とす。
「……？真の強さ？……」
誰にともなく呟き、黙考する。
今回の勝負……たとえ傷が完治していても勝てたかどうか判らないと考える一方で、果たして？真の強さ？とはそういう次元の話なのかという疑問が頭から離れなかったのだった。

†

結局、三人だけで人斬りの正体を突き止めることになったヴァンたちは、老人の家を借りて、そこで作戦会議を行っていた。
その最中に出たレステの提案に、ヴァンは驚きの声を上げた。
「――え？　僕たち二人だけで人斬りを倒せって？」
「ああ、そうだ」
「どうして？　師匠だって、僕たちが一日も早く《オアシス》を見つけ出したいことを知ってるくせに……！」
ヴァンの抗議にレステは目を瞑ったまま返す。
「俺がいたら、人斬りは現れない恐れがあるからな」
「？　なんで？」
本気で判らないといった表情でヴァンが問うと、レステは至極当然のように言ってのけた。
「そりゃ、俺の強さにビビって近付こうとしないからに決まってるだろ」
――自信があるのは判るけど……自分で言っちゃうんだ……それ。と言いたげな面持ちで、ヴァンとジェシカは苦笑いを浮かべ、当たり障り無く受け流した。
「判ったよ、師匠。人斬りは僕たちだけでなんとかしてみるよ」
「その意気だ」
軽く励ましの言葉を掛けると、レステは家を出て行こうと立ち上がった。

「師匠、どこへ行くんだ？」
「お前たちが人斬りを倒すまで、ちょっと散歩するだけだ。なぁに、倒した頃を見計らって戻って来るさ。じゃあな。町の人たちの為にも、しっかりやれよ」
「ああ、任せといてよ」
自信ありげにサムズアップをするヴァンに、レステもサムズアップで応え、家を出て行ったのだった。
「――そういうことだから、人斬りが現れるまでこの町に居させてもらうね、じいさん」
「そりゃもう遠慮無く居て下され。ご覧の通り老人ひとりには広すぎる家じゃ。空き部屋も好きに使ってくれて結構じゃ」
「うん。ありがたく使わせてもらうよ」
「きゅきゅーい」
ジェシカの肩に隠れていたアクアも、お礼を言うように弾む声で鳴いた。
「おや、魔獣の仔を連れておるとは珍しいことじゃて」
「これにはちょっとした事情があってね、僕たちが引き取ることになったんだ」
老人はヴァンの話に耳を傾けながら、穏やかな笑みを浮かべて相槌を打った。
「ねぇヴァン。ちょっと部屋で一休みさせてもらいましょ。『ルクス・ロースカ』から移動続きで疲れたでしょ？」
「ん？　ああ、そうだな。交代で休もうか。――じゃあ部屋借りるね、じいさん」
「あぁ、好きに使うがええ」
何気ない話をしながら階段を上っていく二人を柔らかな眼差しで見詰めながら、老人は囁くようにひとりごちた。
「……人ばかりでなく、魔獣をも尊ぶことの出来るお主たちならあるいは、惑星によって施された呪いを乗り越えて、ワシらの代わりに新たな時代を作っていけるやも知れん……」

そんな呟きがヴァンの耳には聞こえたような気がしたのだった。
「……？」
やがて荷物を置いて部屋で仮眠をとったヴァンが一階へと下りて来た。
「どうじゃ、部屋は？　寛げそうかい？」
「うん。広いしキレイし、いうことないよ」
「そうか。それはよかったわい」
老人は目尻に皺を刻んで穏やかに笑う。
「ところでさ、ちょっと町の人たちと話がしたいんだけど、大丈夫かな？」
「ああ、平気じゃて。周りからは匪賊の町と蔑まれてはおるが、この住人は皆優しい心をもっておるでな。……それだけに、今のような生活を続けるしかない状況が、無念でならんのじゃ……」
ヴァンは老人の無念を自分事のように受け止め、優しく声を掛けた。
「だったら僕の故郷にくればいいよ。父さんも母さんも村の人たちもみんな優しい人ばかりだからさ、事情を説明すればきっと受け入れてくれるよ」
「有り難い誘いじゃが、その気持ちだけで充分じゃよ。ワシらの行いは決して許されることではないのじゃからな……」
「じいさん……」
「すまんな、無駄話が過ぎたわい。どれ、町を案内しよう」
ヴァンは複雑な表情を浮かべたまま、老人の後に続いて家を出た。それから町中を周り、賊たちを中心に話を聞いて回った。
翌日もヴァンは熱心に家々を回り、町のみんながどんな思いを抱いて生活しているのかを知ることに努めた。
町人たちと話をしていく中で、ヴァンがある確信を抱き始めた矢先のこと。
「――出たぞおおおぉッ！　人斬りだあああぁッ！」

ヴァンが町に滞在してから三日目の夜。
突如として叫び声が響き渡り、町中が物々しい雰囲気に包まれた。
交代で町を巡回していたヴァンが先んじて駆けつけた。
「――とうとう現れたようね」
一足遅れて仮眠をとっていたジェシカも合流した。
「ああ。……奴が問題の人斬りみたいだ」
ヴァンたちが見据える先には、ひとりの男が佇んでいた。
野生的な風貌をしており、着流し姿の左腰に一振りの刀を帯びている。否応なく放たれる闘気からも、眼前の男がただ者でないことが窺い知れるようだった。
「お前が町の人たちを斬ったのか？」
ヴァンの問い掛けから間もなくして、ここ数日は晴れていた濃霧が急に立ち籠めた。
それはこの町に初めて来た時、町に充満してた濃霧と同じだった。
「いかにも」
やや遅れ気味ながらも男が問い掛けに答えた。
悪びれる様子のない男の態度に、ヴァンが食って掛かる。
「どうしてそんなことをするんだ！？　お前の目的は何なんだ！？」
「目的だと？　そんなもの、とうの昔に潰えた故、今となっては持ち合わせておらぬ」
「昔に潰えた……？　じゃあお前は意味もなく人を斬っているとでもいうのか？　僕はそれを訊いてるんだ！」
「拙者に人を斬る意味を問うか。ならば答えよう。愚かな者を戒め、断罪するためである……と」
「戒め？　断罪？　一体お前に何の権利があって、そんな真似をする！？　お前は一体何者なんだ！？　答えろ！」
語気を荒げて容赦なく問い詰めるヴァンに対し、男は落ち着き払った口調で答えた。
「拙者の名はザウドゥ。お主たちには？東の亡霊？と言った方が、判りよいか」

「――東の亡霊だと！？」
思わぬ返答にヴァンとジェシカは警戒心も露わに身構えた。
ザウドゥは証拠とばかりに腕を捲り、そこに埋め込まれた《惑星の石》を見せつけた。
ノルドと同じ証拠を前に慄く二人をよそに、ザウドゥは自信の考えを述べた。
「断罪とは言葉通りだ。卑しき匪賊などに明日を生きる資格は無い」
「卑しき匪賊？　それはこの町の人たちのことか！？」
「いかにも」
表面に見えている部分でしか判断していないザウドゥの物言いに憤りを覚えたヴァンは、町人たちの思いを胸に反論した。
「この町の人たちは意味もなく他人を傷つけて喜ぶ人なんかじゃない！　それに、人はきっかけさえあれば、その瞬間から変われる生き物なんだ！　上っ面だけでここの人たちを判断するのは早すぎるよッ！」
「笑止。それはお主の理想に過ぎぬ。人の心を変えるのは容易ではない。だからこそ、悪の芽は絶やさねばならぬのだ。邪魔立てすると申すなら――斬るもまたやむなし」
と、闘志を漲らせてザウドゥは刀を構える。
「望むところだ！　お前の考え方、叩き直してやる！」
「拙者を倒そうなどとは、笑止千万！　お主に恨みはないが、我が魔刀（ズィルファーダー）の錆となって頂く！」
「そう簡単にやられてたまるか！　――いくぞ！」
「ええ！」
二人が走り出すのと同時に、物騒な気配を察したのか、アクアがジェシカの肩から離れ、近くの物陰へと身を隠したのだった。
刀の間合いに入り込まないように注意を払いながら、ヴァンはリボルバーを連射した。
だが。
――キンッ！

――キンッ！
――キンッ！
――キンッ！
――キンッ！
――キンッ！
「なっ……！？」
ザウドゥが操る刀の前に、全弾弾き落とされたのである。
目を疑うような神業を目の当たりにしてたヴァンは、驚きのあまり動けなかった。
「ヴァン、離れて！」
半ば棒立ちのヴァンを援護するように、ジェシカのアサルトライフルが火を噴いた。
だがザウドゥは恐るべき反射神経で回避してのけると、音もなく跳躍して肉薄。すかさず抜刀して白刃を閃かせた。
「ぅく……っ！」
ザウドゥの一太刀を辛うじて銃身で受けたジェシカは、咄嗟に補助用の拳銃を抜くと至近距離で発砲した。その反動を利用してザウドゥの間合いから離脱した直後、ショックから立ち直ったヴァンが猛攻を仕掛ける。
「小賢しい」
絶え間なく撃ち込まれる弾丸を、ザウドゥは涼しい顔で悉く弾き落としていく。
傍目には押しているように見えるヴァンとジェシカだが、内心では攻め手を見出せずに焦っていた。
双方とも目まぐるしく動き回り、激しい攻防を繰り広げる。
ヴァンはレステの忠告を守り、先読みを心掛けていたが、ザウドゥの動きに対して全くついていけず、既に感覚で動かなければならないほどに追い詰められようとしていた。
ジェシカも状況に応じて銃を変形させ相手のテンポを崩そうとするが、固い守りに阻まれ、思うように突破出来ずにいた。

「はぁ……っ……はぁ……っ……！」
「……っく……！」
やがて二人に疲労の色が滲み始めた頃。
好機を窺っていたように、ザウドゥがヴァンに狙いを定め、一気に間合いを詰めてきた。
「……ッ！」
足止めを狙い立て続けに引き金を引くが、当然のごとく弾き落とされる。
休まず打ち続けるヴァンだったが、ものの数秒で弾切れを起こした。
「弾が無ければ無力とは……不便この上ないッ！」
気合いを籠めて叫び、ザウドゥは身を捻って鯉口を切った。
「くっ……！」
弾も切れ、ザウドゥの気迫に動きを封じられたヴァンに為す術などなく、今まさに放たれようとしている一閃を前に、ヴァンは死を覚悟した。
次の瞬間。
「……ッッッッ！？」
ザウドゥの剣尖は、ヴァンの眼前一インチのところで止められていた。
「お前……どうして止めた……？」
戸惑いを露わにするヴァンの問いに、ザウドゥは視線を落として答えた。
促されるように視線を足下に向けた瞬間、ヴァンは瞠目した。
「――アクア！？」
「きゅゅゅゅゅゅゅ！」
なんとアクアが身体を張ってヴァンを庇い、唸り声を上げてザウドゥを威嚇していたのである。
「きゅゅゅゅゅゅゅゅゅゅ！」
なおも威嚇を続けるアクアをしばらく見遣ったザウドゥは不意に

刀を納め、臨戦態勢を解いた。
「……？」
状況が飲み込めないヴァンは怪訝な表情で様子を窺っている。
するとザウドゥがおもむろに口を開いた。
「その魔獣とは如何様な関係だ？」
「……それは――」
ヴァンは戸惑いながらも、アクアを引き取ることになった経緯を説明した。
事情を聞いたザウドゥは、まるで憑き物でも落ちたみたな表情を浮かべ、滔々と語り出した。
「よもやこんな時代に、魔獣を気遣って生きている者が居るとはな……。人はきっかけさえあれば変われるというお主の言い分……あながち間違ってはいないようだ」
在りし日に思いを馳せるような眼差しを湛え、言葉を継いだ。
「お主たち、名はなんと申す？」
「……ヴァン＝エヴァンス」
「……ジェシカ＝トンプソン」
名を告げた途端、ザウドゥは目を見張った。
「なるほど……お主たちが『最後の世代』であったか。ならばなおのこと、その魔獣には感謝せねばならんな。唯一残された希望の光を、この手で断ってしまうところだったのだから……。……すまぬ」
そう呟き、ザウドゥはアクアに対して頭を下げた。
思いもよらない流れに、ヴァンとジェシカは顔を見合わせて困惑した。
「あの、ザウドゥ……さん？　じゃあもう人斬りは……」
恐る恐る訊ねるヴァンに、ザウドゥはハッキリと返した。
「うむ。もう二度と人斬りはしないと誓おう」
「本当？　よかった」
ザウドゥの言葉に、二人は安堵に胸を撫で下ろした。
「ありがとう、ザウドゥさん。思い直してくれて」

「いや、拙者の方こそ礼を言わねばならぬ」
「え？　お礼を言われることなんてなにも……」
「お主たちは拙者がなすべき目的を思い出させてくれたのだ」
「目的って？」
「うむ。お主たち『最後の世代』のために、未来を切り開くことに他ならぬ」
「僕たちの未来……」
ザウドゥは二人の肩を叩くと、踵を返して歩き出した。その背中には悲壮感が漂っているようだった。
そんなザウドゥを心配するように、ヴァンが声を掛けた。
「どこへ行くの？」
「北の亡霊・シャルクを止める」
「ひとりで？　だったら僕たちも一緒に――」
勢いでついていこうとするヴァンを、ザウドゥは視線だけで制した。
「来るでない。これは拙者の手で片付けなければならぬ問題でもあるのだ」
「ザウドゥさん……」
「では、さらばだ」
その言葉を最後にザウドゥは町を後にした。
同時に辺りを覆っていた濃霧も消え去ったのだった。

†

ザウドゥが町を去ってから程なくして、レステが戻ってきた。
事の次第を説明すると、レステは迷うことなくこう告げた。
「――後を追うぞ」

【THE　FOURTH　BULLET――？支え合う心？――】

「じいさん。お世話になりました」
翌日。
ヴァンは寝床を貸してくれた老人に挨拶をして町を発つところだった。
「いやいや。礼を言わねばならんのはワシらの方じゃ。これであとは、穏やかに暮らせれば何の憂いもないんじゃがのぅ……」
「じいさん、そのことなんだけど」
「はて？」
若い衆たちに掠奪をさせることなく暮らしていきたいという老人の願いに対し、ヴァンはある提案をした。
「一度、ジェンクス＝リードっていう、隊商の人に連絡をとってみてよ。僕の名前を出して事情を説明すれば、きっと手助けしてくれると思うからさ。そうしたらもう二度と、掠奪行為なんてしなくて済むようになるよ、きっと」
「おおっ……ありがたや。お言葉に甘え、すぐにでも手紙を送りますじゃ」
「うん。じゃあ、僕たちはもう行くね。元気でね、じいさん。――町のみんなも、どうか元気で」
ヴァンは見送りに集まった人々に別れを告げ、ザウドゥの後を追って町を発ったのだった。

†

獣車を駆り、北へ急いでいた途中。
「きゃあああああああっ！！　いい加減諦めてくださあああああああああああいっ！！」
広大な荒野に素っ頓狂な悲鳴が響き渡った。

「な、なんだ？」
ビックリして声がした方へ視線を向けると、小型獣車に乗ったひとりの少女が《血眼獣（ブラッドショット）》らしき魔獣・タイグルーに追い回されている最中だった。
「ちょっと、ヴァン……あれってもしかして……？」
操獣をヴァンに放り投げ、ジェシカは馭者席で立ち上がって、眼前の光景に目を凝らした。
急に手綱を託されたヴァンは慌てながらも獣車をコントロールしてのけた。
そしてヴァンも眼前の少女へと視線を向ける。
荒野には珍しい黒髪を風になびかせた風采からは、深窓の令嬢を思わせる優雅さに溢れていた。
それは紛れもなく。
「――間違いない、シンシアだ！」
再会の喜びより先に、目の前の状況を打破する方が先決だった。
「助けるぞ、ジェシカ！」
「言われなくても！」
言うが早く、ヴァンは手綱を操り進行方向を変えた。
最高速度で獣車を駆り、タイグルーへと接近していく。
「ジェシカ。奴の注意を引いてくれ」
「了解！」
ヴァンの指示を受けて、ジェシカは鉄塊を手に取ると、淀みない動作でグレネードランチャーに変形させた。
射程距離まで接近した瞬間に引き金を引いた。
発射されたグレネード弾はタイグルーの足下に着弾。爆風を巻き上げた。
動きが止まった隙にヴァンとジェシカは一気に距離を詰め、《血眼獣（ブラッドショット）》であることを確認すると同時に、的確な射撃でタイグルーを仕留めたのだった。
「シンシアさん、大丈夫？」

少し離れたところで戦況を見守っていたシンシアの元までやって来て声を掛けた。
レステは獣車で待機している。
「ヴァンさん！？　ジェシカさん！？」
シンシアは心底驚いた様子で声を上げた。
「たまたま通り掛かってよかったよ」
「あ……ありがとうございます。助かりました」
「これくらい、大したことじゃないよ」
淑やかな所作でお礼を述べるシンシアに、ヴァンは表情を緩めて相槌を打った。
そのやりとりを傍で見ていたジェシカは不愉快そうな眼差しをヴァンに向けると、無言で後頭部を殴りつけた。
「いてぇ！　なにすんだよ、ジェシカ」
殴られた意味が判らないといった面持ちで、ヴァンが抗議するとジェシカはそっぽ向いて呟いた。
「……でっかい虫がいたのよ」
「……？」
ヴァンは困り顔で殴られた箇所をさする。
そんな光景を微笑みながら見守っていたシンシアが、おもむろに口を開いた。
「相変わらず仲がよろしいですね」
「……そんなんじゃねぇって。ただ理不尽に殴られてるだけだし」
「……」
ジェシカは何も答えず、ヴァンを睨み付けていた。
「ところで――」
少しの沈黙を置いて、ヴァンが話題を切り替えた。
「シンシアさんはやっぱり古書探しの最中だったの？」
「ええ、そうです」
そう答えた矢先、シンシアは何かを思い出したように「あ！」と声を上げ鞄を漁ると、一冊の古書を取り出した。

「ちょうどよかったです。これをヴァンさんたちに渡したいと思ってたんです」
「僕たちに？」
疑問符を浮かべながら古書を受け取り、ページを捲るとシンシアの意図を察した。
ヴァンには古書に記されている内容は殆ど読めなかったが、辛うじて《荒野の亡霊（ファントム）》に関する記述だということは理解できた。
それは《荒野の亡霊（ファントム）》の名前に関する記述だった。

【砂を操りし南の亡霊――ノルド】
【魔刀を極めし東の亡霊――ザウドゥ】
【千の獣を操りし北の亡霊――シャルク】

そして、次のページを捲ったところで、ヴァンの全身に衝撃が走った。

【精神を操りし西の亡霊――レステ】

「え……！？」

――　レ　ス　テ　――

信じ難い名前を目の当たりにして、ヴァンの思考が停止する。
「ヴァンさん？　どうかしましたか？」
「……」
「どうしたの、ヴァン？」
二人の声にも反応出来ないくらい、ヴァンは疑念の渦に飲み込まれていた。
――違う……ただ名前が一緒なだけだ……。

――現にこうして一緒に戦ってくれているじゃないか……。
しかし、考えれば考えるほど深みに嵌っていく。
「ねぇ、ちょっとヴァンったら！」
ジェシカに肩を揺さぶられた弾みで、古書が手から滑り落ちる。
「一体何が載って――」
古書を拾ったジェシカが、ヴァンの見ていたページに目を走らせた瞬間。
「え……嘘でしょ……！？」
事の重大性に気付き、ジェシカも言葉を失った。
「お二人とも……ど……どうしたんですか？」
心配した面持ちでシンシアが声を掛ける。
「え……ああ……ごめん。……なんでもないよ。心配しないで」
「……そうですか。それならいいのですが……」
腑に落ちないといった様子ながら、シンシアは追及を避けた。
「シンシアさん。この古書……ちょっと借りてもいいかな？」
「はい。そのつもりで持っていましたので、どうぞ遠慮なく」
「ありがとう」
ヴァンは後方に待機する獣車を一瞥して、古書をナップックに仕舞った。
「シンシアさんはこれからどうするの？」
するとシンシアは口調を弾ませて答えた。
「これからまた遺跡へ向かおうと思います。もう少しで、大人たちが隠している秘密に辿り着けそうなんです」
「大人たちが隠している秘密？」
「はい。それが何か今はまだわかりませんが、その秘密が判れば《オアシス》に大きく近付ける気がするんです」
希望に満ちた表情で話すシンシアの意気込みに、ヴァンは心強さを感じていた。それと同時に『大人たちが隠している秘密』という言葉に、ヴァンも思い当たる節があった。
「シンシアさん。もしよかったらでいいんだけど、その秘密が判っ

たら僕たちにも教えてくれないかな？」
「もちろんです。その時は真っ先にお知らせしますね」
「ありがとう」
「いえいえ。お互い《オアシス》を探す仲間として、当然のことです」
「うん。シンシアさんがいてくれて、僕たちも心強いよ」
「お互い《オアシス》を見つけるために頑張りましょ」
「はい！」
志しを確かめ合った三人は、固く握手を交わし合った。
「きゅきゅきゅーい」
自分も仲間だと言わんばかりに、ジェシカの肩からアクアが姿を現した。
「ごめんさない。あなたも立派な仲間でしたね。アクアも元気そうで安心しました」
アクアの前肢を握って謝ると、シンシアは久しぶりの再会を喜んだ。
「――では、わたしはそろそろ行きますね」
「そうだね。僕たちも先を急がないといけないし」
「またね、シンシア」
「はい。それでは」
にこやかに手を振って、シンシアは小型獣車に乗って駆けて行った。
シンシアを見送った後、ヴァンは神妙な面持ちで呟いた。
「……急ごう。ザウドゥさんが心配だ」
「そうね」
二人はシンシアの古書から得た情報をレステに隠したまま、北へと急ぐのだった。

†

「ここが……狩猟の村『カチャップ』……」
獣車を駆り、実に十日もの日数を要し北の村『カチャップ』に辿り着いたヴァンとジェシカは、村の様子を目の当たりにして唖然としていた。
今まで訪れたどの町よりも、村中が壊滅的なまでに破壊されていたのである。
村人たちも抵抗を試みたらしく、魔獣の死骸がところどころに見受けられた。だが、その死骸は普通じゃなかった。
「なんだこの魔獣……」
それは普通の魔獣でも《血眼獣（ブラッドショット）》でもない……まるで影から生まれたように黒い、今までに見たことのない類の魔獣だった。
「酷い。……誰がこんなことを」
ジェシカの呟きに、ヴァンが険しい表情を浮かべて答えた。
「……多分、北の亡霊……シャルクの仕業だ」
「シャルク！？　じゃあザウドゥさんは間に合わなかったの？」
「判らない……。とりあえず村人を捜そう。この事情を聞かないと……」
「そうね……。行きましょう」
三人は周囲に注意を払いながら、慎重に村の中へと進んでいく。
やがて、元は居住スペースだったと思しき開けた空間に出た。
そこでの光景に、ヴァンはさっきとは違う意味で驚いた。
壊滅的な被害にも関わらず、村の人たちは活き活きとした雰囲気で懸命に家を建て直していたのである。それは『ルクス・ロースカ』でも目にした光景だった。
「……」
手痛い被害に屈することなく、元の生活を取り戻そうとする村人たちの姿に、ヴァンの中である？答え？が出ようとしていた。
それからすぐに、ヴァンは復興作業に励む村人に声を掛けた。
「おう、ボウズ。そのナリからして、流れのガンナーかい？　せっかく来てくれたのにタイミング悪かったなァ。見ての通り、あの真

っ黒な魔獣の襲撃に遭っちまってなァ、今、立て直してる最中なんだ」
「それって、北の亡霊の仕業なの？」
「北の亡霊？　さァ、そんな話は聞いたことねぇな。俺たちは魔獣を狩って生活してるからなぁ。恨まれても仕方ねぇっちゃ仕方ねぇやな」
　男はカラカラと、陽気に笑い飛ばした。
「ま、壊されても仲間さえ生きててくれれば、何度だってやり直せる。物がいくら壊されようが関係ないんだよ。大切なのはこの身体ひとつってことさ」
「そんなに襲われてるの？」
「まぁな。昔は三ヶ月に一度の頻度だったが、最近はやたらと増えたな。……ここ十日の内にもう三度も襲われちまった」
「三度も？　その度にこの村を立て直してきたってこと？」
「ま、そういうことだ」
「……！」
　滅びを迎えるしかないと言われているこの世界で、何度も立ち上がろうとする強い意志を前に、ヴァンの心は打ち震えていた。
「ボウズたちはどうしてこの村に来たんだ？」
「え……あ……っと、……ある人を追って来たんです」
　ヴァンが事情を説明すると、男は心当たりがあるような表情で切り出した。
「ある人？　もしかしてそりゃ、けったいな格好をして刀を帯びた兄ちゃんのことか？」
「知ってるの！？　教えてください……！　その人がどこへ行ったか……！」
　ヴァンは透かさず詰め寄って追及する。
「どんな事情があるかは知らないが、頑張りな。その兄ちゃんはここからさらに北にある岩場へ向かったみたいだぜ」
「ありがとう！　おっちゃんたちも村の立て直し頑張ってくれよな

！」
「ああ。その頃にまた来てくれ。最高の料理をご馳走するぜ」
「ご馳走！　やったー！　約束だぜ、おっちゃん！」
「もちろんだ。村に来た時は、このドルジュを訪ねてくれい」
「僕はヴァン！　覚えててくれよ！」
ヴァンはドルジュと拳をぶつけ合わせて約束を交わした。
「よし。北の荒原へ急ごう！」
ヴァンは意気を漲らせ仲間を鼓舞すると、ザウドゥを追って村を後にしたのだった。

†

北の岩場に近付くにつれ、桁外れのプレッシャーがヴァンたちにビリビリと突き刺さってくる。
「何なの……！　このバカげた気配は……！」
「きっとザウドゥさんがシャルクと戦ってるんだ……！」
まるで一歩進むたび、身に掛かる重力が倍になっているような感覚に、脂汗が滲む。
「あれ？　師匠……？」
背後から聞こえていた足音が消えていることに気付いたヴァンが振り返ると、いつの間にかレステの姿は消えていた。
「……師匠」
ヴァンは落胆したような信じようとしているような複雑な面持ちで呟いた。
そんなヴァンの心境を察したのか、ジェシカが優しく声を掛ける。
「ヴァン。今は目の前のことに集中しましょ。その悩みはそれから考えればいいわ」
「……ああ……そうだな」
ヴァンはジェシカに支えられながら、ザウドゥの元へと急ぐ。
その道中、まるでヴァンたちの接近を阻むかのように、漆黒の魔

獣――《漆黒獣》が群れで現れた。
「邪魔だあああッ！　どけええええええッ！」
疾走しながらリボルバーを引き抜き、的確な射撃で一弾一殺で蹴散らしていく。
「かかって来なさい！　穴だらけにしてあげる！」
ジェシカは変形させたアサルトライフルを掃射。《漆黒獣》を牽制したところで素早くグレネードランチャーに変形。４０?グレネード弾を撃ち込み一掃した。
「やるじゃん。ジェシカ」
「ふふっ。まだまだあんたにも負けてられないからね」
「僕もだよ」
互いに対抗意識を燃やしながら笑い合う。
そして競い合うようにどんどん速度を引き上げて走り、岩場を目指した。
やがて見えてきた岩場のただ中で、ザウドゥが数多の魔獣――《漆黒獣》を操る少年と戦っていた。
「ザウドゥさん！」
咄嗟に名前を叫ぶが、戦いに集中しているザウドゥにヴァンの声は届かなかった。
「ヴァン、見て。あの子」
「ああ」
状況からも相手の少年が、千の獣を操りし北の亡霊・シャルクであることは容易に推測出来た。
ザウドゥは殺到してくる《漆黒獣》を次々と斬り殺していく。魔獣をまったく寄せ付けない化け物じみた強さに、ヴァンは完全に魅入っていた。
「私たちと戦った時なんかとは、比べものにならないじゃない……！」
「……あれがザウドゥさんの実力なんだよ」
眼前で繰り広げられる圧倒的な戦いを前に、ヴァンは畏敬の念を

籠めて呟いた。
戦況は一方的で、完全にザウドゥが押しているように思えた。
だが、際限なく生み出される《漆黒獣》を前に、ザウドゥは思いのほか苦戦を強いられているようだった。
「なんだか様子がおかしいわ」
ジェシカの不安を映し込むかのように、次第に場の雲行きが怪しくなっていく。
一太刀で倒せる敵の数が見る見る減っていく上、それまで躱せていた攻撃に掴まるほどに動きが鈍っているのが判った。
――このままだと殺される！
そう直感したヴァンは、何よりも先に飛び出していた。
「――ヴァン！？」
「ザウドゥさんを助ける！」
ジェシカの制止を振り切り、ヴァンは駆ける。
「わ……私もいくわよっ！」
僅かに遅れてジェシカも後に続いた。

一方でザウドゥは、持てる力の全てを振り絞り抗っていた。
「よもやこれほどの力を秘めていようとは……っ！　侮ったか……！」
どれほど《漆黒獣》を屠ろうとも、シャルク本体に近付けない状況に苛立ちを覚え、歯を軋ませた。
「あれ？　もう終わり？　もっと楽しませてよ」
シャルクは余裕の笑みを浮かべ、ザウドゥを挑発して弄ぶ。
「くっ……！」
ザウドゥは片膝をついた状態でシャルクを睨み据える。
「何？　その反抗的な眼は。ホント、理解に苦しむよ。どうして人間なんかに肩入れするのかってね。ねぇ？　どうして？　弱く浅ましい上に身勝手な人間なんか生かしたところでロクなことにならないのは、ボクたちが呪いを受けたあの日に判ったはずでしょ？　ま

さか忘れちゃったとか言わないでね」
　人を食ったような物言いのシャルクに、ザウドゥは毅然と言い返す。
「昔はそうだったかも知れぬ……。だが、時代とともに人の心が変わりゆくのも世の在り方なれば……未来に希望を託すのもまた一興」
　ザウドゥは一切の迷い無く言い切った。
　シャルクはそんな彼の信念を嘲笑う。
「人の心が変わる？　未来に希望を託す？　なに寝惚けてるのさ？　どれだけ時が流れようと、人の本質は変わりはしない。それは歴史が証明しているじゃないか。そんな人間に未来を託したところで、かつての二の舞になるのがオチだ。……どうしてそれが判らない？　このまま滅びを迎えるのが正しい道……それがあの日から変わらない、惑星の意思なんだ。ボクたちはそれを見届けるために存在しているようなものじゃないか。忘れたとは言わせないよ？」
　饒舌に語るシャルクを相手に、ザウドゥは己の信念を貫き通す。
「……彼らが導く未来の礎となれるのなら、拙者はそれで本望」
「ふーん。……じゃあ今すぐ死ねよ」
　吐き捨てられた冷ややかな言葉に、ザウドゥの全身に悪寒が駆け巡った。
「……っ！」
　突如として生み出された《漆黒獣》がザウドゥを噛み砕く寸前。
――！！　――！！　――！！
　銃声が轟くと同時に《漆黒獣》がその場に沈んだ。
「――ザウドゥさん。大丈夫？」
「私たちが加勢するわ」
「お主たち……」
　颯爽と現れたヴァンとジェシカの姿に、ザウドゥは目を見張った。
「誰だい？　キミたちは」
　思わぬ介入者にシャルクは苛ついた口調で問う。

「僕はヴァン＝エヴァンス！　この世界に《オアシス》を取り戻す人間だ！」
「ヴァン＝エヴァンス？　なるほど、『最後の世代』が動いていたのか。それならザウドゥが懐柔されたのも納得がいくよ。文字通り最後の希望というワケだ？」
　得意気に喋るシャルクを横目に、ヴァンはザウドゥに肩を貸す。
「ザウドゥさん、しっかり」
「……不覚をとった。彼奴め、いつの間にかあれほどまでの力を蓄えていようとは……」
「ここからは僕たちも一緒に戦います」
「済まぬ……。だが、拙者にはもう、如何ほどの余力もない。足手纏いになるのが関の山だ。……囮にも使えぬことは彼奴も判っているはずだ……」
　ザウドゥの言葉にヴァンの脳裏にある閃きが走った。
「僕にひとつ考えがあります……」
　耳打ちしながらヴァンは、ザウドゥを連れて岩場の陰まで退いた。
「何？　かくれんぼ？　いまさら相談したところで、キミたちに勝ち目なんてないよ？」
　シャルクの嘲笑が響く中、ヴァンたちはひとつの作戦を立てていた。
「――という戦法です。あいつを相手に長期戦が不利なのは明白。だったら、この作戦に賭けてみても悪くないと思うんです」
　自信を漲らせるヴァンに、ザウドゥは。
「……しかし、拙者にはこのような……」
　不安を滲ませた弱気な面持ちで返した。
「大丈夫です。ザウドゥさんなら出来ます。僕の魂を信じてください」
「……承知した。我が全霊を賭してやり遂げてみせよう」
　一転して決意を滾らせたザウドゥは、懐の感触を確かめて頷いた。
「……じゃあ手筈通りに」

その言葉を合図に、ヴァンとジェシカは近くの岩陰に身を隠した。
ザウドゥは場所を選ぶように辺りを見渡し、おぼつかない足取りで移動した。

やがて、悠々と歩いて後を追ってきたシャルクが、岩壁を背にして佇むザウドゥを視界に捉えた。
「見〜つけた。……あれ？　あの子たちは？」
シャルクの問いにザウドゥは黙したまま答えず、刀に手を添えて構えた。
「決着をつけよう、シャルク。次の一撃でお主を仕留めるッ！」
「どうしたの？　急に。あれだけやってまだ懲りないんだ？」
呆れを含んだ口調で返しながら、シャルクは視線だけを動かす。
「ふ〜ん。そういうことか」
何かに気付いたように不敵な笑みを浮かべ、ザウドゥに視線を戻した。
「じゃあお望み通り、跡形もなく喰らい尽くしてあげるよ」
「その前にお主の首を斬ってくれるわ」
「お〜恐い。まだそんな殺気を放てるなんてビックリだよ」
その軽口を境に、場の空気が張り詰める。
ザウドゥは抜刀の構えで。
シャルクは右手を水平に突き出し、魔獣生成に備える。
「……」
「……」
互いに無言。
一瞬の好機を探り合う。
と、次の瞬間。
――――！
シャルクの頭上で連続的な銃声が響いた。ジェシカのアサルトだ。
だがシャルクは、その攻撃を予測していたように右手を向けて《漆黒獣》を盾にして防ぐ。

「残念だったね！　その程度の奇襲はお見通しだよ！」
その隙に、背後の岩陰から飛び出したヴァンが自動式拳銃を連射した。
シャルクは今、生み出した《漆黒獣》でジェシカの攻撃を防いでいる。たとえ反応出来たとしても魔獣生成は間に合わないだろうと読んでの発砲だった。
しかし。
「それで虚を衝いたつもりかい？」
「え？」
次の瞬間、シャルクの背中から生成された《漆黒獣》の群れがヴァンへと迫り来る。
「右手からしか生成出来ないと思ったのかい？　だとしたらとんだお間抜けさんだね。騙されてるとも知らずにさあ！」
嗜虐的な笑みを浮かべて言い放つ。
シャルクはこの事態を予測していたからこそ、ジェシカに対して最小限の魔獣で対処していたのだ。後に続くヴァンを確実に仕留めるために。
「だから言ったでしょ？　いまさら相談しても勝ち目がないって。そんなヤワな腕じゃ、この世界の呪いを打ち砕くことなんて出来ないよ。ましてや未来に希望を繋げることなんて夢のまた夢だろうね」
「いいや、打ち砕いてみせる！　この世界の呪いを！　そして僕たちは未来に希望を繋げるんだ！」
迫り来る《漆黒獣》を見据えながら、ヴァンは揺るぎない思いを言葉に籠めた。
為す術のない状況にも関わらず、未だ抗おうとする意思を絶やさないヴァンの様子に、シャルクの猜疑心が鎌首をもたげた。
「――まさか！？」
ハッとして振り向いた時には既に、ザウドゥがヴァンのリボルバーを構えていた。
「くらいやがれ。これが未来へと繋がる希望の力だあああああああ

あああああああッ！！」
「くっ……！」
シャルクは咄嗟に魔獣を生成し、ザウドゥを仕留めようとけしかける。
ザウドゥは思いのほか冷静に狙いを定め、呼吸するように引き金を引いた。
「……っ！」
「……っ！」
シャルクの魔獣がザウドゥに迫り。
ザウドゥの弾丸がシャルクに迫る。
時の流れが凝縮されたかのように、一秒が永久ほどに長く感じられる錯覚の中で、強大なふたつの意志が交錯した。
もとより動く事すらままならなかったザウドゥは魔獣の攻撃をモロに受け、背後の岩壁に叩き付けられた。
「ザウドゥさん！？」
同時に魔獣が消滅した。それはシャルクの意識が途絶える前触れだった。
「ば……かな……」
驚愕に満ちた呻き声と共に、シャルクはその場に倒れた。
一瞬の思考停止を経て、ヴァンとジェシカはザウドゥの元へと駆け寄った。
「――ザウドゥさん！　大丈夫？」
「酷い傷……！　まって、すぐに手当てを……！」
「必要ない……しばらくすれば……回復する……」
ザウドゥは治療を試みようとするジェシカを制止し、ヴァンへと視線を向けた。
「お主のお陰で……我が使命を果たすことが出来た……感謝する」
「僕たちはチャンスを作っただけ。最後はやっぱりザウドゥさん自身の力だよ」
「そうよ。とても初めてとは思えない、見事な一撃だったわ」

二人の賛辞にザウドゥは晴れやかな表情で微笑んだ。
「……しかし拙者の所為で……」
喜びも束の間。ザウドゥは済まなさそうに目を伏せて、ヴァンのリボルバーを差し出した。魔獣と交錯した時の衝撃が原因で、リボルバーは無惨にも破壊されていたのである。
「……お主の魂を壊してしまった。なんと詫びればよいか……」
意気消沈するザウドゥからリボルバーを受け取ったヴァンは、穏やかな眼差しを湛えて口を開いた。
「壊れてなんかないよ。僕の魂はいつもここにあるんだから」
そう言って自分の胸を叩く。
「物はいつか壊れる。壊れたら直せばいいんだ。何度でも……何度でも。僕はこの旅で出会った人たちから、そんな諦めない心を教えられたんだ」
迷いのない言葉を紡ぐヴァンの横顔を、ジェシカは温かな眼差しで見守っている。
「一番恐いのは人の心が壊れることだと、僕は思う。そうならない限り、人は何度だってやり直せる。未来に希望を繋げるんだよ。笑われたっていい。僕はそう信じてるから」
「……お主の言う通りだ。どんな時でも……魂は壊れない」
「うん！」
熱き胸の鼓動を共有した二人は、拳を付き合わせて魂を確かめ合ったのだった。

それから少し、穏やかな時間が過ぎた頃。
「――これをお主に託したい」
するとザウドゥは自らの刀をヴァンに差し出したのである。
「え？　でもそれ、ザウドゥさんの大切な刀なんでしょ？　いくらなんでも受け取れないよ」
「どうか託されてくれ。……どんな形であれ、拙者の魂……常にお主と共に在りたいのだ……。拙者の代わりに連れて行ってはもらえ

ぬか」
「ザウドゥさん……」
ヴァンはザウドゥの瞳に何を感じたのか、不意に相好を崩して言葉を継いだ。
「わかった。ザウドゥさんの魂、僕が連れて行くよ」
「かたじけない」
そうしてヴァンはザウドゥから、魔刀（ズィルファーダー）を託された。
「あと、これも持っていくがいい。《オアシス》を取り戻すには必要な物だ」
と言って自らの腕に埋め込まれた《惑星の石》をヴァンの手に握り込ませた。
「あ……うん」
不意に、南の遺跡でノルドが口にした言葉が脳裏をよぎった。
体温が上昇し、呼吸が荒くなる。
心臓がバカみたいに早鐘を撞いた。
直後、耳朶に響いたザウドゥの言葉に、ヴァンの全身に衝撃が走った。
「――拙者を殺せ」
やはりそうか、とヴァンは無情な運命を呪った。
「……どうしても殺さないといけないの？」
躊躇いがちに訊ねるヴァンに、ザウドゥは抑揚ない口調で告げた。
「そうだ。《惑星の石》は我ら《荒野の亡霊（ファントム）》の命を吸収することで起動する」
ヴァンはかぶりを振る。
そんなヴァンの頭に手を置いて、ザウドゥは言葉を紡ぐ。
「《オアシス》を見つけ、世界に潤いを取り戻してくれるのだろう？　こんなところで立ち止まっている限り、永遠に辿り着けぬぞ」
ザウドゥはまるで何かを伝えようかとするように切々と訴えた。
それに対してヴァンは拳を握り締め。
「……嫌だ」

ノルドの時と同じ言葉を、ヴァンは口にした。それはノルドに甘い理想だと言われ、未来を開けないと断じられた答えだった。
それでもヴァンは、未だにその信念を貫いていた。
「……なぜだ？　お主は《オアシス》を取り戻すために荒野を駆けているのではなかったのか？」
「それはそうだけど……」
厳しい口調で追及され、ヴァンは言い淀む。
「ならばその目的のために拙者を踏み越えることに、如何ほどの躊躇いがあるというのだ」
「誰かを犠牲になんてしたくない……きっと他に方法があるはずだから……」
「形はどうあれ、いつの世も犠牲はついて回るものだ。お主はただ、現実から目を逸らそうとしている。違うか？」
「……それは」
返答に窮したヴァンはザウドゥに背を向け、逃げるようにその場から走り去る。
「ちょっと……ヴァン！」
ジェシカの制止にも構わず、走り続けたその時。
「――ちょっと待ちな」
「――！？」
聞き慣れた声に振り向くと、視線の先にはロバートの姿があった。
「ロバート！？」
「へっ。ちょっと現実を突きつけられただけで、おめおめと逃げるのは勝手だがな、その前に《惑星の石》を渡してもらおうか」
「なんだと……！？」
よく見ればロバートは、二つもの《惑星の石》を手中で弄んでいる。
ひとつはノルドのモノだと判るが、もうひとつは……。
そこまで考えたヴァンは、シャルクの方を一瞥して事態を察した。
「いつの間に……！」

そう。二つ目はシャルクのものだった。
ヴァンがザウドゥと話している隙に横から掠め取っていたのだ。
相変わらずのやり口に苛立ちを覚え、ロバートを睨み付ける。
「お前は《惑星の石》を集めて何を企んでいるんだ！？」
「言ったはずだぜぇ。俺様はコイツで得られる力で世界を支配するってよォ」
「世界を支配……だと？　そんなことをして何の為になるんだ！？」
「何の為？　そりゃ俺様にとって都合のいい世界にする為さ。俺は、今の世界が気に入ってる。煩わしい規律もなく、力こそが正義の世界を、そう簡単に明け渡してなるものかよ。俺はお前らが目指している未来などこれっぽちも望んじゃいねぇんだよ！　だから阻止するぜ。俺の正義でな！」
「暴力が支配する世界がお前たちの望みだというのか！？」
「ああ、望みだね。強きは生き、弱きは死す。単純明快だろ？」
「……そんな世界に希望が……幸せがあるはずがない……ッ！」
崩れかけそうな心を辛うじて繋ぎ止め、ヴァンは反論する。
だが、迷いに揺れる言葉を並べたところで相手に届くはずもない。
ロバートはそんなヴァンの迷いを見透かしたように、挑発的に切って返した。
「だったら止めてみろよ？　甘っちょろいお前の正義でよォ！」
ロバートに煽られて、ヴァンが自動式拳銃に手を掛けようとした寸前。
「――もっとも。お前が抵抗した時点で、あいつの命はないものと思うんだな」
「何！？」
戸惑うヴァンにロバートは顎をしゃくって後方を示す。
促されるままに視線を向けると、手下のマークとジョンがザウドゥに銃口を突きつけていた。
「……くっ」
左のホルスターに伸ばした手を静かに下ろそうとするヴァンに、

ザウドゥの声が飛んだ。
「何を躊躇う必要がある！　遅かれ早かれ《オアシス》を取り戻すためには消えて無くなる命だ。拙者に構わず《惑星の石》を取り戻すのだ！」
「……ザウドゥさん」
ヴァンは悲痛な面持ちを浮かべて呟くだけで、動けずにいた。《オアシス》を取り戻すためにザウドゥを犠牲にしなくてはならないと頭で判っていても、心がそれを拒絶するのだ。
ジェシカが見守る中、ヴァンが取った行動はロバートに《惑星の石》を投げ渡すことだった。
「当然の結果だな。所詮お前の信念など、その程度で揺らいじまう脆いものだったってワケだ」
ロバートはヴァンを侮蔑して嗤うと、三つの《惑星の石》を携え踵を返した。
「納得できねぇってンなら西の地まで追いかけて来な。いつぞやの約束通り、全力で叩き潰してやるよ。ククク……ハーーーーッハッハーッ！」
高笑いと共に去っていくロバートを、ヴァンは悔しさを噛み締めて見詰めることしか出来なかった。
ロバートたちが去った後も、ヴァンは呆然とその場に立ち尽くす。
そんなヴァンを見かねたのか、ジェシカは早足に歩み寄ると有無を言わさず頬をひっぱたいた。

――パンッ！

乾いた音が鋭く響き、空気が一変する。
「あんたがそんな事でどうするのよっ！」
「……。ジェシカ……？」
いつになく真剣な面持ちで訴えかけてくるジェシカにヴァンは面

食らい、名前を呟くことしか出来なかった。
「うじうじ悩むなんてヴァンらしくないよ。私が知ってるヴァンは、理屈なんか関係なく駆け抜けられる強さに溢れてたわ。だから私はあんたと《オアシス》を探したいって思ったのよ？　ねぇ……あの頃のヴァンはどこへいったの？」
「……」
返答に窮したヴァンは俯いたまま口を噤む。
重たい空気の中、ジェシカの声だけが響く。
「あんな奴に好き勝手されて、悔しくないの？　私は悔しいよ。……ねぇ、ヴァン。黙ってちゃ判らないよ？　……何とか言ってくれなきゃ……」
「……ごめん」
やっと口を開いたかと思えば、出てきたのは謝罪の言葉だった。
これにはジェシカもやるせなさを滲ませる。
「ねぇ、ヴァン。ヴァンは《オアシス》を取り戻してみんなを幸せにしたいと思ってるの？」
「……」
「それとも《オアシス》はどうでもよくて、ザウドゥさんを助けたいと思ってるの？　それだけでも聞かせて」
ジェシカの追及に気圧されるように、ヴァンは恐る恐る口を開いた。
「……どっちも……思ってる」
その答えに、不意にジェシカの表情が緩んだ。
「だったら――」
「……」
意外にも穏やかなジェシカの声に、ヴァンは思わず顔を上げた。
「何も悩むことはないわ。それを貫き通せばいいのよ。諦めない限り、いつだって可能性は残されているわ。ザウドゥさんを助けた上で《惑星の石》の起動方法を探し、《オアシス》を見つけ出す。ほら、これで何の問題もないじゃない。ね？」

それは幼い頃から夢を語り合ってきたジェシカだからこそ紡げた言葉だった。
どんな時でもヴァンの傍にいて、彼のことを見守ってきたからこそ、その言葉は何物にも阻まれることなくヴァンの心へと届いた。
「……ジェシカ」
今まで幾度となく自分を支えてきてくれたジェシカの思い遣りを真っ直ぐに受け止める。
同時にヴァンは、ジェシカが居てくれたからこそ、ここまで駆け抜けて来られたことを強く実感した。
「……」
黙りこくるヴァンに、ジェシカは呆れ顔で肩を竦めた。
「……もう。いい加減にしないと本気でおこ――――」
ジェシカの言葉を包み込むように滑らかに、ヴァンの声が響いた。

「ありがとうジェシカ。……ジェシカと一緒に旅が出来て、ホントよかったと思えるよ」
「な……何言ってるのよ急に……！　頭でも打ったんじゃないの！？」
「ははっ。そうかも。けど、ジェシカのお陰でこれからも駆け抜けられると思う気持ちは本物だよ。いつも支えてくれて、ホントにありがとう」
「なによ。今更気付くようじゃヴァンもまだまだのようね」
「そうだね。だからこれからもよろしく頼むよ、ジェシカ」
「ちょ……調子に乗らないで……っ！　もう知らないんだから……この……バカヴァン」
「うん、ごめん」
吹っ切れたように返して、ヴァンは爽やかな笑顔を浮かべた。
そして、ザウドゥの元まで歩いて戻ると深々と頭を下げた。顔を上げ、真っ直ぐにザウドゥの目を見て言う。
「ごめんなさい！　僕、ザウドゥさんを助けたいから、やっぱり別

の方法を探します。そして《オアシス》も見つけてみせます。だから僕たちのこと見守っていてください！」
一息に捲くし立てるヴァンの瞳には、もはや微塵の迷いも映ってはいなかった。
愚直なまでにひたむきに、夢を掴もうとする熱意で燃え盛っているような瞳を前に、ザウドゥは怒りを通り越して感心しているようだった。
「答えが見つかったようだな。ならばもう何も言うまい。自分が信じた道を駆け抜けるがいい」
「はい！」
威勢良く返事をするヴァンに微笑みかけ、ザウドゥは西の空を仰ぎ見た。
「……先刻の青年には只ならぬ気配を感じる……。手遅れになる前に急がれよ」
ザウドゥの警告に二人は緊張した面持ちで頷く。
「じゃあ、行って来ます」
「うむ」
ヴァンとジェシカはザウドゥに見送られ、北の地を発ったのだった。

夢と希望……そして、拭いきれない不安を胸に抱いて……。

†

ザウドゥと別れた後、ヴァンとジェシカは獣車をとりに一度『カチャップ』まで戻った。
先を急がなくてはならないため、村にこそ入らなかったが、外から見えた光景にヴァンは驚きを隠しきれなかった。
数刻前に村中を埋め尽くしていた瓦礫は撤去され、早くも家が建

て直されつつあったのだ。懸命に元の生活を取り戻そうとする村人たちの気概は、二人にとって心強い励みとなった。
「行こう、西の地へ。この村の人たちのためにも《オアシス》を見つけなきゃ」
「ええ、そうね。最後まで駆け抜けましょう」
「うん」
先にジェシカが馭者席に上る。
ヴァンは獣車に乗り込む寸前で動きを止めた。
「どうしたの？　ヴァン」
「ん？　ああ……ちょっとな」
上の空で返事をしながら、ヴァンは何度も辺りに視線を巡らした。
しかし、いくら待っても状況に変化はなく、ただ無為に時間が過ぎ去っていくだけだった。
「……ねぇ？　いつまでそうしてるつもり？」
「ああ……ごめん」
ジェシカに促されてようやく諦めたヴァンは、落胆した面持ちで獣車へと乗り込んだ。
間もなくして走り出した後も、ヴァンは辺りに視線を巡らし続けた。
「……」
そんなヴァンの様子を一瞥したジェシカは、やるせない溜め息を吐きつつ、操獣に集中するのだった。

†

二人を乗せた獣車は猛然と荒野を西へと疾駆していた。
「――ベン＝フィリップス？」
レステを欠いたことで寂寥感が漂う雰囲気の中、ジェシカが口火を切った話にヴァンが疑問の声を上げた。
「もう……。ホントに覚えてないの？」

ジェシカは呆れたようにジト目を向けて問う。
慌てて記憶の思い起こしに掛かったヴァンは、間も無くハッとしてポケットをまさぐり、一枚の紙片を取り出した。
「ひょっとしてコレかぁ！」
ヴァンが取り出したのは、商人の町『メルゲル』を発つ際、ベンに渡された地図だった。
「そう、それよ。確かその町の何処かに、あの人の師匠さんがいるって話だったでしょ？　ロバートと戦うためにも銃を修理して、万全の態勢で臨んだ方がいいと思うのよ」
順当な意見を述べるジェシカの言葉に、ヴァンはどこか憂いを漂わせる。
「師匠か……」
たっぷり十秒近い間を置いて続ける。
「……そうだな。ここから西の地までの間に該当の町がある。先にそっちへ寄ってみよう」
「うん……それがいいわ」
それっきり会話は途切れ、獣車の駆ける音だけが響き続けた。

†

狩猟の村『カチャップ』を発ってから五日目の夜。
ヴァンとジェシカを乗せた獣車は西の地までの間にある町に辿り着いていた。
町の入口に獣車専用の繋獣場所があることに驚いたヴァンだったが、それはほんの始まりに過ぎなかった。
町に一歩足を踏み入れた途端、ヴァンはこれ以上ないという程に目を見張って感嘆の声を上げた。
「うっわぁぁぁぁぁぁぁ……！　すっげぇぇぇぇぇぇぇ……！」
「ホント驚きね……。この荒野にこんなにも賑やかな町があったなんて……！」

二人が驚くのも無理からぬ事だった。
眼前に佇む光景は『町』のレベルを遥かに超えており、もはや『都市』に近いほどだ。
しかし、地図には町と記されているからには町なのだろう。
そんな町の入口から町のメインストリートを飾るように、ずらっと篝火台が並べられ、盛大に炎が焚かれている。町の中は言うに及ばず、周辺の夜空までも煌々と照らし出していた。
それはまるで闇の中で輝く太陽とも、はたまた命を燃やして抗っている生命体とも思えるような光景だった。
滅びゆく荒野にあって唯一生き甲斐ともいえる場所――。
それこそがここ、娯楽街『バラドラム』である。
町の中は端から端まで様々な店が軒を連ねている。その多くは酒場などの飲食店であり、ゲーム感覚で射撃の腕を競い合ったり、カードを用いて金や食料を賭けて取り合う類の遊戯場も充実していた。
誰も彼もが唄み合う事なくお祭り感覚で歌い、騒ぎ……今この時を心から楽しんでいるように窺えた。
「……みんな楽しそうだね」
そう呟いたヴァンの声はどこか悲しみに満ちていた。
「……そうね」
ジェシカもまた、同じような気持ちでいたのか、メインストリートを行き交う人達を切なそうに見渡した。
時折、喧騒の中から聞こえてくる祝福の言葉に、ジェシカは嬉しそうに口を開いた。
「ほら、見てヴァン。誕生日パレードだって。みんな楽しそうにしてる。素敵ね」
「ああ。なんか羨ましいな。……思えばあんな風に誕生日を祝われたことないてなかったよな……僕たち」
不意にヴァンの脳裏に幼き日の思い出が蘇る。
荒野へと旅立つ為に、ジョセフとの特訓に明け暮れた日々。
毎年、ヴァンとジェシカが誕生日を迎えると村の人たちはご馳走

を振る舞ったりして、ささやかながらも祝福してくれていた。
だが、思い返せばそこに「おめでとう」の言葉が無かったことに気付き、切なさが込み上げるのだった。
なぜ村の大人たちは、自分たちに「おめでとう」の一言くらい、贈ってくれなかったのかと考えるが、今のヴァンとジェシカにその真意を知る術はなかった。
「……そうね。美味しい料理は作ってくれたけど、ああやって『おめでとう』って言われたこと……なかったよね」
「うん……」
二人は懐かしい思い出に浸りながら、町の雰囲気を味わうようにして歩く。
賑やかなメインストリートでは、一歩歩く度に色んな人から声を掛けられたが二人は迷惑そうな顔は一切見せなかった。町中を巡っているパレードの参加者に手を振り返したりする内に自分たちまで楽しくなってきたのか、時折町の人たちの誘いに応じて一緒に踊ってみたりもした。
それはまるで、先に待ち受ける過酷な戦いのことを、今この時だけは忘れようとするかのようでもあった。
それから何度か踊りを楽しんだ後、ジェシカは不意に声を弾ませて言った。
「ねぇ、そう言えばシンシアの誕生日ってもうすぐだったよね？だからさ、シンシアの誕生日を私たちでお祝いしてあげようよ！」
「シンシアさんの誕生日？　え……と？　もうすぐだったっけ？」
喜びに水を差すように、ヴァンの反応は鈍いものだった。
「もうっ！　女の子の誕生日を忘れるなんて信じられないっ！」
ジェシカは呆れ口調で非難すると、ジト目を向けて不満を零した。
「……どうせ私の誕生日も覚えてないんでしょ？」
ジェシカの問いに、ヴァンはまたしても口籠もるものだと思われた。
しかし。

「――三月十八日」

微塵の迷いもないヴァンの即答に、ジェシカは完全に虚を衝かれた。

「――！？」

思いがけない事態に目を白黒させて平静を取り繕うとする。

「な……なんで覚えてるのよ……！？」

終いには気持ちと裏腹な言葉が口を突いて出る始末だった。

面白いくらいに狼狽するジェシカの様子を見詰めながら、ヴァンは極自然な口調で答えた。

「ジェシカの誕生日を忘れたことなんで、今まで一度だってないよ」

ヴァンは多くを語らなかった。

しかし、その言葉には言い尽くせない程の想いが籠められているようだった。

その事はジェシカも察しているようで、僅かに頬を紅潮させて目を伏せると、囁くように一言だけ呟いた。

「……ありがとう」

「え？　何？　ごめん、聞こえなかった。もう一度言ってくれる？」

何の他意もなく、ただ単純に今の言葉を催促してくるヴァンに、ジェシカは堪りかねて感情を爆発させた。

「うるさいわねっ！　バカって言ったのよ！　このバカヴァン！」

「え～？　誕生日覚えてたのにバカ扱いなワケ？　ちょっと酷くない？」

「あーーーーーーーーーーーーーーっ！　もうっ！　知らないっ！　知らないっ！」

機嫌を損ねたように頬を膨らませると、ジェシカは突然駆け足になり、ヴァンから離れようとする。

「あ、ちょっと……待ってよ。……ねぇ、ジェシカってば～……？」

誕生日を答えたというのにどうして機嫌が悪くなったのか判らな

いヴァンは、情けない声を上げながら、ジェシカの後を追う。
ジェシカはヴァンに構わずさっさと歩く。
見た目の態度に反してその顔が笑顔であったことを、ヴァンは知る由もなかった。

†

その後。誕生日騒動はややあって元の話に戻り、シンシアの誕生日を二人で祝うということで一旦の終結をみた。
そして本来の目的を果たすべく、ベンの師匠の手掛かりを町の人たちに聞いて回った。
ベンの師匠は町でも有名らしく、半刻も経たぬ内に情報を得ることが出来た。
町で得た情報を頼りに、二人は町の外れまでやって来ていた。
そこは町の明かりも届かない場所。目的の工房は夜闇の中にひっそりと佇んでいた。
「……ここだよね？」
「ええ……そのはずだけど」
とても人が住んでいるような気配が感じられない工房を前に、二人はただただ立ち竦んでいた。
しかし、いつまでも歩みを止めているワケにはいかず、意を決して扉に手を掛けた。
「……開けるぞ」
「……うん」
恐る恐る力を籠めると、扉は軋みをあげてゆっくりと開いた。
「失礼しまーす……」
当然と言えば当然ながら、室内は闇に包まれていた。
月明かりのお陰で辛うじて見える入口付近は、銃の部品やら何やらでごちゃごちゃしており、只ならぬ雰囲気を醸し出していた。
「あのーすみませーん。……ベン＝フィリップスさんの紹介で来た

者なんですけど……誰か居ませんかー……？」
幾ら呼び掛けても返事はなく、ヴァンの声は虚空に溶けて消えた。
不在かと諦めかけた、その時。
「――ベンから話は聞いておる。小僧らがヴァン＝エヴァンスとジェシカ＝トンプソンじゃな？　儂がベンの師匠、ガン＝スミスじゃ」
嗄れた声が響くと同時に、部屋の奥で明かりが点った。
揺らめく火に照らし出され、二人は部屋の奥に老人の姿を認める事が出来た。
目的の人物に会えた事に胸を撫で下ろしたヴァンは、スミスに事の次第を説明した。
これで銃を修理してもらって、ロバートとの戦いに赴ける。
そう考えを巡らしていた矢先。
「――すまぬが修理はしてやれん……」
「え？　どうして？」
期待が外れ、落胆を露わにするヴァンに、スミスは申し訳なさそうに告げた。
「見たところ、小僧の銃は特殊な素材で出来ておる。故にそれを修理するための素材が足りないんじゃよ」
「素材……？　何があれば修理出来るの！？」
「必要な素材は《ドラクテリア》と――――」
スミスの話が終わるより先に、ヴァンは言葉を被せた。
「それなら持ってるよ！　ほら！」
そう言ってヴァンは、ナップサックから《ドラクテリア》を取り出した。
「ほぅ。まさか《ドラクテリア》を持っておったとは驚きじゃ」
「これで修理してもらえる？」
逸る気持ちを抑え、ヴァンは懇願する。
だが。
スミスは力無くかぶりを振って、遮られた話を改めて口にした。
「素材はそれだけじゃないのじゃよ……。もうひとつ《魔属》とい

う特殊な金属が必要不可欠なのじゃ」
「……《魔属》？　それってどこで手に入るものなの？」
「生憎じゃがそれは儂にも判らぬ。《ドラクテリア》以上に希有な素材……それが《魔属》なのじゃ……」
「そんな……」
「すまんのぅ……。小僧らが過酷な戦いの最中に身を置いていることは重々承知しておる。……そんな由々しき時に力になってやれんことが無念でならぬ……」
スミスは己の無力を呪うように歯噛みした。
ジョセフから預かったリボルバーが直らないという現実を突きつけられたヴァンは、それでも残された自動式拳銃と、ザウドゥの魂である《ズィルファーダー》を操ってでも、ロバートとの戦いに挑む覚悟を滾らせていた。
と、その時。
そんなヴァンの意志に呼応するように、《ズィルファーダー》が淡い光を発したのだった。
咄嗟にスミスが慌ただしく立ち上がり、驚愕に満ちた表情で問うた。
「――小僧！　それをどこで手に入れた……！？」
「え？　これはザウドゥっていう人から譲り受けた物で――――」
「ザウドゥじゃと！？　まさかそれは東の亡霊・ザウドゥの刀であるか……！？」
「う……うん。そうだけど……。これがどうかしたの？」
困惑するヴァンの声にスミスは気持ちを落ち着け、真剣な面持ちで告げた。
「儂もこの目で見るまで俄には信じ難かったのじゃが……まさか本当に実在しておったとはのぅ……」
スミスは深い溜息を吐くと、ありのままの事実を告げた。
「その魔刀（ズィルファーダー）を構成している物質こそ《魔属》なのじゃ」
「「――ッ！？」」

図らずして二人の驚きが重なる。
だが、ある事に気付き、ヴァンは表情を曇らせた。
「でもそれだと……この刀はなくなっちゃうんじゃ……」
「素材するからには当然のことじゃ。その刀にどのような思い入れがあるかは知らぬが、後は小僧が決めることじゃ」
「……」
ヴァンは黙したままザウドゥに託された刀を見詰め、思考を巡らせた。
「……ねぇ、ヴァン」
逡巡するヴァンに、ジェシカがそっと言葉を掛ける。
「ザウドゥさんの言葉をよく思い出して」
「ザウドゥさんの言葉……」
ジェシカの助言を受け、ヴァンはザウドゥの言葉を思い返した。
「――あ」
やがてザウドゥのある言葉がヴァンの脳裏に蘇った。

――『どんな形であれ、拙者の魂……常にお主と共に在りたいのだ』

そう告げたザウドゥの言葉を。
「ザウドゥさん……。この刀が無くなっても、僕は絶対にザウドゥさんの魂を忘れません。一緒にいきましょう――――――潤いという名の希望に満ちた未来へ……！」

今この場にいないザウドゥに想いを届けようとするかのように呟くと、ヴァンは力強く顔を上げた。
「お願いします、スミスさん。……銃を修理してください……っ！」
ヴァンは確固たる信念をもって、スミスに銃の修理を頼み込んだ。
するとスミスは孫を見守る祖父のような柔和な表情でニカッと笑って答えた。

「任せておけ。ガン＝スミスの名にかけて、一晩で修理してやるわい」
「ありがとう！」
「なぁに。儂の技術が小僧らが作る未来の礎になれるだけで報われる思いじゃよ」
「スミスさん？　……？」
「……？」
ヴァンとジェシカはその言葉の真意を計りかねて目と目を見交わし、首を傾げたのだった。

その夜。スミスは夜を徹して作業に没頭した。
さながら命を削ってでも己の使命を全うするかのように、全身全霊を賭して……。

翌朝。
「――ほれ。依頼の品じゃ。受け取れい」
スミスは予告通り、一晩でヴァンのリボルバーを修理し、見事生まれ変わらせてみせたのだった。
「おおっ！　すげぇ！　ありがとうスミスさん」
「さすがに《魔属》を扱うのはちぃとばかり骨が折れたがの。儂の腕にかかればこれしき何てことないわい」
誇らしげに胸を張って答える。
「仕様に大きな変更を施さず、威力や扱いやすさを強化したつもりじゃ。その方が手に馴染みやすいじゃろう。ただ、威力が上がった分、反動が前よりデカいじゃろうから少し試し撃ちしていくといいじゃろう」
「そうだね。じゃあちょっとだけ」
「案内しよう。試射場はこっちじゃ。――ああ、それとお嬢ちゃん」
「はい？」

「お嬢ちゃんの銃もついでにメンテナンスしておいたからのぅ、一緒に試射するとええ」
「私の分までやってくれたんですか？　ありがとうございます」
そうして二人は生まれ変わった銃が手に馴染むまで……文字通り手に血が滲むほどに撃ち尽くしたのだった。
間もなくしてスミスに別れを告げると、二人は『バラドラム』を発った。
ヴァン、ジェシカ共に、新しい銃に確かな手応えを感じながら……。
目指すは西の地――ロバートとの決着。
そして、もうひとつ――――――――――――――――――。

†

ヴァンたちが発った後、入れ替わりで、『バラドラム』の地を踏む者たちの姿があった。
「まさか？真の強さ？の答えを、あの子たちに教えられるなんて思いもしませんでしたわ」
「お嬢。どうか穏便に願いますぜ」
「その心配は無用ですわ。わたくしはただ、彼らにお礼を伝えにいくだけでしてよ」
「姐さん、借りを作ったままでいるの大嫌いだもんねっ！」
「ふん。まぁそういうことですわ。――では早速参りますわよ」
煌びやかなブロンドの髪をなびかせながら、その者は高らかと号令を下したのだった。

【THE　FIFTH　BULLET――？魂と共に？――】

娯楽の町『バラドラム』を発ってから三日目の昼過ぎ。
ヴァンとジェシカは西の地へと獣車を駆り、《危険区域（ダークゾーン）》の先にある不気味な祭殿に辿り着いていた。獣車に荷物を置いて駆け出し、祭殿の中央に佇む人影を認めるや否や、ヴァンは声を張り上げた。
「ロバーーーーーーーーーーーーーーート！」
「フッ。来たか。ヴァン＝エヴァンス！　いつぞやの因縁、ここできっちり晴らさせてもらうぜッ！」
「もうやめるんだ、ロバート！　僕たちが争ったところで何の意味もないだろ！」
「意味がない？　フッ。違うな」
「何？」
「俺は力が支配する世界を望み、お前は秩序ある世界を望んでいる。目指す未来の形が違う以上、衝突は避けられねぇ！　それが道理ッ！　俺はお前を倒して俺が望む世界を勝ち取る！　遂に手に入れたこの《永遠の命》でなァッ！」
そう言うとロバートは、手にしていた得物（ガトリング）を足下に落とした。
「《永遠の命》だと？」
ヴァンの疑問に答えるかのように、ロバートの身に異変が起こった。
突如として血管が全身に浮かび上がり、ロバートの体格が二回りも大きくなった。その容貌にはもはやロバートの面影はなかった、ヴァンたちの眼前に立ちはだかるのは、人の姿をした怪物としか形容しようのない存在だった。
体格が増したことで服が裂けた。
「あれは……！？」
その胸もとにヴァンは、四つの《惑星の石》を認めた。起動しない限り単なる石でしかないはずの《惑星の石》は、まるでロバート

に力を与えるように脈動を繰り返していた。
「まさか……あれが《永遠の命》の正体……！？」
現実離れした光景を前に、ヴァンが驚愕に慄いていると。
「ああ、そうだ。《惑星の石》には再生と破壊、両方の力が秘められているんだよ。そして俺は遂に手に入れたのだ！　他を寄せ付けない圧倒的なる力！　《永遠の命》を！」
「お前は人であることを棄ててまで、そんな狂気に満ちた力を得たかったのか！？」
「ああそうさ。力こそすべて！　それがこの荒野に貫く俺の信念だ！」
言い放つや否や、異形と化したロバートは有無を言わせず攻撃を仕掛けて来た。
「そんな力が支配する世界に幸せなんてありはしない！　ただいたずらに悲しみを生み出すだけだ！　どうして手を取り合ってよりよい未来を築こうとしないッ！？　その力を正しく使えばお前にもそれが出来るはずだ！」
「手を取り合えだと？　そんな甘っちょろい考えが、今の荒野を生み出した歴史を忘れたかッ！？　例えどんな規律を作ろうともなァ、その規律を利用して悪事を企む奴は必ず出てくるんだッ！　かつての世界がそうだったようになァッ！　そんなもの、力が支配する世界となんら変わらない……いや、それよかよっぽどタチが悪いってもんだぜ！」
怒りをエネルギーに変えるように、ロバートは異常発達した右手の爪を振り翳してヴァンへと肉薄した。
それを見計らったように、ジェシカの援護射撃が飛び、ロバートの動きを阻害した。
「――ヴァン！　もたもたしてると殺られるわよ！　相手はもう人間を棄てた怪物……説得は無駄だわ！」
「……くそっ！　やるしかないのか……っ！」
ヴァンは悔しさを滲ませて、生まれ変わったリボルバーに手を掛

け、二連続で引き金を引いた。ヴァンが放った弾丸はロバートの身体を穿ち、着実にダメージを与えているようだった。
二人は一所に固まらないように意識を巡らせながら、ロバートを撹乱していく。
ヴァンは立て続けに連射し、一回分の弾丸を撃ち尽くした。ジェシカがアサルトライフルで掻き回している隙に空薬莢を取り出し、弾丸を装填していく。
一進一退の攻防を繰り広げながら、ヴァンはロバートへ自らの思いを訴えかける。
「確かに過去の人たちはあやまちを犯してしまったかも知れない……。けど、その失敗を戒めとして、未来を繋げるのもまた人間なんだ……！　世界はある日突然良くなったりしないかも知れない。……けど、失敗から生き方を学び、一歩ずつながらも確実に変わっていける強さを持っているんだ！　僕はそんな人の強さを信じたい……！」
「そんなものは、何の責任も背負っていない子どもの甘っちょろい理想でしかないということが何故判らねぇんだ！？　世の中を変えることが出来るのは所詮、純然たる力でしかあり得ないッ！」
爆発的に増強された身体能力に物を言わせて、ロバートは地面を滑るように跳んだ。
猛然と距離を詰めてくるロバートに対し、ヴァンは地面に片膝をつき身を沈ませた体勢で迎え撃った。
――！！　――！！　――！！　――！！　――！！
間髪を容れずに六発もの強化弾を撃ち込んだ。
しかし。
「……ッ！？」
全ての弾丸をその身に浴びながらも、ロバートは意に介した様子もなく距離を詰め、ヴァンにその巨体をぶち当てた。
強烈な衝撃を受けてヴァンの身体が地面を転がる。
「か……は……っ！」

「ヴァ――――――――――――ン！」
ジェシカはヴァンを助けようと疾走し、ロバートの注意を引くようにアサルトを乱射した。
「私が相手よ！」
さらに距離を詰めつつ銃をショットガンへと変形。近距離へと持ち込んだ。
「ぐぬっ……！」
いくら身体能力が増強されたとはいえ、ショットガンによる至近距離からの応酬には堪えたらしく、一瞬、ロバートの身体が大きく揺らいだ。
その変化をヴァンは見逃さなかった。
身体の痛みを押し殺して立ち上がり素早く弾を装填すると、死角を衝いて引き金を引いた。
「GUUUUUUUUUUUUUUUUOOO！」
獣じみた咆哮を上げて、ロバート貌が苦悶に歪む。
それでもロバートは執念に突き動かされるように、鬼気迫った気配を纏わせてヴァンを捕捉する。繰り出される爪撃をジェシカがアサルトでいなしつつ、ヴァンが反撃に打って出た。
夥しいほどの鮮血を撒き散らしながらも、ロバートはヴァンを切り裂こうと迫り来る。
先のダメージが響いているヴァンにとって、これ以上掴まるワケにはいかなかった。
ロバートが繰り出す攻撃を紙一重で躱しつつ、強化弾を撃ち込んでいく。
全弾撃ち尽くすとすぐに空薬莢を排出し、弾を装填しながら叫んだ。
「理想を語って何が悪いッ！　人は自分の中に思い描いた理想を力に変えて生きているんだ！　思い描いた理想に近付き実現させるためにッ！　お前なんかにそんな人たちの理想を嗤う資格はありはしないッ！」

微塵の迷いもなく放たれたヴァンの思いを、ロバートが真っ向から斬って伏せる。
「お前は？理想？を履き違えていやがるだけだ！　？理想？なんてのはなァ、そんな綺麗なもんじゃねぇんだよォ！　そんなのはただの現実逃避――？自分の未来はこうありたい？と願うばかりで何の努力もしねぇボンクラ共の甘えでしかねぇんだよッ！」
「違う！」
「違わねぇ！」
互いの信念が交錯し合い、激しい火花を散らす。
睨み合いの最中、不意にロバートが背後へと跳んだ。着地点には先刻放り捨てたガトリングがあった。
本来なら両手で扱う代物を、異形と化したロバートは左手で軽々と振り回した。
「――来るぞ！　避けろ、ジェシカ！」
ヴァンの警告とほぼ同時に、ロバートのガトリングが火を噴いた。影を追うように撃ち込まれた弾丸は、地面を等間隔に穿ち、砂塵を巻き上げた。
「くっ……！」
この期に及んで銃器を使ってくるという奇策に虚を衝かれたヴァンとジェシカは、それぞれ足と肩口に傷を負ったものの、ダメージは最小限に留めた。
ヴァンは足の傷の深さを量りながら、言葉を紡ぐ。
「……人であることを棄てたお前が、いまさら人が造り出した力に（そんなもの）頼るのか？」
「なんだと……？　何が言いたい？」
「人である時は人智を超えた力を欲し……化け物になってみたところで今度はその力すら信じられず人の力に頼ろうとしている。……おかしな話じゃないか。結局のところお前は自分の力を信じたことがない……何も掴めない無力な自分から目を背け、形すらあやふやな漠然とした？力？に縋り付いて救われようとしているだけだ……

！」
「黙れッ！　何一つ背負いもしねぇ甘っちょろいガキの分際でッ！」
「確かに僕たちはまだ何も背負っていないかもしれない……」
透き通った声で返しながら、ヴァンはリボルバーを構える。
「……けど、何かを背負ってるだけで大人だというのなら、僕はそんな大人になんてなりたくない」
「なんだ？　背負うのは嫌だからずっとガキのままでいますってか？　けっ！　反吐が出るぜ」
「違う」
「はぁ？　何が違うってんだ」
「この世界に潤いを取り戻し、希望に満ちた未来を実現させるためなら、僕たちはどんなことでも背負う覚悟だ。その上で僕たちは、背負った事に対する責任を果たせる大人（こども）でありたいと思ってるッ！」
「ハッ！　ほざきやがったな。だったらこの世界の真実を知ってなお、すべてを背負って切り開いてみせろッ！　テメェが宣う？希望に満ちた未来？とやらのためになァッ！」
「この世界の真実？　なんだそれは？」
「ハッ！　知りたければ俺を倒すんだな。俺がテメェの背負う最初の十字架になって、この世界の行く末を見届けてやるよ！　そしてテメェの信念が砕けた時、地獄の底で嗤ってやらァ！　もっとも、テメェに俺が倒せたらの話だがなァ！」
ロバートが口走った？世界の真実？という言葉に一抹の不安を滲ませながらもヴァンは、落ち着き払った口調で宣言した。
「……決着をつけよう。ロバート」
「望むところだぜェ……ヴァン＝エヴァアアアアアアンス！」
ロバートの地鳴りのような咆哮が辺りに轟く。
張り詰めた空気の中、二人は睨み合って対峙する。
そんな二人の様子にジェシカは呆れたように肩を竦めると、コインを取り出し指先で強く弾き上げた。
「……！」

「……！」
運命を決するコインが宙に舞う。
互いに銃口は相手を捉えている。
ただ、コインが上がって落ちるというだけなのに、ジェシカにはその一秒一秒が永久ほど長く感じられた。
まるで二人を囲っている空間だけが、時の流れから切り離されているような錯覚すら覚えるほどに。
息が詰まりそうな時間を経て。
遂にコインが祭殿の石畳に触れ、甲高い音を響かせた。
「――ッ！」
「――ッ！」
刹那、ほぼ同時に二人が動いた。
ヴァンの反応速度を上回ったロバートのガトリングが先に火を噴いた。
夥しいほどの弾丸が傍を通り過ぎる中、ヴァンは研ぎ澄ませた感覚を総動員して二発の弾丸を撃ち込み、横っ飛びにガトリングの嵐を掻い潜りながら残りの弾丸を撃ち尽くした。
「……ハァ……ハァッ……！」

ロバートのガトリングにより派手に巻き上げられた砂塵が風に流され晴れていく。
ヴァンが見据える視線の先には、ガトリングを落とし片膝をつくロバートの姿があった。
「……テメェ……わざと外しやがったな！？　何故だ！？　テメェはどんなことでも背負うんじゃなかったのか！？　答えろッ！　ヴァン＝エヴァアアアアアアンス！」
憤慨の咆哮を上げるロバートに、ヴァンは悲しみを湛えた表情で告げた。
「ああ、背負うさ。あんたの無念も含めてどんなことでもね」
「だったら……どうしてトドメを刺さないッ！？」

「誰かの思いを背負うことと、その命を手に掛けることは同じ意味じゃない……。今回の敗北をきっかけに考え直してくれないか？……その身体だってまだ元に戻す方法があるかも知れないだろ？だから――」

切々と訴えかけるヴァンの思いを、ロバートは一笑に付した。

「ククク。何を言い出すかと思えば。要するにテメェは自分の手を汚すのが嫌なだけだろう？　嫌なことを視界から遠ざけて、それで一人前に何かを背負った気になろうとしているだけだッ！　結局テメェはどんな信念を貫こうが、甘っちょろいガキでしかねぇんだよ！　俺の身体が元に戻る？　ハッ！　そんな方法がねぇことはこの俺が一番よく判ってるッ！　これはそういう力なんだからなァ！」

「……ロバート……あんたって奴は……！」

届かぬ想いに悔しさを滲ませ、ヴァンは傷だらけのロバートを見下ろす。

「俺は俺の信念を貫き正直に生き抜いた……。今度はテメェの番だ。……とくと見せてもらうぜぇ……テメェらの信念とやらを……！　せいぜい……足掻いて苦しみやがれ」

「……」

その言葉を最後に、ロバートは動かなくなった。

生きることに執着するあまり、人であることすら棄てたロバートの末路を心に刻み込み、ヴァンは空を仰ぎ見た。

「――ヴァン」

二人の決闘を見守っていたジェシカが駆け寄り、声を掛ける。

「……終わったね」

感慨深く呟くジェシカの目を見詰めながら、ヴァンは険しい表情で返した。

「いや……まだだ」

「え？」

「まだ……四人目の亡霊が残ってる……ッ」

「あ……！」

目の前に四つの《惑星の石》がある所為で、ジェシカはその事を見落としていた。
瞬時に臨戦態勢を取り、意識を巡らした直後。
「あれは……！？」
「まさか……！？」
祭壇の四方に設けられた、高さ8フィートにも及ぶ石柱を認め、二人の身体に戦慄が走った。
石柱に磔にされた人影……それは紛れもなくノルドとシャルク……そして――
「――ザウドゥさん！？」
ヴァンが今まで打ち破ってきた《荒野の亡霊（ファントム）》が磔にされた衝撃的な光景だった。
「誰が……あんなことを……！」
信じ難い光景にヴァンたちが慄く最中、ロバートの胸に埋め込まれた《惑星の石》が眩い光を発した。
「ッ！　《惑星の石》が……起動している？」
「――その通り。それこそが破壊と再生を司る《惑星の石》の真の姿だ」
「「――！？」」
不意に響いた聞き慣れた声に、ヴァンとジェシカは咄嗟に振り向いた。
「師匠ッ！？」
ヴァンたちの前に現れたのは紛れもなくレステその人だった。
「思った通り、ここまで来たか。それなりの信念貫いて来られたようだな」
「師匠……。信じたくはなかったけど……やっぱり師匠が……」
歯切れの悪いヴァンの言葉を補うようにレステが口を開いた。
「察しの通り、俺が西の亡霊だ。……予定じゃもっと驚いてもらうつもりだったんだがな……いつ気付いたんだ？」
「シンシアさんの古書にあなたと同じ名前が載っていたんです……

それで疑いを持ちました」
　ヴァンはまるでレステと距離を置くように、わざと丁寧な口調で応じる。その瞳には深い悲しみが宿っているようだった。
「シンシア？　あぁ、『メルゲル』で書館をもってるあの嬢ちゃんか。なるほどな」
「そんなことはどうだっていいんです。……どうして師匠が西の亡霊なんですか？　最初から僕たちを騙していたんですか？」
「人聞き悪い言い方するんじゃねぇよ。俺は見定めたかったのさ」
「見定める？　何をです？」
「この世界の人間に未来を担う資格があるかどうかをさ」
「資格がなかったらどうするつもりだったんですか？」
「ん？　そりゃ全て滅ぼして終わりさ。人間という腫瘍がなくなれば、この惑星は長い年月をかけてゆっくりと再生するからな」
「資格がないってだけでこの世界に生きる命を滅ぼそうとするなんて……。そんな身勝手が許されるワケがないッ！」
　今まで貫き通してきた、己の中にあるありったけの思いをレステへとぶつける。
　だが、レステは嘲るような笑みを浮かべ、嬲るように反論する。
「身勝手？　違うな。これは《惑星の意思》だ。他ならぬ惑星自身が自らの身体を蝕む人間の滅びを望んでいるのだよ。かつて《惑星の意思》との戦いに敗れた我らは、この身に呪いを刻まれた。腫瘍を排除する惑星の代行者としてな」
　そこで言葉を区切り、ヴァンたちの反応を窺いながらゆっくりと歩き出す。
「そしてお前たちを含め、この世界に生きる人間にその資格はなかったワケだ」
「なぜそう判断出来るんですか？」
「何故だと？　それが判らない時点でお前は失格なんだよ」
「え？」
「お前は『メルゲル』で魔獣なんぞ助けやがった。俺との特訓では

一撃を入れるために寝首を掻こうともしない。ノルドとの戦いではトドメを刺さないばかりか《惑星の石》まで奪われ、『スラックヴィッツ』では賊に情けをかける始末。北の地ではザウドゥと共闘してシャルクを討ったにも関わらず、結局どちらにもトドメを刺さなかった。そしてその甘さの極めつけがコレだ」

そう言ってレステは足下に転がっているロバートを蹴りつけた。

「明らかに人間を棄てた者にまで情けをかけ、わざと急所を外した。要するにお前のやってることはとことん甘いんだ。他人を犠牲にすることを躊躇うようじゃ、とても世界の未来は背負い切れはしない」

「それでも、僕は僕の信念を貫きます！　この世界に生きる人々のためにもッ！」

「お前が守ろうとしている奴ら自身が滅びを受け入れているんだ。そんな奴らに未来を紡ぐ資格などない」

「荒野に住む人たちは滅びを受け入れてなんかいませんッ！　何度町を壊されても立ち直る強さを持っています！」

「そんな強さは所詮まやかしに過ぎない。自分たちが助からないことは奴らが一番理解しているのだからな」

「どういうことです？　それはロバートが言った？世界の真実？と関係あるんですか？」

「ククク。それを知りたくば、俺を打ち破ってみせろ。今度こそ一切の甘えを捨ててな」

不敵に笑むと、レステは動かなくなったロバートへと視線を落とした。

「この男を利用していたのは、まさにこの時のためだ」

その言葉に違和感を覚えたのはジェシカだった。

「利用？　――まさか私たちの行く先々で彼らが現れていたのは、あなたが情報を流していた所為！？」

「ククク。今更気付いても遅いがな。《惑星の石》の起動には所有者の命が必要になる。俺が《惑星の石》に秘められた破壊の力を使うには、どうしても五つ目の命が必要だった」

「まさか、その為にロバートを！？」
「ああ、その通りだ。深い執念と欲望を持つ者は常に《惑星の石》を宿せる可能性があるからな。一時的に俺の《惑星の石》をこいつに預け、その命を贄に起動させることを思いついたワケだ」
余裕を漂わせてながらに語ると、レステは大仰に両腕を広げてみせた。
「とくと見るがいい！　長き時を経て今、《惑星の意思》が受肉するぞ！」
「「――ッッ！？」」
刹那、膨大な破壊衝動がヴァンとジェシカの肌に深々と突き刺さった。
それは今までに感じたことのない程に深いプレッシャーだった。
怒り……悲しみ……憎悪……殺意……。
ありとあらゆる感情が綯い交ぜになった負のエネルギーを前に、二人は微動だに出来なかった。《惑星の石》を宿したロバートの身体はまるで意思があるかのように立ち上がると、異形と化した身体をさらに変態させていく。
「《惑星の意思》よ！　今こそ人類の真価を見定める時ぞ！　その身と共に我と同化し絶対たる力を授けよ！」
レステが呪文めいた言葉を紡いだ矢先。
巌のように巨大化したロバートだったモノ――《惑星の意思》が、その大きな顎をもってレステを飲み込んだのだった。
「な……に……っ！？」
「……ッ！？」
思いがけない光景を目の当たりにしたヴァンとジェシカは咄嗟に身構えながら瞠目した。
やがて《惑星の意思》は全長２０フィート近い巨体にまで変貌した。背中からは不気味な腕が三対も生え、頭には獣を思わせる強靱な顎を有している。
とても、この世の生き物とは思えない容貌であった。

その胸もとには、宣言通り《惑星の意思》と同化を果たしたレステの顔があった。
もはや取り返しがつかないことを悟ったのか、ヴァンは人の姿すら棄てたレステを鋭く睨み据え、確固たる思いを持って宣言した。
「僕たちは歩みを止めるワケにはいかないんです。希望に満ちた未来を掴む為にも、あなたを越えていきます。――レステさん」
「来い！　捻り潰してやる。そして絶望を味わい、自分の甘さを後悔しながら死ね！」
共に旅をしていた頃の温かさなど微塵も感じさせない冷酷な口調で、レステはヴァンに死を宣告した。
ヴァンは悲しみに滲む視界を拭って、今まで一撃すら入れることの出来なかった相手と対峙する。
それでも、圧倒的な存在を前に、ヴァンの手が震えていることに気付いたジェシカは、その手を優しく握り締めた。
「心配しないで。ヴァンの背中はいつだって私が支えてるから……
……恐れないで」
「ありがとう、ジェシカ。もう大丈夫だから」
「うん！」
ジェシカに勇気を貰ったヴァンは、ザウドゥの魂が籠められたジョセフのリボルバーを抜いて気合いを迸らせた。
「いくよ、ジェシカ。この先に僕たちが追い求めた未来があるんだ！」
「ええ。最後まで駆け抜けるわよ！」
それにジェシカが呼応し、戦い火蓋は切って落とされた。
先にヴァンとジェシカが動く。
相手の出方が判らない以上、迂闊に距離を詰める事は出来ない。
二人は一定の間合いを保ちながら、弾丸を撃ち込んでいく。まるで未来へと続く扉をこじ開けようとするかのように。
しかし、二人の銃火を浴びても《惑星の意思》は平然としている。外見的にもダメージが通った様子は窺えない。身体が大きい分、そ

れに見合うだけの体力があるのだろう。その分析は二人とも既に終わっていた。
その後もジェシカはショットガンからグレネードランチャーまで試してみるが、思いのほかダメージは与えられていないようだった。
「チッ……！　デカいだけあってタフだな……まったく」
「そうね……。このままじゃ、こっちの弾が尽きるのが先よ」
「こりゃどうも……参ったね」
ヴァンはおどけた風に呟く。
二人が攻めあぐねているところへ《惑星の意思》の攻撃が迫る。背中から生えた三対六本の腕を器用に操り、ハンマーのように打ち付けてくる。その一撃は乾いた大地を穿ち、地面をめくりあげる程の威力を秘めていた。
「ちょ……あんな直撃を食らったらただじゃ済まないわよ……！」
「とにかく奴の攻撃を避けながら突破口を探すんだ！」
「判った。やってみましょ」
容赦なく迫り来る攻撃を躱しながら、二人は突破口の特定に努めた。
消耗戦を余儀なくされる中で残弾数にも気を配りながら《惑星の意思》の身体に弾丸を撃ち込んでいく。
しかし相手は人ならざる怪物。消耗戦ともなれば、こちらの体力が先に尽きるのは当然の結果だった。
「くそ……！　どこから攻めても差がある気がしない」
「そうね……。しかも、最初の方に与えた傷も徐々に回復しているようにも見えるわ。長引けば長引くほどこちらが不利だわ……圧倒的にね」
ダメージが通らないばかりか、微力ながらに与えていた傷まで回復されるという無情な現実を突き付けられ、二人の戦意は着実に削られていった。
それでも果敢に立ち向かう二人だったが、限界を迎えつつある身体が悲鳴を上げた。

「ハァ……ハァ……ハァ……ッ……！」
「ハァ……ハァ……ッ！」
敏捷性を武器に戦局を掻き回していた二人の足が遂に止まった。
《惑星の意思》を睨み付けながら肩で息をする。
「なんだ？　所詮その程度か？」
攻防の最中は押し黙っていただけなのか、唐突にレステが嘲りの言葉を吐いた。
「ならこれまでだ。たっぷりと後悔出来るように、頭だけは残しておいてやる。感謝しな」
「くっ……！」
巨大な腕が振り下ろされるのを見詰めながらもヴァンには抗う術は残されてなかった。レステが言った通り、後悔が脳裏を過ぎりかけた――――刹那。

――斬ッ！！

不意に何かが横切ったかと思えば、今まさに眼前まで迫っていた腕がキレイに斬り離され地面に転がったのだった。
「え……？」
状況が飲み込めず戸惑うヴァンの耳朶に、いつか聞いた馴染みある声が響いた。
「――あなたが死ぬなんて、このわたくしが許しませんわ！」
揺るぎない自信に満ち溢れた声に驚いて背後を振り返ると、そこにはリサ＝ベネット率いる《赤尾の砂蠍団》の面々が屹立していた。
今し方《惑星の意思》の腕を切り落としたのは、傍に控える剣士による一閃のようだった。
「……ベネットさん？　どうしてここに？」
「どうしてもこうしてもありませんわ。わたくしはただ、あなたにお礼を伝えに参りましたのよ」
「お礼……？」

身に覚えがないといった面持ちでヴァンは疑問を口にした。
「なんですの？　その間抜け面は？　まさか心当りがないとおっしゃるつもりではありませんわよね？」
ヴァンとリサが話をしている間、《惑星の意思》の注意をアンソニーとパウロが引き受けていた。
アンソニーは卓越した剣技をもって。
パウロはお手製の爆弾をもって《惑星の意思》を圧倒している。
そんな仲間たちの活躍を誇らしげに眺めながら、リサはヴァンへと向き直り答えを促した。
「で？　思い出しましたの？」
あくまで真剣なリサの眼差しに、ヴァンは思考を巡らせた。
そして。
「あ……ひょっとして？真の強さ？の答え……？」
ヴァンの答えに満足したように、リサは「その通りですわ」と膨らみに乏しい胸を張った。
「……でも……どうして？　僕はまだベネットさんに答えを伝えてないのに……」
「そんなこと。荒野を渡り歩く先々で、嫌と言うほど思い知らされましたわ」
「え？　どういうこと？」
「なにを惚けていますの？　ここまで来た以上、あなたも気付いているはずですわよ？　？人が持つ真の強さ？の答えに」
「？人が持つ真の強さ？の答え……」
リサの言葉にヴァンは、今までの旅で感じて来たことを思い返してみた。
するとその中に、幾度となく心に感じていた？人の強さ？の答えが確かに息づいていることに気付いた。
それはどんな状況にあっても諦めず、生き続けようと抗う心にほかならなかった。
それこそが？人が持つ真の強さ？であると、ヴァンは確信を抱い

たのである。
「どうやら思い出したようですわね。まさかあなたに先を越されるとは思ってもいませんでしたけど、こうなってしまった以上、仕方ありませんわ」
「ベネットさん？」
「次はその心を、どちらがよりよい未来に導けるか、勝負ですわ！」
リサの未来を紡ごうとする純然たる想いを、ヴァンは真っ向から受けて立った。
「もちろんだよ！　一緒によりよい未来を作っていこう！」
ヴァンの宣言にリサは肩すかしを食らったように脱力した。
「一緒にって……。まぁいいですわ。今は目の前の障害物を排除する方が先決なのでしょう？」
「ああ」
「でしたら共闘ですわ！　わたくしたちの力を合わせれば、打ち砕けないものなんでこの世に存在しなくてよ。アーーハッハハ！」
自信の表れとも取れる高笑いから一転、リサは滑るように疾走すると、ロバートが捨てたガトリングを拾い上げ、すぐさま引き金を絞った。
「これでも喰らいなさい！」
息つく暇すら与えず、リサはガトリングをぶっ放す。
数百発にも及ぶ弾丸を撃ち尽くすと、リサはガトリングを捨ててアンソニーとパウロへ指示を飛ばした。
「あんたたち、遠慮はいらないわ。全力で仕留めなさい」
「承知」
「分かったよ！」
阿吽の呼吸でリサたちは華麗な連携攻撃を仕掛けていく。
アンソニーが目にも止まらない剣捌きで《惑星の意思》の腕を斬り落とせば、パウロが爆弾で追い打ちを掛ける。相手の体勢が崩れた隙を逃さず、リサの得物が火を噴いた。
「どうですのッ！」

リサは勝ち誇ったように仁王立ちになると、パウロの爆弾によって生じた砂煙が晴れるのを待った。
やがて視界が晴れ、《惑星の意思》の姿が露わになった。その姿を認めたヴァンとジェシカは思わず目を見張った。
三対六本もあった腕はすべて斬り落とされ、爆弾によって全身は焼け爛れていたのである。見るからに大ダメージを与えたのは明白だった。
「すげぇ……これがベネットさんたちの実力……」
一度、リサと立ち会ったことのあるヴァンだったが、予想を遥かに上回るリサたちの強さを目の当たりにして、驚きを隠せないでいた。
《惑星の意思》はズタズタに引き裂かれた身体を晒したまま微動だにしない。
しばらく様子を窺っていると、不意にレステの目が開きヴァンたちを見下すように言い放った。
「なんだ？　『最後の世代』が五人も集まってみたところで、所詮その程度か？　そんな軽い攻撃じゃ、この身体に傷一つ付けられんぞ！」
「そんな身体で何をいう！」
「見た目などさしたる問題ではない。見た目でしか判断出来るのは、お前たちが愚かである証拠よ」
するとその直後、切断された部分から新たな腕が生え、焼け爛れていた身体も含め、すべてが一瞬の内に再生したのだった。
「「「「「「――――――――ッッ！？」」」」」」
戦う意志を砕きかねない光景を見つけられ、五人の驚きが重なった。
「で……デタラメが過ぎますわ」
これにはさしものリサも表情を引き攣らせた。

「どうだ？　これで己の無力を実感できるか？」
レステが吐いた言葉は、リサの怒りを買うには充分だった。
「わたくしを怒らせましたわね！　いいですわ。再生が得意だっていうのでしたら、元に戻れないくらい粉微塵にしてさしあげますわッ！　――アンソニー！　パウロ！　行きますわよ！」
リサの号令一下、アンソニーとパウロが再び動いた。
さっきよりも鋭い太刀筋で《惑星の意思》の身体を細切れにしていくアンソニー。
パウロもより強力な爆弾を使い、内部からの爆砕を試みる。
リサはひとり、反対方向へ走って行ったかと思えば、自分たちが乗ってきた獣車にでも積んでいたのか、ロバートのそれより二回りはごついガトリング砲を担いで戻ってきた。
そして容赦なく撃ち放ち《惑星の意思》を粉砕していく。
このままいけばリサたちの圧勝は揺るぎない。ヴァンとジェシカはそう確信していた。
だが。

どれほど相手の身体を斬り裂こうとも。

どれほど相手の身体を燃やし尽くそうとも。

どれほど相手の身体を穿とうとも……

リサたちが《惑星の意思》を倒せる未来が二人にはまるで想像出来なかった。

それどころか、リサたちが奴に殺される光景が脳裏に過ぎ始末だった。
ヴァンがそんな思考を巡らしている間にも、リサたちは《惑星の意思》を破壊し尽くしていく。

それでもヴァンの脳裏に過ぎる想像が消えることはなかった。
「うぅ……あぁ……！」
次第にヴァンの心を恐怖が蝕んでいった。
そして遂に、恐れていた事態が現実となる。
リサたちを弄ぶようなタイミングで瞬間再生した《惑星の意思》は、元通りになった腕でリサたちを殴り飛ばしたのだった。
軽々と宙を舞った三人は為す術無く地面を転がり、動かなくなった。
「ベネットさあああああーーーーーーーーーーーーーーーーーーん！！」
リサの身を案じたヴァンが慌てて近寄る。
「ベネットさん！　みんな、しっかりしてよッ！」
ヴァンの懸命な呼び掛けが功を奏したのか、リサたちは辛うじて息を吹き返した。
「な……なんて強さなんですの……。あれは正真正銘の化け物ですわ……」
リサらしからぬ弱音がヴァンの不安に拍車を掛ける。
「リサさん……！　僕たちどうすれば……？」
不安を露わにするヴァンに、リサは微笑を浮かべて告げる。
「あなたがそんな顔をしていると……みんなが不安になりますわ……。ですからあなたは……ただひたむきに未来を……そして自分を信じていればいいのですわ……。あなたのそのひたむきさのお陰でわたくしは……？答え？に辿り着くことができたのですから……」
「自分を信じる……ッ！」
リサの想いを受け、ヴァンの不安が僅かに和らぐ。
だが、依然としてヴァンは内なる恐怖に抗い、震えていた。
そんなヴァンの背中を優しく抱き締める者がいた。
「ジェシカ……？」
普段の彼女なら絶対にしないであろう行為に、ヴァンの心臓が飛び跳ねた。

ジェシカはヴァンの背中に顔を埋めたまま、そっと囁いた。
「リサさんの言う通り……私たちは私たちがやってきたことを信じて駆け抜ければいいんだよ……」
「……」
ヴァンは恐怖を振り払うように、ジェシカの声に身を委ねる。
「正直言うと私も恐いよ。でもね、私はヴァンが居てくれる限り、どんなことも乗り越えていけるって思える気持ちも本物だよ。だから――」
「……」
幼い頃から傍に居て支えてくれていたジェシカの温もりが、ヴァンの内に巣喰う不安や恐怖を少しずつ浄化していった。
「――この想いを荒野に貫いて駆け抜けましょ！」

その瞬間。

ヴァンの心に巣喰っていた不安と恐怖は。

完全に消え去っていた。

「そうだな。こんなところで立ち止まってちゃ、みんなに合わせる顔がねぇよな！」
「うん！」
恐怖に打ち克ち、不安から立ち直ったヴァンは、リサたちを安全な場所まで運ぶと、改めて《惑星の意思》と対峙した。
「まさか、まだ勝つ気でいるんじゃないだろうな？」
脅しを籠めて問うてくるレステに、ヴァンはおどけて見せた。
「なんだ、待っててくれたのか？　案外気を遣える奴なんだな、お前」
「ふざけるな。真面目に答えろ」
憤慨するレステに構うことなく、ヴァンは悠々と弾を込めながら

返す。
「もちろん勝つ気でいるさ。当たり前だろ。僕たちはお前を倒して潤いある世界を実現しなきゃいけないんだからな」
「ククク。これ程の戦力差を見せつけられて、どこからそんな気力が湧いてくるのだ？　愚かにもほどがあるぞ」
「さぁね。……けどまぁそんな気力くらい、負けられないって思えば幾らでも湧いてくるんじゃないかな？　実際今がそうだし」
「貴様……何を企んでいる？」
「さぁね。実は何も考えてないかもよ？」
軽口を叩いてはいるが、その実、ヴァンには見た目ほどの余裕はなかった。
挑発気味の返答はすべて精一杯の虚勢である。
生半可な攻撃じゃ奴に届かないことは実証済みなだけに、攻め手に欠けているというのが、今の二人が置かれている状況だった。
ヴァンはレステの警戒心を煽りながら、頭の中では思考をフル回転させて懸命に突破口を見出そうとしていた。
「フム……。貴様が何を企んでいるのかは知らんが、物理的に痛めつけずとも貴様等の信念を砕く方法は他にもあるのだぞ」
「何を言われようが、僕たちの信念が砕けることはない」
「どうかな？　貴様が知りたがっていた？世界の真実？……。これを知ってもなお、強がっていられるかを見るのも面白かろう」
「……」
ヴァンは黙したままレステを見据えている。
やがてレステは？世界の真実？を語り出した。
「惑星の怒りを買った人類の身に、呪いが刻まれたことは知っているだろう？」
「それがお前たち《荒野の亡霊（ファントム）》じゃないのか？」
「無論、我らも呪いを刻まれた身だが、この呪いには続きがある」
「続き？」
レステはヴァンの動揺を煽るような口調で言葉を継いだ。

「お前は誕生日に祝いの言葉を贈られないことを疑問に思ったことはないのか？」
「……！？」
「何故大人たちが《オアシス》のことを涸れた伝説と言って相手にしないのか、疑問に思ったことは？」
レステの言葉に、それまで漠然と感じていた可能性が鎌首をもたげた。中でも一番鮮烈に結びついたのは、ジョセフの地図に記された、２０を×印で消したあの映像だった。
「……まさか！？」
瞠目するヴァンにレステはしたり顔で言葉を継いだ。
「この世界に生きる人間は２０歳を迎えた瞬間にその身に呪いが刻まれる。そして、呪いを受けた者は《オアシス》の出現に伴いその存在が消滅する運命にあるのだ」

その瞬間、ヴァンの中であらゆる疑問が連鎖的に解けていった。
レステが指摘した誕生日の疑問と大人たちが《オアシス》に見向きもしない理由。
五年前、ガンナーになって荒野に出て、《オアシス》を見つけたいと言った時に、ジョセフが言った『一年しかない』という言葉の意味。
旅で訪れた先々の町で、大人たちが口にしていた『大人の代わりに』という言葉。
心のどこかでその可能性を疑いながら、決して信じたくなかった真実を知ったヴァンは、俯いて口を噤んだ。
「……」
「ククク。絶望のあまり声も出ないようだな。これでお前たちが守ろうとしていた？人々？は意味をなさなくなった。そんな状態では信念も貫けまい？　あとはゆっくり殺してやるから安心しな。約束通り頭だけは最後まで残しておいてやる」

「……」
レステの嘲りにもまったく反応を示さず、ヴァンは俯いたまま。
その姿に興が削がれたのか、レステは全てを終わらせるように三対六本の腕を振り上げた。
そしてその腕を振り下ろそうとした瞬間。
「言いたいことはそれだけか？」
と、冷ややかに響く声で問うた。
「クッ。今にも崩れそうな心でなお、虚勢を張りおるか」
「何とでも言えばいい。だけど、そんな事じゃ僕たちの信念は砕けやしない！」
「私たちには叶えたい想いがあるから！」
ヴァンとジェシカはレステに向かい合って佇み、固く握りしめた合った手を水平に伸ばすと、交わした約束を胸に自分たちの信念を――そして覚悟を口にした。
「「たとえそれが真実だったとしたら、失うだけの最初は辛く悲しいけれど――」」
ピタリと息の合ったテンポで、二人の口から滔々と想いが溢れ出す。
「「その悲しみもきっと、未来への礎になると信じてるから――」」
そっと瞳を閉じた二人は互いの温もりを確かめ合い、想いのすべてを紡ぎ上げた。
「「希望に満ちた未来を掴むまで、決して諦めたりしないッ！」」
二人が紡ぎ上げた想いを、レステは一笑に付した。
「おかしな話だ。あれほど犠牲を嫌っていたお前が、最後の最後で

出した答えがそれとはな。ククク。これを滑稽と言わずになんという？」
レステがヴァンたちの想いを嘲笑した直後。
「――お二人ならきっと、その答えに辿り着いてくれると信じていました！」
不意に響いたおっとりとした声に、ヴァンとジェシカは慌てて振り向いた。
すると視線の先には、なにやら大きな鞄を担いで、小型獣車に跨るシンシアの姿があった。
二人はレステの動きに注意を払いながら、急いで駆け寄った。
「シンシア！？　どうしてここに？」
「そんな話は後です。わたしがここに来た理由は他でもありません。荒野に住む人々の想いをお二人に届けに来たのです」
「人々の想い……？」
「はい！」
そう言うとシンシアは鞄を開いて見せた。
「これは……？」
鞄の中に収められていたのは、大量の手紙だった。
二人はその中の一通を手に取り、手紙を開いて目を通した。
文面にこそ違いはあれ、内容はどれも同じだった。
それは。
『過去のツケは大人である自分たちが引き受ける。
だから、お前たちは希望に満ちた未来を作っていってくれ』
というものだった。
「この手紙を書いてくれたのは、みんなお二人と出会ったことで、また、お二人の噂を耳にして考えを変えることを決めた方たちなんです」
「町のみんなが」
「そうです。みなさん、お二人に出会えたことをとても感謝していました。『自分のことを考えるあまり、同じあやまちを繰り返すと

ころだった』って。お二人の行動が、みなさんに呪いの連鎖を断ち切る勇気を与えたんです」
荒野に生きる人々の想いを代言するかのように、シンシアは力強く告げる。
「だから、みなさんの覚悟に応えて、未来を切り開いてください。これはお二人だけの戦いではありません。お二人の背中は、荒野に生きるみんなが支えていますから！」
そう言ってシンシアは、二人の手を取って力一杯握りしめた。
「何も恐れる必要はありません。みんなの想いを籠めて撃ち放てば、それはきっと《惑星の意思》に届きます。どうか自分を……そしてみなさんの想いを信じてください」
シンシアが届けてくれた人々の想いを真っ直ぐに受け止めたヴァンとジェシカは、力強く頷いて、踵を返した。
「ありがとう。みんなの想い……必ず届けてみせるよ」
揺るぎない自信に満ちたヴァンの言葉に、シンシアは満面の笑みを浮かべて見送った。
「はいっ！」
シンシアの声を背中に受けて、ヴァンとジェシカは戦いの場へと舞い戻った。
そして、怯むことなくレステを見据え、凛然と言い放った。
「決着をつけよう。僕たちはこの六発の弾丸に、すべての想いを籠める！」
「いまさらお前らに何が出来る？　その想いが無為に終わった時、お前らの命も尽きると思え。まァ、それまでせいぜい足掻くんだな」
レステは余裕を見せつけて二人を見下ろすと、三対六本の腕を正面に持って来て防御の体勢をとった。
完全に守りに入ったレステを一瞥すると、ヴァンはジェシカに合図を送った。
ヴァンはリボルバーを水平に構え、ジェシカはヴァンの懐に寄り添った。そして銃を握ったヴァンの手を支えるように添えると、右

手で撃鉄を起こした。
「いくよ、ジェシカ」
「ええ」
シンシアが届けてくれた人々の想いを籠めて、引き金を引いた。
撃ち出された弾丸は防御を固めた《惑星の意思》の腕を大きく穿った。それは今までのどんな攻撃よりも強力な一撃だった。
「な……なんだその弾丸は!? どうしてこれ程の威力を生み出せるッ!?」
ついさっきまであったレステの余裕は、今の一撃で消し飛んだ。
今度はレステが恐怖する番だった。
理解不能な事態に慄くレステに、ヴァンは当然だと言わんばかりの口調で告げた。
「言ったはずだ。この弾丸にすべての想いを籠めると! これはこの荒野で、未来に希望を託したいと願う人々の、心が生み出した力だ!」
言葉の終わりと同時に、ヴァンは立て続け二発の弾丸を撃ち放った。
「ぐおおおおおおおおおおおおおお…………ッ!!」
腕に続き、肩口から伸びた本来の腕までもが消し飛び、レステが苦悶の声を上げる。
「何故だ……何故再生できない……ッ!?」
得意の瞬間再生も機能しなくなり、レステの表情に焦りの色が目立ち始めた。
「判らないか? それはこの弾丸に籠められた想いが、潤いある世界を取り戻そうとする?再生?の力だからだ!」
「なんだと……? まさか……そんなことが……!」
「心から惑星の再生を願えば、きっと惑星自身も応えてくれる。荒野に生きる人々の想いが、破壊を司る身体の再生を拒んでいるんだ!」
揺るぎない確信と共にヴァンは両足に狙いを定め、さらに二発の

弾丸を撃ち放った。
「ぐがあああああああああああああああああああああ……ッッ！！」
バランスを失った《惑星の意思》の身体は大きく揺らぎ、レステの顔が埋め込まれた胸部を晒す形で倒れた。
「僕たちは過去の失敗から目を背けたりしない。どんな失敗も人類が歩んだ歴史の一部だから……その失敗を活かし、次の成功に繋げられるような力強さに満ちた世界を作っていくことを誓うよ」
まるでレステから新たな時代のバトンを受け取るかのように、ヴァンは悲壮な決意を湛えて宣誓した。
「……クッ。その理想がどこまで通用するか、見届けさせてもらうぞ」
レステもまた、かつて自身が成し得なかった想いのバトンをヴァンたちに託すように呟いた。
「はい。見ていてください。僕たちが作る新しい世界を！」
「フッ」
レステは今際の際に多くを語らず、ただ挑戦的な笑みを浮かべただけだった。
二人は顔を見合わせて頷くと、互いの温もりに身を委ねるように銃を構えた。
ジェシカが最後の撃鉄を起こす。
「ジェシカ……。一緒にいこう。緑と潤いと――希望に満ち溢れた未来へ」
「うんっ！」
そうして二人は最後の弾丸に万感の想いを籠めて――
世界を希望へと導く弾丸を撃ち放ったのだった――――――。

【THE　FINAL　BULLET――？新たな時代を担う者たち？――】

あの後、《惑星の意思》と共にレステを葬ったヴァンとジェシカの手元に四つの《惑星の石》が揃い、四つそれぞれの《石》を祭壇に捧げた。

すると、たちまち荒野に点在する砂海が引いていき、その跡に《オアシス》が現れたのである。シンシア曰く、それはかつてこの惑星に存在していた？海？と呼ばれる、生命の水を湛えるものだということが判明し、ヴァンは喜びに打ち震えた。

そして、この喜びを一刻も早く家族と分かち合おうと、ヴァンとジェシカはシンシアを連れて故郷『レーデリート』まで帰ってきたところだった。

村に着くや否や、二人は両親との再会を心から喜び合った。

その日の夜。

一休みしたヴァンとジェシカが外に出ると、村はすっかり宴模様一色に包まれていた。

宴には旅先で出会った人たちも駆けつけてくれており、ヴァンとジェシカには嬉しいサプライズとなった。

「シンシア。ちょっと遅くなったけど、誕生日おめでとう」

「あ……はい。あ……ありがとうございます」

「ん？　どうしたんだ？　世界に潤いが戻ったんだ。もっと楽しまなきゃ損だぜ？」

「そうですよね……」

「……？」

一向に笑顔を見せないシンシアの様子を心配したジェシカが声を掛ける。

「ねぇ、ホントに大丈夫？　気分でも悪い？」
「いえ……そうじゃないんですけど……」
シンシアは歯切れ悪く口籠もると、意を決したように口を開いた。
「あ……あのっ！　ジェシカさん、ヴァンさんっ！」
「なに？　急に改まって」
「そ……その……わたしたちはどこにいたって……どんなに離れたって友達ですよね？」
涙声で打ち明けるシンシアに、ジェシカは優しく答える。
「あたりまえじゃない。ね？　ヴァン」
「ああ、もちろんだ。でも、どうしたんだ？　急に」
「いえ……なんでもないんです。そのことを確認出来ただけで充分ですので……」
そう呟くとシンシアはジェシカの胸に顔を埋めたシンシアは、嗚咽を上げて泣き始めた。
「……ちょ……ちょっと、シンシアってば」
泣いている理由を聞いてもシンシアはかぶりを振るばかり。
結局、シンシアが口にした質問の真意が判らないうちに宴はお開きとなった。

ヴァンとジェシカがシンシアの涙の理由を知るのは、その翌朝のことだった。

†

一夜明けて。
ヴァンとジェシカは机の上に置かれた二通の手紙を見つけ、衝撃の事実を知ることとなった。
一通目の手紙には、ヴァンたちに希望に満ち溢れた未来を作っていって欲しいという、大人たちの総意でもある願いが綴られていた。
そして二通目の手紙には、きちんとお別れを言えなかったけど、

二人に出会えてよかったという、シンシアの想いが綴られていたのである。
　二通の手紙を読んだ二人は回避したとばかり思い込んでいた現実を突きつけられ愕然とした。
「じゃあ……本当に２０歳以上の人たちは消えちゃったっていうの？」
「……この手紙にこの状況だ……そう考えるしかないよ」
「そんな……！　じゃあシンシアは昨日……この事を伝えようとしていたの？」
「恐らく……」
　ヴァンは悔しさに歯を軋ませて言葉を継ぐ。
「もっと早く気付くべきだったんだ……。『最後の世代』の僕たちでさえ１９歳なんだから、これから誕生日を迎えようとする人が２０歳未満なワケないじゃないか……！　そのことに気付いてさえいれば……あと三日早く呪いを解けたかも知れないのに……っ！」
　悔しさのあまり、ヴァンは机を殴りつける。
「……シンシアの誕生日は三日前……つまり、私たちに手紙を届けるため、西の地に来た時には既に誕生日を迎えていたんだよ……。？世界の真実？の話も聞こえていたと思う……それを知った上で、シンシアは私たちが作る未来に希望を託してくれたのよ……」
「けど……こんなことって……！」
「私も悲しいよ。……けど、私たちが最善を尽くしたことは……きっとシンシアも判ってくれているはずだと思うよ。だから昨日、あんな質問をしたんだよ……心の中でずっと一緒で生きていたいと願って……」
「……ッ！」
「きゅぅきゅぅ」
　ヴァンたちの悲しみが伝わったのか、不意にアクアが悲しみに満ちた鳴き声を上げた。
「アクア……あなたも悲しんでくれるの？　……そうだよね、シン

シアはあなたの名付け親だものね……。ありがとう、アクア」
「きゅぅきゅぅ」
「……そうだな。いつまでも悲しんでるワケにはいかないよな。僕たちに未来を託してくれた人たちのためにも……僕たちが新しい時代を担っていかなきゃだよな！」
「きゅきゅきゅーい！」
世界から大人たちが消えてしまったのは悲しい。
だけど、それはあの日に覚悟出来ていたことだと己を奮い立たせる。
ヴァンとジェシカは大人たちやシンシアの悲しみを胸に、決意を新たにした。
「あ、そういえば」
不意に何かを思い出したジェシカが、ウエストポーチから一本の鍵を取りだした。
「それは？」
「シンシアの書館の鍵よ。まさかこんな形で遺るなんて思ってもみなかったけどね」
「……そうだな」
しんみりとした空気を振り払うかのように、ジェシカが気合いを籠めて叫んだ。
「そうと決まればこうしちゃ居られないわ。すぐに出発するわよ！」
「奇遇だな。僕もたった今、そう思ってたところさ」
「ふふっ。当たり前でしょ。何年あんたと一緒にいると思ってるのよ」
「さすがは僕のパートナーだ」
「けど私、自分より弱い男は嫌いだから、精々頑張りなさいよね！」
「へっ。負けるかよ」
「そうそう、その意気よ」
慌ただしく旅の準備を整えた二人は、再び故郷の地を後にする。

大人たちの想いを背負い、約束を果たすために。

「いこう、ジェシカ。この世界に残された『最後の世代』に会いに！　そして僕たちの世代を『始まりの世代』へとするために！」

「ええ、そうね」

こうして《惑星・アクアルド》は、少しずつではあるが着実に、再生への道を歩み始めたのだった。

〈了〉

【THE　FINAL　BULLET――？新たな時代を担う者たち？――】

最後まで読んで頂きありがとうございます。

未熟さがありありと見て取れる作品ではありますが、どこか一行、一言でも気に入った箇所がありましたら幸いにございます。

それではまた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4865w/

WILD　GUNNER

2011年9月8日03時20分発行